

# グローバル社会における 平和構築のための 大学間ネットワークの創成

— 女性の役割を見据えた知の国際連携 —

平成24(2012)年度 事業実施報告書  
東ティモール国際調査報告書

2013年3月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター



○事前勉強会・座談会・大学間連携イベント



◀カンタティモール上映会、  
広田監督講演

井上健氏座談会▶



◀ 大学間連携イベント「大学生  
による東ティモールにおける平和  
構築活動の可能性」



東ティモール国立大学  
早稲田大学山田ゼミ  
NPO 法人 LoRo SHIP  
中央大学崎坂ゼミ  
奈良女子大学  
NGO Belun の皆様と





○現地調査活動

NGO Belun での聞き取り調査。▶



▶ コモロ村サンペドロ中高一貫校 (私立) にて。「ふるさと」「幸せなら手をたたこう」合唱を披露。



▲NGO Ba Futuru での聞き取り調査



▶ UNTL(東ティモール国立大学)Peace and Conflict Center、アンテロ教授と学生と。テーマ別に3つのグループに分かれフィールドワークを実施。

▼平和構築グループ@ディリ市内。

レジスタンスミュージアム、ローカルマーケットに徒歩や、タクシーにて移動し調査を行った。



ギュー詰めタクシー。料金\$2。





トイレ・衛生グループ  
@ディリ市内 national hospital。  
他、public hospital、local  
pharmacy、UNTL 医学部を訪問。

食・栄養グループ@ディリ市内。  
ローカルマーケットでの買い出し後、アンテロ教授邸  
で現地の一般的な昼食の調理。



平和構築グループ@UNTL。  
ディリ市内でのフィールドワーク後、UNTL 構  
内で平和構築に関するディスカッション。



## はじめに

本調査は、グローバル協力センターが主催し平成 23 年度に開催した学生による国際調査（スタディツアー）です。学年や専攻の異なる学生がグローバルな視点から「共に生きる」社会について学び、実践し、発信する活動の一環として実施しました。

東ティモールでの実施は、昨年度に引き続き 2 回目となります。東ティモールは、昨年 5 月、独立 10 周年を迎え、12 月末に 1999 年から行われてきた国連平和維持活動が撤退し、新たな国造りのステージに入りました。独立までの戦い、1999 年の独立を問う住民投票前後の騒乱、2006 年の東西対立を発端とした暴動等様々な紛争を経てきた東ティモールでは、1999 年からこれまで、国家の平和の推進に取り組む「平和構築」という概念に焦点が置かれ、外国からの援助による影響を大きく受けてきました。ここ最近の動向としては、国連東ティモール統合ミッション（UNMIT）の撤退前後から、これまで以上に東ティモールの人々が自立して築く社会づくりに力点が置かれ、試行錯誤が続けられています。

このような変遷の中にある今回の国際調査では、2 つの新たな試みを加えました。

一つ目は、東ティモールの多様な国造りにおける現状と課題について、東ティモールの人々の思いに触れつつ、学生の関心に応じて設定したテーマに絞って調査を行えるよう、フィールドワークを中心に企画したことです。特に東ティモール国立大学学生とのテーマに応じたフィールドワークは、異なる国の学生同士が議論し協力し合い、コミュニケーションを通して人間関係を構築し、自らの疑問をぶつけながら、事前にアレンジされていないありのままの東ティモール社会にふれる機会になったと思います。自由度の高い調査プログラムを組むにあたっては、事前にフィールドワーク講義を行ったり、ツアー中は、調査の不明な点、参加者が感じた疑問や感想を、その日の終わりに確認・議論し合う振り返りミーティング、最終日に調査の結果を発表するグループ発表の時間を設け、昨年よりも自分の関心を掘り下げながら、また同時に他の学生の視点を知り、自分の考えを深める機会を増やしました。

二つ目に、今年度の特に注力した点は、昨年度の参加者からのリクエストがあった、東ティモールのテーマを契機として他大学の学生とつながりを持つということです。事前勉強会（映画『カンタ！ティモール』の上映及び監督による講演会、元国連東ティモール統合ミッションガバナンス部長による講演会等）、東ティモール大学間連携イベントには、東ティモールに関心を持つ早稲田大学社会科学学術院山田満ゼミ、学生団体である NPO 法人 LoRo SHIP の皆様にご協力いただき、他大学の学生にも数多く参加いただきました。特に 2012 年 12 月に行った東ティモール大学間連携イベントでは、学生ができる平和構築活動をテーマに、東ティモール国立大学、早稲田大学、中央大学、奈良女子大学、埼玉大学、東京大学、青山学院大学、東洋英和女学院大学等多くの大学の学生にご参加いただきました。他大学やグループの活動内容を報告しあい意見をぶつけ合うことで、多様な考えや他の学生の活動に刺激を受け、学外につながりを広げる貴重な場となりました。このような事前

の準備過程で培ってきた学生同士のネットワークに加え、ツアー中にも育んだ現地の人々とのつながりを大切にして、これからも学生が自分の立場でできる活動や研究を継続し、自分の問題意識を深めることを願ってやみません。

こうした充実したプログラムが実施できましたのは、事前勉強会、大学間連携イベント、公開講演会、スタディツアーの実施にお世話になりました多くの方々のご協力の賜物です。早稲田大学社会科学学術院山田満ゼミ、NPO 法人 LoRo SHIP、『カンタ！ティモール』の監督広田奈津子様、元国連東ティモール統合ミッションガバナンス部長井上健様、東ティモール国立大学平和紛争研究センター、NGO ピースウィンズ・ジャパン、NGO 沖縄平和協力センター、UNICEF 東ティモール事務所、現地 NGO の Belun、Ba Futuru、FUNDEF、コモロ村役場、聖ペドロ中高一貫校、レテフォホ郡診療所、レテフォホ小学校の関係者の皆様に心からのお礼を申し上げます。

平成 25 年 3 月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター 講師

桑名 恵

## 目次

はじめに

### I 東ティモール国際調査の概要

1. 実施概要 .....	1
① 国際調査実施の背景	
② 東ティモール調査の背景	
③ 全体スケジュール	
2. 現地調査日程 .....	3
3. 参加者名簿 .....	4
II. 調査報告書 .....	5
III. 訪問記録 .....	51
IV. 資料 .....	83

# I. 東ティモール国際調査の概要



## 1. 実施概要

### ①国際調査実施の背景

「グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成—女性の役割を見据えた知の国際連携—」事業3年目となる本年度は、平成23年度に発足した「共に生きる」スタディグループ参加者による国際調査活動を拡充し、ベトナム、フィリピン、東ティモールの3か国で実施した。各国の調査においては「共に生きる」社会とはなにか、何をなすべきかという学生の問題意識を国際協力・平和構築の現場の調査を通じて具体化し、学習・研究・行動の次のステップにつなげることを念頭におき、地域格差や貧困の状況を理解するとともに、社会経済開発と平和構築に向けた様々なステークホルダーによる各分野の取り組みの見学と関係者のインタビューを実施した。

### ②東ティモール調査の背景

東ティモールは、東経123～127度、南緯8～10度に位置し、東南アジアのティモール島の東半分と西ティモールの飛び地オイクシ県からなる。国土は日本の岩手県程度の大きさで、山岳地帯の多い地形である。16世紀にポルトガルによって植民地化されてより、第二次世界大戦中の日本軍による占領、また、1976年のインドネシア軍の侵攻、27番目の州としての併合宣言以後インドネシアの支配下に置かれるという、4世紀にも亘って他国からの占領支配を受けてきた。スハルト政権崩壊後、後任のハビビ政権の元1998年の独立を問う住民投票で独立が決定した後の暴動で、人口の40万人以上が難民・国内避難民となった。2002年に21世紀初めの独立国としての歩みだしたものの、今日まで国造りの道のりは平たんなものではなかった。1999年の独立を問う住民投票で独立が決定した後の暴動で、人口の40万人以上が難民・国内避難民となった。新しい国造りに向けて、国連をはじめとする大規模に実施されてきた支援は紛争後の平和構築の成功例として取り上げられることもしばしばだった。しかし、2006年4月、暴徒が反政府デモ化し、約15万人が国内避難民となった2度目の人道危機では、紛争終結後の国際支援の対応の困難さを改めて浮き彫りにした。世界銀行などによれば、これらの社会不安の背景には、失業のため都市部に出てきた青年層が一部ギャング化し、治安が悪化するなどの人口の半分を占める若年・青年層の社会統合の立ち遅れに要因があったことが指摘されている。

昨年度に引き続き、2回目となる本調査では、2012年大統領選挙、議会選挙を経て、12月にUNMITが完全撤退し、東ティモール自国民による新たな国造りのフェーズに入った東ティモールにおける平和構築、開発の現状・課題を調査した。学生の関心に応じて3つのグループを設定し（①食・栄養、②平和構築、③保健衛生）、国連機関、学校、NGO、コーヒー農家等への訪問、東ティモール国立大学生とのフィールドワークを通じて、グループワークによる調査を行った。

### ③全体スケジュール

参加者の募集・選考 9月～10月

事前勉強会の実施 10月～1月

- ・桑名講師による東ティモール概要講義
- ・「カンタ！ティモール」上映会、広田奈津子監督との意見交換会
- ・大学間連携イベント発表にむけての勉強会  
—お茶大スタディグループ内、早稲田大学山田ゼミ、NPO 法人 LoRoSHIP との勉強会
- ・井上健氏（元 UNMIT ガバナンス部長・主席ガバナンスアドバイザー）との座談会
- ・桑名講師によるフィールドワークの手法に関する講義
- ・UNTL（東ティモール国立大学）学生とのフィールドワークリクエストシート作成
- ・安全講習会
- ・UNTL／大阪大学大学院留学生による Tetun 語講座（Skype）

大学間連携イベント 12月22日、23日

- ・公開講演会「東ティモール：地域社会（コミュニティ）からの紛争予防、平和構築」
- ・大学間連携イベント「大学生による東ティモールにおける平和構築活動の可能性」

現地調査 2月

調査報告会 平成25年4月(予定)

徽音祭パネル展示 平成25年11月(予定)

## 2. 現地調査日程

2月18日 (月)	成田発 GA881 デンパサール着
2月19日 (火)	デンパサール発 MZ8480 ディリ着 NGO Belun 訪問
2月20日 (水)	午前：Comoro 役場、中高一貫校（私立）訪問 午後：NGO Ba Futuru 訪問
2月21日 (木)	午前：東ティモール国立大学学生とのフィールド調査 (グループ別：食・栄養 GP、平和構築 GP、トイレ・衛生 GP) 午後：UNICEF 訪問 NGO FUNDEF 訪問 NGO PWJ 訪問
2月22日 (金)	午前：エルメラ県レテフォホ村への移動 午後：NGO Belun District Coordinator への聞き取り Sub-District Hospital 訪問 コーヒー農家訪問
2月23日 (土)	午前：レテフォホ村小学校（公立）訪問 レテフォホ村ローカルマーケット視察 ディリ市への移動 午後：グループワーク（アクションプランづくり）
2月24日 (日)	午前：グループ別アクションプラン発表 ディリ発 MZ8490 デンパサール着
2月25日 (月)	デンパサール発 GA880 成田着

### 3. 参加者名簿

氏名	所属	学年
うえむら かなみ 植村 奏水	文教育学部グローバル文化学環	4
ふなわたり めぐみ 船渡 恵	文教育学部グローバル文化学環	4
たけだ まゆこ 武田 真佑子	文教育学部言語文化学科	3
いけだ あしゅう 池田 亜柊	文教育学部グローバル文化学環	2
えのもと あやか 榎本 絢夏	生活科学部食物栄養学科	2
かさ ちはる 笠 智遥	文教育学部グローバル文化学環	2
すずき みほ 鈴木 実穂	文教育学部グローバル文化学環	2
まるやま しおり 丸山 栞	文教育学部グローバル文化学環	2
うえだ ゆりか 上田 由理佳	生活科学部食物栄養学科	1
さいとう みさき 齊藤 美咲	文教育学部人間社会学科	1
やぎした あかり 柳下 明莉	文教育学部人間社会学科	1
<b>引率者</b>		
くわな めぐみ 桑名 恵	グローバル協力センター	講師
こまだ ちあき 駒田 千晶	グローバル協力センター	AA

## II. 調査報告書



## 東ティモールの保健医療分野における諸課題

○植村 奏水（文教育学部グローバル文化学環 4 年）

### 1. 調査のテーマ

国づくりの過程にある国家における保健医療分野への取り組みや援助の果たす役割について現状を知りその課題を考察する。

### 2. 調査設問

東ティモールの保健医療分野における課題は何か。

### 3. 調査結果

まず、東ティモールの国家としての保健医療分野に対する認識を確認しておきたい。東ティモールの憲法では、健康と医療は全ての東ティモール人の権利であり、東ティモール保健省（Ministry of Health Timor Leste）はその権利を保障し促進する義務を負うと定められている。保健省は「Healthy East Timorese people in a healthy East Timor」をビジョンとして掲げ、ミッションとして「すべての東ティモール人の保健サービスに対する availability、accessibility、affordability を保障する」ことと、「保健分野のセクター間の調整を行う」こと、さらに「コミュニティや他の様々なステークホルダーの関与を促進する」ことを謳っている。

これを踏まえた上で、実際に東ティモールで行った調査の結果を以下に記す。

#### <UNTIL 学生とのフィールドワーク>

2月21日に行った UNTL（東ティモール国立大学）の学生とのフィールドワークでは、お茶大の保健衛生グループ2名と AA の駒田さん、UNTIL の学生 2 名（Lia、Anna）でディリの national hospital、public clinic、ディリ市内の薬局を訪問した。

national hospital は広い敷地に診療科や機能別に建てられた平屋の建物が並び、屋根のついた渡り廊下でそれぞれの建物が繋がれている

ような造りになっている。建物の間は芝生の中庭のようになっており、建物が平屋なこともあり全体的にとっても明るい印象を受ける。病院自体はインドネシア時代からあったようだが、現在のものは 2008 年に世界銀行や EU などの出資によって再建された。UNTIL の学生によれば、普段は地域の medical center に行き、national hospital は緊急の場合に行く場所なのだそう。公立の病院は大小に関わらず診療費が全て無料であり、処方された薬



写真 1 national hospital

のみ薬局で購入するシステムになっている。私立の病院は有料で、UNTL の学生は「very expensive」と言っていた。

廊下で Lia の友人というキューバ人の医師に会ったが、彼は東ティモールの医師をトレーニングするためにこの病院に派遣されており、今後地方にも派遣される予定だという。キューバによる医療協力は 2004 年から開始され、キューバから医師団と大規模なメディカルトレーニングプログラムが持ち込まれた。キューバによる医療協力は、プログラムが地方医療やプライマリーヘルスケアに焦点を当てていたり、高価なテクノロジーよりも人的資源の活用に力を入れるといった途上国のニーズに合ったものであるという点や、医学生を公共精神を持ったコミュニティのヘルスワーカーとして育て、それが頭脳流出を防ぐという点などから、南南協力のモデルケースとして評価されている。2009 年 12 月時点でキューバ人の下で学ぶ東ティモール人の医学生は国内外で 870 人にのぼり、東ティモールの医療分野におけるキューバの影響力は非常に大きいと言えることができる。

私たちが見学している最中にも、廊下は洗浄機で掃除をされ、病院が衛生的に保たれている印象を受けた。一方で、建物の裏には使用済みの酸素輸送用のチューブが放置されていたり、大量の段ボールが積まれていたり、病院の外に一步出れば下水がむき出しに流れていたりという状況も垣間見られた。

次に訪れた public clinic は見学の許可が出ず、短い滞在になったが、普段ここを利用している Lia によれば、この病院には複数の医師がおり、総合病院の役割を果たしているとのことだった。病院の中にはたくさんの患者が並んで待っていたが、特に子ども連れの女性の姿が多く見られた。

次にディリ市内のある薬局を訪れた。この薬局はインドネシア人の所有で、働いているスタッフもインドネシアから来ている。彼女はインドネシアの高校で薬剤について学んだそうだ。置いてある医薬品や医療機器は全てインドネシアが輸入し、それを東ティモールに持ち込んでいる。商品は一般的な医薬品や医療用品から、医療従事者向けの医療用手袋や注射器まであり、個人の医師が買い付けに来ることもある。UNTL の学生によれば、日本のように医薬品を医師への相談なしに買うことはなく、病気になった際にはまず医者にかかり、処方箋をもらって薬局を訪れるのだそうだ。



写真 2 public clinic



写真 3 薬局

<エルメラ県レテフォホ郡 sub-district hospital>

2月22日にレテフォホの sub-district hospital を訪問した。ここで働く助産師の女性が施設の案内をし、私たちの質問に答えてくれた。この病院は一般の病棟と妊婦用の病棟の2施設から成り、敷地内には栄養失調の患者に処方するためのトウモロコシの粉末を貯蓄する倉庫も建てられている。スタッフは5人おり、内訳は女性の医師が1名、男女の看護師が2名ずつとなっている。この医師はキューバでトレーニングを受けた人物で、総合診療医である。患者は1日平均125人ほど来院し、5歳までの子どもと女性の患者が多い。女性の患者が多いのは、栄養指導の教室が開かれていることや、妊娠による受診が多いためである。栄養指導の教室は妊婦を含むすべての女性を対象として開かれており、食物の摂り方や水を煮沸することなどが指導される。診察までの待ち時間は1から2時間の場合が多いが、週に2回のマーケットが開かれる日には特にたくさんの患者が訪れる。公立の病院であるため、診療は全て無料で行われ、運営資金はオーストラリア政府の援助を受けている。医療機器や医薬品は全て政府が支給しており、助産師の女性によれば不足しているものはないとのことだった。

妊婦用の病棟には、分娩台をはじめ、赤ちゃんを温める機械などが置かれ、充実した設備が見られた。UNICEFの支援によってすべての妊婦に母子手帳（テトゥン語で「お母さんとお父さんのための手帳」と書かれている）が配られ、妊婦への指導が行われている。しかし、家が遠いために検診に来なくなる母親もいる。病棟には避妊の方法を示したポスターなども貼られており、出産は2年の間隔をあけるように指導されているが、実際には50%しか守られていないという。

母子手帳の他にも病院内の至る所でUNICEFという文字を見かけ、援助のプレゼンスの大きさが見て取れた。

インタビューに答えてくれた助産師の女性は保健省管轄の公務員のレベル5に相当し、給与は月に510ドルである。彼女のように地方の医療施設で24時間態勢で待機している者も、国立病院でローテーションで働いている医療従事者もレベルが同じであれば一律で同じ給与であり、彼女はこれに対して不公平であると感じているという。

#### 4. 考察

はじめに、東ティモール保健省の掲げるミッションとフィールドワークの調査結果とのギャップを検証する。すべての公立医療機関は無料で診療を行っているため、affordabilityに関しては保障されていると言えるだろう。しかし、accessibilityに関しては、レテフォホでの聞き取りで家が遠いために妊婦の定期検診に来なくなる母親がいるという指摘があったように、保障されているとは言い難い。患者の待ち時間が1~2時間にのぼることも考え合わせると、医療施設の不足に加えて医療従事者の不足も東ティモールにおける医療の課題であると言える。

上記のように affordability は、医療サービスを無料で提供することで確保されている

が、長期的な視点で見た場合、税収による財政が盤石でない東ティモールにおいては、医療費が財政を圧迫することが必至である。持続可能な医療を実現するためには、医療分野に限らず、経済産業分野での課題を解決しなければならないだろう。

また、急激な人口増加も大きな問題である。人口増加が医療費の増大につながることはもちろん、早いペースで子どもを出産することが女性の健康に与える悪影響も医療分野に対する負のインパクトである。レテフォホの sub-district hospital のような家族計画の取り組みに対して一定の評価はできるものの、確実に効果を出すためにはさらに工夫が必要である。

今回の調査では、医療施設の設備や医療機器、医薬品などの不足といった問題は見られなかった。これは様々なアクターによる援助のたまものと言えるが、国の医療を一からつくらなければならなかった東ティモールにおいては、必要な応急処置であったと考えられる。しかし、いつまでも援助頼みでいられるはずはなく、援助に頼らない東ティモールの医療をつくっていくことは、保健医療分野における大きな課題である。現在はキューバの支援により東ティモール人の医療従事者を育てる段階にあるが、この医療従事者たちが次の世代の医療従事者を育てられるように、医療分野の教育機関や教育制度を同時に整えていく必要があるだろう。

最後に、地方医療の課題が考えられる。都市よりも過酷な環境で働いている医療従事者に対して、一定の優遇をするか労働環境の改善をしなければ、地方医療は衰退しかねない。

全ての東ティモール人の権利としての健康と医療が保障されるためには、これらの諸課題を解決していく必要がある。

## 5. 調査に参加した感想

自由度の高いプログラムでフィールドワークを行えたため、自分の関心事項に対する理解を深められたと思う。今回調査した分野に関して、まだ入門的な知識しか持っていないが、この調査を通じて様々な疑問が出てきたため、それを今後の学びにつなげていきたい。

## 6. 調査を経て今後行動してみたいこと

途上国の医療ニーズについてより詳細に調べ、その中で企業が果たす役割を考えたい。また、医療人類学の視点も学び、西洋医療だけではなく多角的なアプローチで望ましい医療の在り方を考察し、それを企業活動に反映させたい。

## 7. 参考文献

The Reality of Aid, (2010) *South-South Cooperation: A Challenge to the Aid System?*, Quezon City, IBON Books.

Ministry of Health Timor Leste, The Ministry of Health's Vision Mission Values and Goals, <http://www.moh.gov.tl/?q=node/2> (2013年2月27日閲覧)

## サステナブル・トイレットを実現するには

○ 丸山 栞（文教育学部グローバル文化学環 2 年）

### 1. 調査のテーマ

東ティモールのトイレの実態と改善策を探る。

### 2. 調査設問

東ティモール、とりわけ地方や村落などインフラが未整備な地域では、トイレが著しく不足している。齊藤(2012)によれば、2010 年時点での衛生的なトイレの普及率は 46.8%であり、農村部ではその数値は 35.2%にまで低下する。このような状況を受け、UNICEF は日本の大手製紙会社 nepia と協力し、「nepia 千のトイレプロジェクト」を 2008 年から始動させた。トイレを導入する際には、村民たちに屋外排泄の場所を地図に描き入れさせ、彼ら自身が衛生環境を見直し改善を希求するよう仕向ける自発的な CLTS(Community Led Total Sanitation)という手法を用いている。

しかしながら、齋藤(2012)によれば、NGO の NATILIS が 2008 年に作ったトイレはきちんと管理されていた一方、UNICEF の支援を受けて作ったトイレは水や石や葉が中に詰まったり、トイレの囲いが強風や動物のせいで壊れて野ざらしにされたままであったりした。トイレの使用法の指導徹底やアフターケアの部分では「nepia 千のトイレプロジェクト」はやや弱い。また、現地ではトイレよりも給水設備を求める声も多く聞かれたともいう。衛生的な排泄環境を持つことは人間の尊厳を守るために必須であるが、東ティモールの村民の中にはトイレの重要性を身に迫って感じていない人、正しい衛生知識や適切な衛生観念を持っていない人も少なくないと推測できる。

上記論文や途上国のトイレについての先行文献から筆者は、下水道の未整備、現地の文化や慣習に適したトイレ設備の欠如、トイレ使用者によるメンテナンス意識不足、公共性の認識の弱さの 4 つがトイレの普及を阻む要因であると仮定した。

仮説検証のため、筆者の調査では排泄環境の現状や様々な場所でのトイレの様子、排泄物の処理方法、トイレ用の水源、メンテナンスへの人々の意識、トイレの公共性の意識、トイレが人々の生活に与えた影響などの項目から、サステナブル・トイレットのあり方へアプローチする。

現地調査では UNICEF の衛生担当者の方から話を聞くということで、野外排泄の状況、トイレ設置が住民に与えた精神的影響、アフターケアの意識、衛生知識の啓蒙活動といった側面からの説明を期待した。

東ティモール国立大の学生とのフィールドワークでは、学校や病院、公衆トイレなど様々なタイプのトイレを見学し、学生に対してはトイレへの意識をインタビューする。



### 3. 調査結果

5 日間で述べ 16 箇所以上のトイレを巡ったが、一口にトイレと言っても、和式、洋式、レバー式、水桶式、ペーパーの有無など様式は様々であった。東ティモールではたいてい、トルコ式便器という和式トイレの金隠しがないタイプが設置されているが、ホテルやレストラン、病院や私立学校などでは洋式トイレも見受けられた。そしてそれらトイレは様式に関わらず、いずれもきれいに維持されていた。もちろん、大学のスタディーツアーだからトイレが無いようなところには行かないだろうし、訪問先も比較的裕福でトイレを整備する余裕があったのだろう。しかしながら、総じてトイレは清潔であった。

ほとんどのトイレは使用者や業者によって清潔に管理されていた。衛生教育についても、フィールドワークの際に大学生に尋ねたところ、彼女たちは学校教育の中でトイレの使用方法について指導を受けてこなかったということだったが、エルメラ県レテフォホでは 2008 年に District Hospital が設立されたのと同時に、レテフォホ内のほぼ全ての小学校・中学校・高校で年に 4 度の衛生指導が医療スタッフによって行われるようになった。このことにより学校教育だけにとどまらず、家庭内でも親から子へ、子から親へと適切な衛生知識が伝えられていくことも期待されている。また、これらのことより、メンテナンス意識や公共性への意識には特に問題はないと考えられる。トルコ式便器や水桶による水洗などが採用されている点からも、大部分のトイレは現地の慣習に適しているといえる。しかし、ツアーの中で唯一の例外だったトイレがある。それはレテフォホの公立小学校の 3 基の古いトイレで、トイレ用の雨水タンクが漏れたために 2003 年から放棄されている。この事例から分かるように、根本的な問題は人々の意識ではなく、むしろ現地の住民自身が管理・修理できないような設備を外部から物質だけ導入することにある。

ところで、一つ気になったことがある。それは大学生から聞いた話で、彼女の家のトイレは排泄物を汲み出さない地下浸透方式なのだが、政府が整備した上水道パイプが首都デシリに届くまでに壊されて水を引かれてしまうため 2006 年までは飲み水は上水道からでなく地下水から得ていたという。たとえトイレと地下水源の距離は遠かったとしても、土壌が病気を媒介する可能性は拭えない。こういった環境下にある家庭が東ティモールの中に依然として多く存在すると推測することができるが、総じて家庭では地下浸透方式、学校ではバキュームカーによる回収が排泄物の一般的な処理方法であった。下水道の整備されていない地域ではバキュームカーによる定期的な回収のほうが衛生的だと考えられる。

UNICEF によれば、貧しい地域でも 'Our latrine is our dignity' を掲げ、トイレを所有することを住民同士で啓蒙しあう動きもある。しかしながら、このようにトイレ作りへのモチベーションが高まっている地域もある一方で、依然として野外排泄している人々も多く、エルメラ県ではその割合は 34.5%にもものぼる。これには、親や周囲の人々の長年の慣習の惰性、隣家との距離が遠くて人目をはばかる必要がないことなど複数の要因があるという。先行研究と同様に、今回の UNICEF への取材でもレンガ造りの立派な家でもトイレはないというように、トイレの重要性を十分に認識していない世帯があることも明らかにな

った。

トイレがあることによる住民への影響という側面からも UNICEF から説明を受けた。CLTS では住民自身がトイレのイニシアチブを発揮することで、誇りとオーナーシップを持てるという。また、女性はトイレがないときは排泄時に野外で男性から目撃されるのを恐れていたが、トイレができてからはより安全によりプライバシーを持って、より健康的に排泄できるようになったという。

以上のことより、今後もコミュニティレベルでの衛生指導と、ラジオやテレビなどのメディアを通じた衛生習慣の周知の両方向から継続的に働きかけることで、トイレの普及とメンテナンス意識を広げることが必要だ。ボトムアップとトップダウンの相互作用により、東ティモールでサステナブル・トイレットを実現することは可能である。

今回の調査では言葉の壁もあって機会を得ることが難しかったが、トイレを所有することで住民が受けた精神面・生活面での変化を直接インタビューしたり参与観察したりすることが今後さらに研究を進める上で不可欠である。また、バキュームカーや下水で集められた排泄ゴミの最終処分についても調査が不十分だったので、次回の研究の課題としたい。



(写真左…大学の男女兼用トイレ、右上…飲食店のトイレ、右下…コーヒー農家のトイレ)

#### 4. 考察

「nepia 千のトイレプロジェクト」をきっかけに東ティモールのトイレに興味を持ち、先行文献を読んでその持続可能性に疑問を持ったことから私の研究は始まった。トイレは一見、局所的なテーマのようだが、実際は人間にとって必要不可欠な設備の一つであるし、

文化人類学や衛生学とも関連するのでとても奥深いトピックである。それに、トイレ普及にまつわる困難さは東ティモールだけでなく、他の発展途上国と共通することも多いので、様々な地域で応用ができる研究分野でもある。今回は現地での聞き取りやインタビューを通じてわずかながらも生の声が聞けたことで、当初の仮説とは異なる結果が得られ、論を再構築するに至った。今後は発展途上国のトイレにおける普遍的な問題点だけでなく、その土地・地域特有の問題源も突きとめ、解決策に繋げていけるとよい。

## 5. 調査に参加した感想

調査期間は正味 5 日だったが、個人ではなかなか訪問できない機関や東ティモールの女子学生とのフィールドワーク、レテフォホのコーヒー農家へのインタビューなど学校のスタディーツアーならではの貴重な経験ができたので、短いながらも有意義な時間であった。全体のテーマは平和構築だが、メンバーはそれぞれ異なるテーマも持って調査に臨んだので、たとえば学校に訪問してもトイレを調査するだけでなく、言語政策、政府の方針、給食制度、平和教育などについても学びを深められた。互いに諸分野の知識や思考を与えて刺激しあうことができ、大変よかった。

東ティモールを訪れて私が特異性を体感したのは暇そうな若者たちが街に溢れている光景を見たときであったが、その一方でやはり精力的な若者たちもいるもので、その二者の大きなギャップにも驚かされた。向上的な東ティモールの若者たちと、東ティモールを愛する外部関与者の歯車が噛み合って、国と人々がよりよく前進していったらと願う。

## 6. 調査を経て今後行動してみたいこと

東ティモールのみでなく、南アジアや東南アジア、アフリカといった他の地域におけるトイレについても勉強し、事例を比較対照することで持続可能なトイレ、あるべきトイレの形を調べてみたい。また、スタディグループの活動では、他大学の学生団体と一緒に勉強会を開いたり、関心を持ってきている社会人も参加できるような講演会を企画したりすることで、定期的に東ティモールに触れる機会を設けることができるかと思われる。

## 7. 参考文献

・齋藤智美(2012)「第3章 国際協力としてのCSR」内海成治『はじめての国際協力』昭和堂, 50-75.

・「nepia 千のトイレプロジェクト」

[http://1000toilets.com/about/history.html#archive\\_wrap](http://1000toilets.com/about/history.html#archive_wrap)(2013/2/9 最終検索)

## 東ティモールの食の現状と課題

○榎本 絢夏（生活科学部食物栄養学科 2年）

### 1. 調査のテーマ

東ティモールの食について。

### 2. 調査設問

東ティモールの人々の食生活、食に対する意識はどのようなものか。

その現状から見える課題は何か。

その課題解決のために自分ができることは何か。

### 3. 調査結果および考察

#### <現地住民の食生活>

現地の人々に、一日の食事についての質問を行った結果、朝・昼・晩のそれぞれで、パン、ごはん、キャッサバ、コーンといった様々な主食名が回答として挙げられた。追加の質問として「野菜は食べるか」と尋ねると、大抵の場合「野菜も食べる」との回答だった。一般的に食べられる野菜としてはキャベツやニンジンなどがあるらしく、これらはローカルマーケットでもよく見られた。

主菜となる肉や魚は高価であるため、時々食べる程度か、滅多に食べないという。毎日肉や魚を食べると答えた人は一人もいなかった。同じくタンパク質源となる卵や豆については、肉や魚よりも頻繁に食べられるというが、豆に関しては、食べるとお腹が痛くなるために食べない、と答えた人もいた（ディリ市内の女子大生）。この腹痛の原因としては、単に豆が身体に合わないということの他に、調理時の加熱が不十分など、調理過程における問題が考えられる。また、牛乳に関しては、お腹が痛くなるために決して飲まないという人々もいた（レテフォホのコーヒー農家）。これについても、乳糖不耐症など単に牛乳が身体に合わないこと以外に、牛乳の加熱殺菌が不十分であることなどが腹痛の原因として考えられる。

フィールドワークの際に、東ティモール国立大学の女子大学生らに、彼らが普段食べているような昼食を作ってほしいと頼んだところ、次のような食事を作ってくれた。一般的には、このような食事が食べられるという。（写真1/バナナはこの日特別に購入したもので、果物は高価なためあまり食べられないという。）

- ・ 主食…赤米（hare=red rice）を炊いたもの。米はインディカ種。



写真1：現地の一般的な昼食

- ・ 副菜…パパイヤの花 (AIDILA-FUNAN=papaya flower) と空芯菜 (KAKKU) を油 (Sania oil) で炒めたもの。味付けはニンニクと塩のみ。パパイヤの花は、苦味を伴う。
- ・ 一食分の量…ごはん 150~200g 程度、ごはん：おかず=約 1:1 で、量的には「普通」という感じだった。
- ・ 盛りつけ…調理したごはんやおかずを一度大きな皿に盛りつけ、そこからスプーンやフォークを使って各々の丸皿に取り分ける。(東ティモールでは一つの大きな丸皿に、一人分のごはんやおかずを全て盛りつける形式をとるようだ。)
- ・ 食器…一人につき一つの丸皿で、スプーン、フォークを使う。(ナイフを使う場合もある。)

#### <食に対する意識>

調査により、現地住民の一般的な食事ではタンパク質の摂取量が少ないことが分かったが、このような食事について彼ら自身が問題意識を持っているかという点、そうでもなさそう。実際に彼らの多くは「可能であれば肉や魚をもっと食べたい」と思っているものの、それはタンパク質を補いたいからではなく、単に美味しいものを食べたいからだと思われる。東ティモールの食事では一般的に、長い間「主食と少量の副菜」という形式がとられ続けてきたのだと考えられる。そうだとすれば、我々のように「食事に主菜(タンパク質源)があるのは普通のことだ」と考えないのは当然のことだろう。実際に、月に2回ほどしか肉や魚を食べないというコーヒー農家の人々は、「月に2回も肉や魚を食べられるから充分だ」と言っている。食に対する意識として、肉や魚はとても高価であり、奢侈品として認識されているのではないかという印象を受けた。

#### <市場に出回る食品>

ローカルマーケットでは、生肉が暑い屋外にむき出しのまま、腐敗臭がし、ハエが集まっている状態で売られていた。その他の露店では野菜や果物、米、豆、コーヒーなどが扱われ、豆腐も多く売られていた。地面は土で、舗装されておらず、雨が降った後は泥の状態で、水たまりも多くあった。酒や煙草も売られていた。東ティモールではまだ酒や煙草の年齢制限が無いらしく、若年時からの飲酒・喫煙も見られるという。今後の対策が望まれるところである。

スーパーマーケットで扱われている商品は適切な温度管理がなされており、肉は冷凍の状態でも売られていた。スナック菓子やインスタント食品などの加工品は、確認した限り全ての商品が輸入品であった。

#### <飲料水や食に関する問題>

レテフォホにある診療所では、患者の多くが女性や5歳以下の子どもで、これらの子どもは主に下痢や栄養失調を患っているという。また、栄養失調の多くはタンパク質の不足によるものだという。

下痢は雨期に多発するということから、上水道の整備が不十分で、雨水が飲用されてい



ることが示唆される。下痢の患者に対しては、UNICEF から提供された薬（写真 2）が無償で渡されるという。この薬は粉末状のポカリスエットのようなもので、水に溶かして飲ませるものである。脱水を防ぐため、特に嘔吐した際にはすぐに飲ませる必要があるという。薬の処方その他、下痢の患者（またはその保護者など）に対しては、①水は沸騰させてから飲むこと、②卵・犬肉・豚肉は食べないこと、といった助言が出される。（②に関して、鶏肉や牛肉が禁止されない理由については不明である。）下痢を防ぐためにも、上水道の整備、飲み水の確保が求められる。

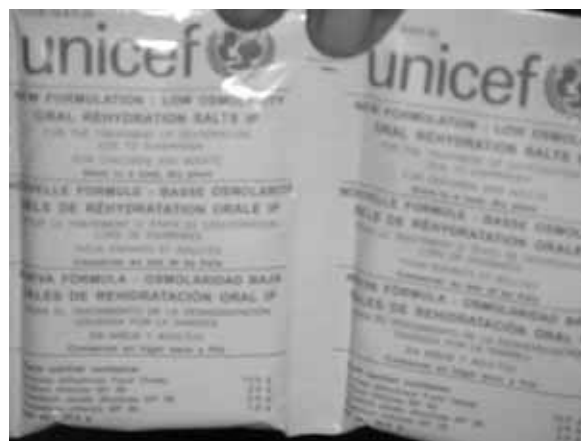


写真 2：経口補水薬

栄養失調の治療としては、薬の他に、粉末状にしたトウモロコシにマルチビタミンの粉を混ぜ合わせた粉末が提供されるという。

タンパク質やアミノ酸の添加はされていないというが、栄養失調の主な原因がタンパク質不足によること、トウモロコシのアミノ酸スコアがそれほど高くないことから考えると、必須アミノ酸の添加も必要だといえる。



写真 3：緊急時用食糧貯蔵庫

貯蔵されているトウモロコシ粉末が一度も利用されていないというのも問題である。診療所の外にはこのトウモロコシ粉末と食用油が貯蔵されている倉庫（写真 3:2012 年 11 月設置）があるが、その鍵は病院の

担当者が持っており、中の食料はまだ一度も利用されていないという。この倉庫とは別の場所に、患者に提供される粉末が用意されているのかもしれないが、定かではない。いずれにしろ、提供されるべきものが患者の手に渡らなければ、意味が無い。また、倉庫内の食料は緊急時にも利用されるというが、鍵を持っている責任者が緊急時にその場にいなければ、利用できるものも利用できない。都市から診療所までは道も悪く、災害などの緊急時には診療所までの交通手段も無くなってしまっておそれがある。スペアキーを病院の他の関係者にも持たせるなどの対処をするべきではないかと考える。

<体格の小さい人々>

東ティモールの人々を見て、その体格の小ささが印象に残った。これはもともとティモール人の体格が遺伝的に小さいのではなく、栄養状態が充分でないためだと考えられる。実際に、2009 年の全国調査によれば、東ティモールの 5 歳未満の子どもの 45%が低体重、

58%が発育障害であるというデータがある。また、家庭での地位が一般的に低いことなどが原因で、女性の栄養状態も悪いという。妊娠中の栄養状態が悪ければ、出産による母親の死亡リスクが増加するばかりでなく、胎児の発育にも影響が及ぶ。身体的、精神的、知的発達のためには、エネルギーの確保はもちろんのこと、タンパク質やビタミン、ミネラル等も不可欠である。食事の量が充分であっても、必要な栄養素が不足してしまえば、栄養障害に陥ってしまう。食事の量と質、両方の改善が必要である。

#### <給食制度>

東ティモールにも給食制度があるらしいが、現在は財政的な理由により停止されている。この給食制度は、以前はWFPのサポートを受けていたが、2011年にその役割を政府が全て受け継ぎ、政府から全国の学校へ支給されるという（給食制度の対象となるのは小学校まで）。はじめは現物支給であったが、ローカルマーケットの需要などを考慮し、後に現金支給に代わった。その金額は、児童一人につき、一日当たり15¢である。調理は、母親たちのボランティア、もしくはコックを雇って行われる。停止前の給食の内容は、ごはんやパンなどの主食、キャベツ・にんじん・豆などのおかずといった感じで、牛乳も出されていたという。

給食の第一の目的は子どもたちの栄養状態の改善であるが、それと同時に、お腹が満たされることで集中力がアップし、学業効率が上がるというメリットもある。量を確保した上で、食事の質も徐々に向上していくことを願う。そのためにはまず、給食制度が一日も早く再開される必要がある。

#### <今後の課題>

東ティモールの食における今後の課題としては、大きくは安全な飲料水の確保、食事の量的・質的改善などが挙げられるが、これには、インフラ整備の資金・技術の確保、産業の発達、雇用の拡大、女性や子どもの社会的地位の向上、人々の意識の改善など、非常に多くの事柄が関与し、その解決はとても簡単なものではない。少しずつ、出来るところから改善を図るしかない。

### 5. 調査に参加した感想

東ティモールの食について書かれている文献は多くなく、実際に自分の目でこの国の食の現状を確かめたいという気持ちをもって調査に望んだ。限られた時間の中で得られた情報は少なかったかもしれないが、たくさんを感じ取ることができた。自分とは異なる分野に興味を持つ仲間たちと接するなかでも、たくさんの良い刺激を受けることができた。初めての土地、初めての体験で、見るもの全てが新しく、驚きと発見の連続であったが、とても有意義な時間を過ごすことができたと思う。

### 6. 調査を経て今後行動してみたいこと

食や栄養の問題は、政治的・社会的・文化的な、本当に様々な要因と複雑に関与してい

るため、その解決はとても容易ではない。ひとりの力は小さすぎるが、それでも何かできることはあるはずだ。今の私にも、食や栄養についての問題を問題として認識すること、それについて考え、学び、何らかの形で表現することはできる。東ティモールに限らず、世界の食糧問題等についての情報を集めながら、勉学で学んだ知識を活用し、問題解決のための手がかりを探っていきたい。

## 7. 参考文献

久木田純 著『東ティモールの現場から-子どもと平和構築-』（ソトコト新書・2012年）

## コーヒーから見る東ティモール

○池田 亜柊（文教育学部言語文化学科グローバル文化学環 2 年）

### 1. 調査のテーマ

東ティモールにおけるコーヒー産業の役割。

### 2. 調査設問

Peace Winds Japan の行うコーヒー事業が東ティモールの経済発展に貢献できるか。

### 3. 調査結果

#### 1) Peace Winds Japan について

ピースウィンズジャパン（PWJ）は 1996 年に設立された特定非営利活動法人で、紛争や災害、貧困などの脅威にさらされている人々に対して支援活動を行う NGO である。本部は日本にあり現在では日本を含む 9 カ国で活動を続けている。フェアトレードにも取り組んでいる。

#### 2) Peace Winds Japan のコーヒー輸出業

支援は東ティモールの中でもエルメラ県のレテフォホ郡とリキサ郡で行われており、2012 年で 10 年目を迎えた。支援の方法としてはコーヒーの栽培・精製の技術指導を行い、現地スタッフが生産者とともに高品質のコーヒー作りを行う。農家の仕事はコーヒーの栽培・収穫・果肉の除去・洗浄・乾燥・発酵までであり、脱穀から先は別の業者（工程により様々な会社、例えば脱穀はティモールに工場を持つ韓国企業など）に委託している。元々は輸出まで農家で行おうとしたがうまくいかず、現在は加工が終わった段階の豆を PWJ が買取り、PWJ が農家に報酬を支払うという形をとっている。しかし 2010 年にグリサセレナという販売業者を東ティモールで設立し、コーヒーの輸出に携わる業務を行なっている。現段階では日本人と東ティモール人が協働で運営しているが、将来的には PWJ も日本人スタッフも撤退し、東ティモール人のみで運営することを目指している。（PWJ East Timor Office Director 永井さんへのインタビュー）

東ティモールでは CCT（※注 1）という団体がコーヒーのフェアトレードに関わっているが、CCT は収穫までしか農家に任せないので買取り価格は PWJ と契約している場合と比べて低くなる。しかし高額で買取る分、PWJ のコーヒー産業の運営は苦しい。今は PWJ が支払いの一部を負担しているという状況がある。また、東ティモールではコーヒーの身実の重さで現金を得るため、チェリービーンズと言われる赤い実だけでなく、まだ熟していない実と一緒に収穫してしまう場合がある。そこで PWJ は豆の選別を徹底し高品質の維持に努めている（『東ティモールの現場から』（p268））。

現地スタッフによるキメの細かい指導を行うため参加農家を大々的に増やせないこと、今

のところは JICA の支援を受けながら活動しているが、支援はいつまでも続くものではないという問題もある（『国境を越えた村おこし』（P18））。

※注1 CCT とは Cooperative Café Timor（ティモールコーヒー組合）の略称であり、NCBA（National Cooperative Business Association）というアメリカの非営利全国協同組合の支援によって設立された団体。NCBA/CCT の最大の買い手はスターバックス社。

### 3) 農家の方々へのインタビューから

生産者組合の仕組みについて：

生産者組合は1組合10人ほどで構成されており、私達がインタビューを行った組合の組合員は全員男性だった。コーヒーの納入、支払いは組合ごとであり、組合員はリーダーでもリーダーでなくとも同額を支払われる。支払額はその年の生産量によって変化するが、コーヒー豆の納入の約1ヶ月後に1年分1括で支払われている（様々な手続きのため1ヶ月のブランクが有る）。これは住民と話し合っただけで決めた支払い方法であり1括で支払われたほうが計画的に使えるためである。対して CCT はコーヒー豆とその場で引き換えに代金を支払い、かつ分割払いである。

ライフスタイルについて：

東ティモールは雨季と乾季に分かれており、乾季に豆を収穫するのに対して雨季は草を刈ったりしている。忙しい時期には朝から深夜まで家族総出で働くこともある。具体的には朝の8時頃から2～3時間で豆を収穫し、休憩をとりつつも12時近くまで良い豆と悪い豆を選り分ける作業を行う。子どもが働くといってもレテフォホの就学率はとても高く、また収入が組合に所属する男性のみにならないように女性のみの生産者組合も存在し、収入を別に持つことで女性の立場を向上させる働きもある。子どもたちの多くは高校まで卒業する。その後都市の大学に進むものもいるが、コーヒー農業の専門学校がありそこに通う子どもも多くいる。また都市の大学に行っても卒業して農場に戻ってくる子どもたちが多くいる。これは都市に仕事がなく、コーヒー農場に戻ってくれば安定した収入が約束されていることが理由にある。また親たちは大学を出て経営について学んで、その知識でコーヒー農場経営をより発展させてほしいと願うものもいた。

## 4. 考察

PWJ はもう少しで枯渇してしまう石油からの収入に頼りきっている東ティモールが、経済破綻しないための次の産業としてコーヒーを捉えている。確かにコーヒーの需要が途切れることは想像しがたく、植民地時代からのプランテーションの生産基盤があるのでコーヒー産業を活性化させることはある程度経済効果を生むだろう。現在はフェアトレードコーヒーのイメージが強いが、オーガニックコーヒーであることを売りにして付加価値をつけ、きちんと高品質を保ちブランド化してより高い値段で売るという方法もある。オーガニッ

クであるながらも生産性は向上される余地があると考えられ、また運搬ルートの整備が進めばよりスムーズに輸送も行えるようになる。

## 5. 調査に参加した感想

私はコーヒーが好きでほとんど毎日のように飲むし、フェアトレードコーヒーも大学の授業でよくとりあげられるテーマである。最近ではちらほらと街中でも見かけるようになり、私にとってはとても身近な存在である。しかしさすがの私もコーヒーが栽培されている場所へ実際に赴き、育てている方々の話を直接聞くというのは初めての体験であり、今まで映像などを通して学んできたことを自分の身で確かめる良い機会になった。

東ティモールの人々、特に子どもたちがシャイであり話しかけて来ないし、話しかけても逃げてしまうというのが印象的だった。日本人に近いものを感じた。何か調査を行うときに本やインターネットを利用することも多いが、フィールドワークで人と触れ合いながらお互いを知っていく作業がこんなに楽しく、こんなに心に残るものなのだということを知れて嬉しく思っている。

## 6. 調査を経て今後活動してみたいこと

今回は PWJ を通じてティモールコーヒーを見たが、今度は消費者としてピースコーヒーであったり他のいろいろな国のフェアトレードコーヒーについて関わって行きたいと考える。またコーヒーを飲みながら自分のティモールでの体験を身近なところから広めていきたい。

## 7. 参考文献

Peace Winds Japan <http://www.peace-winds.org/>

東ティモールとつながろう 生産者と共に豊かな未来へ <http://timor-leste.jp/>

山田満『東ティモールを知るための50章』(2006) 明石書店

加藤剛『国境を越えた村おこし 日本と東南アジアをつなぐ』(2007) NTT 出版

### ▼コーヒー



### ▼農家のみなさんと



## 東ティモールの食文化

○上田 由理佳（生活科学部食物栄養学科 1 年）

### 1. 調査のテーマ

東ティモールでは自給自足が生活の中心である一方で、輸入品にも大きく依存している。ポルトガルとインドネシアによる支配や国連による統治を受けた時代背景によって、東ティモールの食文化はどのように外国の影響を受けているのか。東ティモールの人々にとって食事は娯楽、コミュニケーションや教育手段としての役割をもっているのか。

### 2. 調査設問

現地の人々はどのような食生活をしているのか。収入向上によって質は変化するのか。東ティモールでは食事に対してコミュニケーション、娯楽、教育的役割があるという考え方をもっているのか。

東ティモールで栄養失調の問題についてとそれに対する行政の対処法。

東ティモールで給食制度が普及されているのか。どのような効果があるのか。

### 3. 調査結果

#### コモロ村の私立中高一貫校

学校を訪問したとき、絆プロジェクトで日本に短期留学したことのある生徒たちが温かく迎え入れてくれた。私は二人の女の子とすぐに仲良くなり、学校新聞の展示物や図書室、パソコン室、音楽室などを案内してもらった。教師の不足で高校生は午前の部、中学生は午後の部と分かれていた。東ティモールの給食制度は小学校までであるため、中高一貫では家に帰って食べるか売店で買うという手段があった。売店で売っているものを見てみると、パン、ドーナツ、米、インドネシア風焼きそば、揚げ物、ポップコーン、ケーキなど、炭水化物中心であり、タンパク質や野菜がほとんど摂取できるように見られなかった。



<コモロ村の私立中高一貫校の売店>

### 東ティモール国立大学 (UNTL)

UNTL の女子学生 2 人とのフィールドワークでは食に関する場所に連れていってもらった。まず HALI-LAWAN という local market に連れて行ってもらった。HALI-LAWAN には多くの店が密集しており、生肉が剥きだしで売られているためハエの大群が肉に周りにいた。野菜や米、豆の他に輸入品のインスタントコーヒーやお菓子など様々な物品が売られていた。生きた鶏が 1 匹 \$10 と高値で売られており、鶏以外は輸入品を扱うスーパーより安い値段であると聞いた。野菜は地方の農家が自分で栽培したものを売りに来ているようで、1 週間に一度入れ替えているようだった。また、市場は朝 5:00 から夜 8:00 か 9:00 まで年中無休で開かれていると聞いた。夜の野菜の保存方法は水に浸けると言っていた。地面には葉タバコを噛んでいる女性が吐き出した赤い唾液の跡がまばらにあった。タバコを吸っている人も多く、悪臭や虫の多さを考えると不衛生であると思われた。しかし連れてきてくれた UNTL の学生も普段ここで買い物をすると聞いていた。



<HALI-LAWAN のお店> (左：肉 右：野菜)

次に中華系ティモール人が経営するスーパーに行った。肉が全て冷凍品で、水に浸けて解凍すると学生は言っていた。しかし、鶏肉は \$3.5/kg、牛肉と豚肉は \$6/kg と、高値なためめったに食べないと言っていた。

住宅地から少し離れた MANLEWANA という local market に行った。そこは HALI-LAWAN と比べて圧倒的に清潔に保たれているように見えた。しかし、立地が悪いせいで客はほとんど見られなかった。政府が市場を清潔にするため、HALI-LAWAN のいくつかの店を強制的に移動させて MANLEWANA を作ったが、客が来ないため地の人々にとっては不満で、MANLEWANA に店を戻した人も多いい言っていた。

最後に UNTL の教授のお宅で学生二人に普段食べている昼食を作ってもらった。赤い米 (hare) のご飯と、パパイヤの花 (aidila-funan) と kakku という葉野菜の塩炒めを作ってもらった。





## UNICEF

現地の UNICEF で働いている日本人の方に学校保健についてお話しをして頂いた。まず学校給食制度に関しては、以前 WFP が全面的にサポートしていたが 2011 年から政府が引き継いだ。小学校は政府から 1 人の生徒あたり 1 日 15 セント支給される。以前は小麦粉など現物支給であったが、local market の助けにならないため今は現金支給で、そのお金を使って親が材料を買って学校単位で給食をつくっている。しかし、現在は政府の新予算が通るまで給食制度が停止している。給食の利点として、生徒がお腹を満たすことで学習に対する集中力が上がり、子供の学習達成度が向上する。このことで親に子供を学校へ行かせることの波及効果がある、と UNICEF の方がおっしゃっていた。幼少期に栄養失調になってしまうと身体と脳の発育が生涯遅れてしまうため、重大な課題であるとおっしゃっていた。

## レテフォホの公立小学校

公立小学校は以前給食が支給されており、内容は米やパン、野菜、豆、牛乳などであった。小学校も教員と教室不足で午前は 1~4 年生、午後は 5, 6 年生が来るが、12 時に全学年向けに親が昼食をつくりに来ると言っていた。栄養教育に関しては日本の NGO シェアが行っている。また、3 か月に一度生徒達がキャッサバや米、タロイモの料理をつくる対抗戦を行っている。

## エルメラ県レテフォホ地区の Public Clinic

公共の診療所と隣接する産院を訪問した。一般診療の患者の多くは 5 歳未満の子供で、栄養失調や下痢の症状が多い。また、雨季は蚊が増えるのでマラリアやデング熱が流行する。下痢の治療として UNICEF の『ORS』という粉薬を無料で配布している。この薬は下痢の症状が出る度に水に溶かして飲む。食事に関するアドバイスとしては、沸騰させた水を飲むこと・豚肉、卵、犬肉は食べないことであった。栄養失調の対処法として WFP が配布するマルチビタミン添加剤のトウモロコシの粉末を配布するということがあった。栄養失調の主な原因はタンパク質不足であるとクリニックの方がおっしゃっていたが、タンパク質はトウモロコシそのものからしか結局補えないということだった。

## 4. 考察

学生との交流や訪問先でのインタビューを通して共通していたことは、東ティモールの食事が炭水化物中心であるということだ。主食は米で、トウモロコシやイモ、キャッサバをよく食べる。パンを時々食べるが、それ以外外国の影響を受けているようには見られなかった。1 日 3 食食べることが基本であることは日本と同じだった。食事内容は私立校の学生、公立の学生、比較的高収入なコーヒー農家についてほとんど変わらなかった。コーヒー農家の方たちが「月に 2 回肉を食べられるので満足している。」という発言が印象的であった。収入が多い人でも、牛乳や肉類は高すぎてなかなか買えないという言葉をどの訪

問先でも聞いた。日本で学ぶ栄養学で考えるとタンパク質不足の食事に見えるが、実際インタビューした人たちは健康そうに見えたので一概に栄養バランスの悪い食事とは言い切れない。推測ではあるが、炭水化物が多い分摂取カロリーが十分であること、現地で栽培する作物の栄養成分が充実していること、遺伝的に現地の人々は少ないタンパク質量で健康的に生きていけることなどが考えられる。しかし、クリニックで栄養失調の子供が多いと伺ったことから、発育期に影響する栄養不足は改善される必要があると思われた。

給食の提供が現在は停止している現状から、政府は予算のやりくりを見直すべきである。政府は WFP から引き継いだ以上、責任を持って給食制度を継続すべきであると思った。フィールドワークを通して、東ティモールの人々は家族内でも一緒に揃って食事をする習慣がないため、給食において協調性を育む教育的役割は考えられていないと思われた。小学校での給食や中高一貫校の売店で販売する食事を親がボランティアとしてつくっていると知って、親の行動が積極的であると思った。シェアによる栄養の授業や小学校での料理対決がどのような効果をもたらしているか今後調査を深めていきたい。

現地の市場については HALI-LAWAN は不衛生だが商売をするには立地が良く、MANLELAWAN は清潔だが立地が悪いと考えられた。HALI-LAWAN の立地そのまま衛生面を改善するには一度大規模な移動を政府のような大規模な機関が援助して行う必要があると思われた。

## 5. 調査に参加した感想

ディリのホテルやレストランは想像以上に整っていて出会った人々は健康そうだった。しかし、それらの場所は外国人向けであるし、交流できた人々は比較的裕福であることを忘れてはならないと思った。スタディーツアーでなければ訪問できないような場所にたくさん行けたことはとても貴重な経験であった。毎日訪問記録のまとめや話し合いをし、最終日にグループ発表を行ったことで情報の理解と共有ができたのがとても良かった。東ティモールの人々はみな穏やかでフレンドリーな方達ばかりで別れがとても寂しかった。

## 6. 調査を経て今後行動してみたいこと

今回のスタディーツアーで多くの人と知り合うことができたので、つながりを絶やさないようにこれからも facebook などを通じて交流を続けたい。また、東ティモールがどのような場所か日本の人々にも伝えることで興味を持ってもらいたい。フィールドワークではデータを集めるのが困難なため、統計的なデータと自分が体験した内容を合わせて東ティモールの人々の栄養状態を考察したいと思う。将来自分がどのように役立てるか意識しながらこれからの学習をしていくつもりである。

## 7. 参考文献

NGO シェアスタッフ日記 [http://blog.livedoor.jp/share\\_jp/](http://blog.livedoor.jp/share_jp/) 閲覧日 2013/02/27

## 東ティモールにおける国造りの方向性と実態—エルメラ県レテフォホ郡を例に ○船渡 恵（文教育学部言語文化学科英語圏言語文化コース4年）

### 1. 調査のテーマ

国家発展のイニシアチブをとる政府の指針を、ローカルで生きる人々の生活の実情と照らし合わせて分析し、東ティモールの国づくりの方向性と課題を明らかにする。エルメラ県レテフォホ郡でコーヒー産業に従事する農家の実態を例に、東ティモールが抱える課題と、今後の可能性を検討する。

### 2. 調査設問

- ①東ティモール政府の国家開発の展望
- ②農家の現状

### 3. 調査結果

はじめに、東ティモールの農業の概要について触れる。東ティモールにおける主要産業は農業である。東ティモールにおいて10歳以上で労働に従事している者は約30万人おり、そのうち約20万人が農業に従事している。一方、東ティモールは食料の自給が追いつかず、米、麦、トウモロコシ、砂糖等をインドネシア、ベトナム、タイ等から輸入している。だが、現状では輸入米が多いが決して米の生産量が低い訳ではない。むしろ、遠隔地では余剰米の処理が問題となっており、道路状態が悪く、輸送が困難を極めている。また、雇用に関しては、高い失業率と若者の雇用先の少なさが問題として挙げられる。15歳から64歳までの労働人口のうち、失業率は約10%である。だが、都市部での失業率は約16%で、地方部の6.9%の二倍以上となっている。地方では時給農業以外の小要求力がないため、若者を中心に都市部への人口流出が激しい。農村での生産性の向上、生産力の拡大に伴う雇用機会の拡大が望まれる。一方コーヒー産業は唯一の輸出産品として、その存在感を高めている。輸出額に占めるコーヒーの比率は2008年および2009年でそれぞれ約98%である。政府は極端な輸出入の不均衡な状態をコーヒー輸出の拡大によって縮小しようとしている。

次に、政府の開発戦略について明らかにする。東ティモール政府は国づくりの方向性を示す戦略的開発計画（STRATEGIC DEVELOPMENT PLAN 2011-2030）を掲げている。それによると経済発展のための重点産業として、農業、石油、観光、民間投資をあげている。この開発計画において、国民一人当たりのGDPを2010年の約600ドルから2015年には900ドルに、2020年には2030ドル、2030年には5690ドルに引き上げようとしている。（石油収入を除く。）政府は公共投資の対象として①人材育成②インフラ整備③民間部門の育成・発展の三点をあげている。この三点の内容は以下の通りである。

- ① 人材育成：健康、栄養、初等・中等教育、職業訓練、高等教育、調査・開発能力の6点

を課題として挙げている。健康に関しては、すべての人がアクセスできるプライマリーヘルスセンターの設立をあげているが、今後20年間のGDPが4%上昇することが必要とされる。栄養に関しては若者を対象に栄養教室を開講する。初等・中等教育に関しては、2020年までにすべての子どもが中等教育まで進学・終了することを目標とし、学校の建設と教員研修に力をいれる。職業訓練としては公共投資として、20-30歳の若者に高校までの教育を保障する。また文化にも力を入れ土着の音楽や絵へのアクティビティを奨励している。



(文化活動の推進は観光開発の目的でもある) また東ティモール国立大学のカリキュラムも援助し、グローバル人材の育成を進めている。

- ② インフラ整備：投資先を国家・県・コミュニティの3つの階層にわけ、すべての県・コミュニティをつなぐ道路建設と高速道路の建設を予定している。また、海港・空港の開設、テレコミュニケーションの充実も課題とされている。
- ③ 民間投資：農業、石油、観光を柱に公共投資を行う。農業に関しては小自作農者が多いため生産効率が悪いことを問題に挙げている。

以下は、政府の開発計画に照らし合わせて、エルメラ県レテフォホ郡の実情について、フィールドワークにより明らかになったことを記す。第一に、人材育成について触れる。県の病院に訪問したが、ユニセフ等の協力のもと無償で医療サービスが提供されていた。一方、交通事情から病院に通うことができなくなってしまう患者もいるという。栄養状態が悪く、下痢などの患者も多い。栄養指導の教室が開かれていたが、そもそも貧しい地域において知識があってもモノを買うことのできない状態の人々が多く、政府の取り組みがローカルな人々の実情にあっていないように感じた。また、インフラ整備（道路、テレコミュニケーション）も早急の課題であると感じた。首都ディリからレテフォホへの道路状態は非常に悪く、雨が降ると地滑り等の危険もある。コンクリートを敷き詰めても、材質が悪いのかよく道路に穴があいている。インフラ整備には質の高さもある程度求められると感じた。



次に、NGO ピースウィンズジャパンに支援されているコーヒー農家からの聞き取りについて触れる。私が聞き取った農家たちは lebdu kuraik と leten kuraik という10人単位の二つのグループを作り活動していた。各々が年に1000ドル報酬でもらう保証がされている。男性への聞き取りが中心で、家族が仕事の補

助をする話をしていた。金銭的な助け合いや管理があるか質問したが、話を聞く限りないようだった。

PWJは相互扶助組織として発展させたいようだが、コーヒー農家たちのつながりは不明瞭であり、PWJ 撤退後の資金運営や管理の面をいかにするかが課題であるかのように思えた。農家の男性たちは子どもたちに後継者となってほしいようだった。Coffee institute という農家養成の機関があるそうだ。今後農家たちのエンパワーメントを考えると、栽培能力だけでなく、経営スキルなどマネジメント能力の育成も望まれる。現在の農民たちの自立と組織化、効率化が政府の望む民間セクターの発展にもつながるだろう。

#### 4. 考察

政府の目指す開発目標を達成するためには、その下位項目の質の高い達成と、現地の人々のオーナーシップが求められると感じた。例えば、人材育成に関しても、栄養指導をしてもそもそもローカルな人々の購買能力がない場合、あるいは地元文化に適していない場合は意味がない。インフラ整備にしても質の悪いコンクリートを敷き詰めて、穴があいてしまっていた。雇用に困っている若者は多くいるため、そのような若者たちを生かしながら、地元の風土・文化・物資に精通した人材がリーダーシップをとっていく必要性を感じた。また、外からの技術移転の協力は不可欠であり、外部者との関係づくりが重要であると感じた。PWJの例をとると、農家の人々のオーナーシップがまだ育っておらず、依存状態にあった。援助者の現地の人々が対等な関係を気づくことの難しさを目の当たりにし、外部からの援助が多く存在する東ティモールにおいて重要な課題であるように感じた。また、コーヒー産業に関しては、より公正な取引を推進するために、国際 NGO 同士の連携や、ビジネスに興味のある地元の若い人々との協力が必要になるのではないかと感じた。

#### 5. 調査に参加した感想

まだ独立まもない国であって、今後の発展へのパワーを感じるとともに、外部者と現地の人々の対等な関係作りという、国際協力における大きな課題を目の当たりにした。また、豊かな自然とあたたかく陽気な人々の笑顔にふれ、日本と比べて不便ではあるけれども、私たちが学び、尊敬すべき東ティモールの魅力を肌で感じる事ができた。私が東ティモールで強く感じたのはグローバル化の波だ。まだまだインターネット環境も不十分な国でも、ラジオからは韓流や米国の人気歌手の歌が聞こえてくる。外食産業はまだ入っていないが、食料品店には海外の製品がずらりと並び、民間セクターは外資のものばかりであった。つまり、東ティモールは否が応でも「外」との対等な関係作りなしでは自立・発展し得ないという現実を知った。能力の高い若者たちの雇用問題が深刻であったが、今後の国の舵取りを行うのは彼らである。今回私たちは大学生とのフィールドワークを行ったが、それは私たちにとって学びだけではなく、グローバル化社会の中で闘っていかざるをえない今後の東ティモールのリーダーたちにとっても、異文化交流の機会となったのではないかと感じた。

ないか。経済的な関係の中では難しい対等な関係作りも、大学生と学びと交流の中では自然と築くことができる。このような若者の交流の輪が広がっていくことで、今後の南と北の関係、国際協力の関係にもプラスになっていくのではないかと感じた。

#### 6. 調査を経て今後行動してみたいこと

今後とも東ティモールでできた友達とずっと関係を築いていきたい。お茶の水女子大学と UNTL の大学間の交流の機会ももっとあれば良いと思う。また、コーヒー農家の人たちと実際に話すことができたので、ぜひ、多くの人にどのような環境で私たちが普段飲んでい  
るコーヒーが栽培されているかを知ってほしいと思った。そのような開発教育の機会を作  
りたい。

#### 7. 参考文献

山田満（編）（2010）『東ティモールを知るための 50 章』（明石書店）

Oxfam, *Overview of the Coffee Sector in Timor Leste*, 2002, Web.  
tp://gov.east-timor.org/MAFF/ta200/TA218.pdf#search='timor+coffee+oxfam

## NGO による平和構築—成果と問題点—

○武田 真佑子（文教育学部グローバル文化学環 3 年）

### 1. 調査のテーマ

東ティモールの平和構築における NGO の果たす役割、およびその課題。

### 2. 調査設問

独立後の東ティモールでの平和構築はどのように行われているのか。NGO による平和構築の活動を通して調査、考察していく。

### 3. 調査結果

今回の調査では平和構築に関係する NGO として三つの NGO に聞き取り調査を行った。以下、それぞれの NGO の概要およびその活動について示す。その後、各 NGO の共通点を考察する。

#### ①BELUN

2004 年に設立された NGO である BELUN は、平和構築のための小さなプロジェクトを多数実施しその統括を行っている。各プロジェクトでは、女性や若者の参加にも力を入れており、コミュニティレベルからの活動を促進することを目標として活動を行っている。

紛争予防のプロジェクトの中で重要かつ特徴的なものが EWER (Early Warning and Early Response) だ。これは東ティモールの 13 州すべてで実施され、sub-district と呼ばれる一つの村単位で管理されている。sub-district につき二名の地元の人々がモニターとしての研修を BELUN から受けた後、地元コミュニティ内部で紛争の要因となりうる出来事がないか調査し、それを一か月に一、二回の BELUN スタッフとの合同ミーティングで報告したり、報告書にまとめて提出する。モニタリングの結果見えてきた問題に対してアプローチを繰り返すことで解決を図る。こうした地元のコミュニティを巻き込んだ形の紛争予防ネットワークの形成は、紛争予防を図るとともに、中央（＝BELUN）と地方が連携を取れるという点でも重要であると感じた。

紛争予防に関する活動を行うとともに、コミュニティの能力育成も実施しており、「タラ・バンドゥ (tara bandu)」と呼ばれる伝統的な儀式のような活動や、コミュニティでの対話やセミナーの開催を通してコミュニティ内部での能力育成を行っている。

#### ②Ba Futuru

Ba Futuru とは「For Future」を意味し、アートや英語教育、日本語教育など、個人の能力育成や、紛争解決トレーニング、トイレに関するトレーニング、主に教師を対象とした、学校に対するトレーニングなど、様々な活動を通して平和構築を目指す団体である。

Ba Futuru には三名の青年海外協力隊の方が参加しており、写真を主とした芸術教育、日本語教室などの活動を行っているということだった。事務所の隣に作られたピースセンタ

一と呼ばれる場所では、日本語教室等が開催されており、生徒の数も多く、年齢層も子供から三十代くらいまでと幅広い人々が参加していた。能力育成の活動に関しては学校のような意味合いが強く、参加費として三カ月に二ドル必要だそう。これは運営費だけでなく、お金を払わないと学校に来る強制力がなく、ドロップアウトしてしまう人が多いからということだった。

芸術やスポーツによって自分を表現する手段を獲得し、トラウマの回復に役立てる試みは興味深いものだったが、通訳の養成など現実的なスキルについてはまだ仕事を得ることまでつながっておらず、今後は雇用の確保まで視野に入れて活動を続ける予定と伺った。

### ③FUNDEF

FUNDEF は若い男性を中心に設立された NGO であり、平和構築というミッションのもと、東ティモール全体を発展させるための能力を提供する活動を行っている。前述の二団体と同じく能力育成の活動を行っており、パソコンや英語、読み書きなどを教える教室を開いている。平和構築に関するトレーニングでは、女性の人権に重点を置いた人権問題や、男性の女性に対する暴力などを取り扱っている。

特に印象的だったのは女性のセクシャルバイオレンスに対する活動だった。東ティモールでは男性から女性への暴力が多く、被害女性はなかなか助けを求めることができないため、正確な現状を把握しきれない。コミュニティでの聞き取りなどからセクシャルバイオレンスの被害にあっている女性を探し、身体状況によっては医療機関に連れて行ったり、証拠を警察に提出するための手助けを行うということだった。ただし、警察はあまり信頼することができず、ドメスティックバイオレンスに対する法律は存在するがあまり活用されていないようだった。

以上、三つの NGO から見えてきたのは、東ティモールにおける平和構築活動は、主に紛争予防と能力育成の二点で行われており、その活動は多岐にわたるが、英語教育など、比較的共通するものも多いということだ。東ティモールの抱える大きな雇用問題は、不満など目に見えない形で紛争の種を撒いていく。これに対して NGO では様々な能力獲得のための活動を行っているが、雇用の創出まではつながっておらず、問題解決に至っていないのが現状であると感じた。

## 4. 考察

東ティモールでは予想していた以上の多くのローカル NGO が活動していた。NGO 同士で紛争予防ネットワークを構築するなど、活動の枠組みを広げるとともに、多くの NGO がコミュニティを巻き込みコミュニティレベルでの紛争解決を模索していた。紛争予防の活動は成果として目に見えるものではないが、近年の東ティモールでは大規模な紛争が起こっていない以上、その活動には一定以上の効果があると言えるのではないだろうか。

三団体の NGO への聞き取りを通して感じたのは資金源の問題と活動形態の問題だった。東ティモールの NGO は、その資金源として、海外の NGO や外国政府の援助に依存している。



NGO がその資金源を寄付に依存する以上逃れられないことだが、その活動の期間や内容にドナーの意思が強く反映されており、現実に対応した柔軟な活動はできていないのではないかと感じた。また、その活動形態については、コミュニティレベルでの活動を行っている NGO がほとんどだったが、たとえば英語教育など、その提供する能力は NGO 側が設定したものであり、本当にコミュニティの人々のニーズを反映しているのか疑問に思った。特にコミュニティの人々、つまり支援される側の人々の視点は今回の調査では見る事ができなかった部分であるので、今後深めていきたい。

## 5. 調査に参加した感想

個人的には訪問するのが難しい東ティモールの様々な NGO の、多岐にわたる活動についての話を伺うことができ、また、一部の NGO では実際の活動を見ることができたのが非常に貴重な経験となった。

「平和」という漠然としたものは、定義が難しく、おそらく誰の視点でどう考えるかによってその意味は変わってくるだろう。今回の調査では、少なくとも以前のような紛争という目に見える暴力はなく、ガルトゥング（1969）の定義する「消極的平和」は達成されていると感じた。今は「積極的平和」の追求の段階に入っており、その達成には雇用や民主主義の普及、教育といった面での様々な問題が立ちふさがっている。そのような状況の中で NGO がコミュニティレベルの意思を反映した活動を行うことには大きな意味があり、活動の小さな積み重ねが変化を生むと思われる。

まだ独立して 10 年の若い国、東ティモールでの今回の調査では、得るものが大きかったが、新しい疑問を持つきっかけともなった。分からないことは依然として多くある。東ティモールの今後に関わり続けたいと強く思える調査になった。

## 6. 調査を経て今後活動してみたいこと

調査に関して言えば、今回聞き取りを行った BELUN をはじめとする NGO の活動でまだ把握できていない活動や、見えていない視点があるため、今後もコンタクトを取りながらその全体像を明らかにしていきたい。

東ティモールではティモールと日本との「連帯」を強調されることが多かった。しかし、残念ながら日本側からの連帯は強いとは言えず、日本における東ティモールの認知度は低い。今後は「共に生きる」スタディグループとして、日本で関心を持ってもらうことを目標に活動を行いたい。「カンタ・ティモール」の上映、報告会などのイベントを通してでも、個人的に今回の調査について友人等に話すだけでも小さな変化は生むことができるだろう。無力な一個人であっても、ごく小さな変化を生み続けることは可能である。まずは身近なところからアプローチしていきたい。

## 7. 参考文献

• Johan Galtung: "Violence, Peace and Peace Research", *Journal of Peace Research*, vol. vi, no. 3, 1969.

• BELUN <http://belun.tl/> (最終閲覧日 2013/02/28)

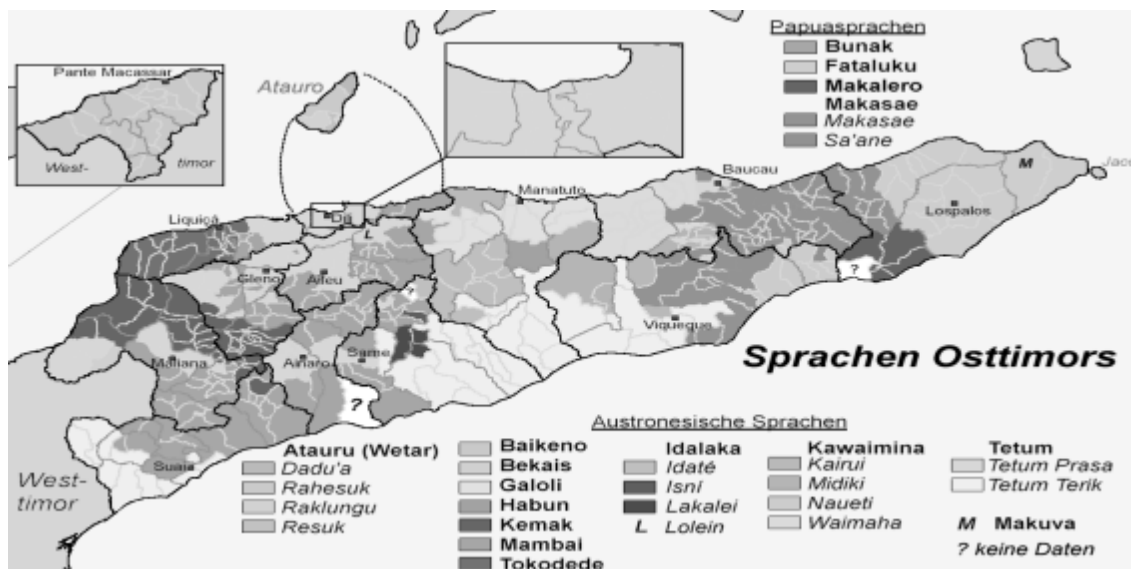
## 「多言語と東ティモールのこれから」

○笠 智遥（文教育学部グローバル文化学環 2 年）

### 1. 調査のテーマ

言語の豊かさと発展。

現在、東ティモールでは 30 を超える言語が使用されているが、こうした多言語環境が東ティモールの国造り（平和構築や capacity building など）においてどのような影響を与えるのか、またどのようにすれば多言語を活かした発展ができるのかに関心を持ち、昨年度同様ことばに注目したテーマを設定した。



→東ティモールにおける言語分布（2013/2/25 アクセス）

[http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/2/2d/Sprachen\\_Osttimors.png](http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/2/2d/Sprachen_Osttimors.png)

### 2. 調査設問

多言語環境は、これからの言語政策と国の発展に益するか。

### 3. 調査結果

i) 多言語環境とは一若者世代\*、親世代の言語習得にみる現状（※若者\*…30 歳未満）

母語、言語習得の経験、両親の使用言語、学習・習得言語の期間・方法について、UNTL の学生 3 人と運転手をしてくれた 27 歳の男性に聞き取り調査を行った。以下、学習・習得言語数、学習・習得言語、日常使用言語(母語)、親が使う言語の項目に注目し、その結果を簡単にまとめた。ただし、今回は習得レベル(初級～上級など)を問わず、本人がその習熟度について言及した場合のみ、( )内に示した。回答者によると、“basic” は簡単な挨拶と単語、構文を理解している程度であるという。また、この調査に協力してくれた 4 人はみな、ディリ以外の地方出身者である。

※T=Tetun, I=Bahasa Indonesian, E=English, P=Portuguese, L=Local language, O=Other Language

	UNTL's students			Driver
	Arina	Benyamin	Helder	Madeira
学習・習得言語数	6	5	5	7
学習・習得言語	T,P,E,I,L (Baucau), O(Korean)	T,I,E,L (Mambai), P(basic)	T,P,I,E,L (Bunak)	T,I,P(basic),E,L(Makasae, Fataluku,Makalero)
日常使用言語(母語)	T,L	T,I	T,L	T,L(Makasae)
親が使う言語	T,L(Baucau)	L(Mambai),I	T,L(Bunak)	T,I,L(Fataluku,Makasae, Makalero),P(父; fluent)

上記の結果から、若者の言語習得状況を一般化することは難しいが、おおよそ、テトゥン語のほかにインドネシア語や方言、地方言語を、場や人に合わせて複数使っているのではないかと推測する。また、余談ではあるが、現在の東ティモールの言語使用の特徴として、独立以前に教育を受けた世代間で教育言語が異なっていることを挙げたい。現在、政府の中枢を占める 40 代以上のポルトガル語習得世代（ポルトガル占領期）、30～40 代のインドネシア語習得世代（インドネシア占領期）、それ以降の世代はテトゥン語を主に話す世代である。第二次世界大戦前後の混乱や侵攻などで情勢が不安定であったため、十分な言語教育が行われず、複数の言語能が未発達な状態の人、識字できない人も多数いるのではないだろうか。

#### ii) 言語政策とその現状

独立以降、政府はテトゥン語とポルトガル語を公用語とし、それに伴い学校教育でも上記 2 語を母国語として教えることが決まったが、学校設備の不備や教師の不足と質、ポルトガル語教育の質の問題などから、母国語教育が潤滑に進んでいるとはいえない状況にある。近年では、学齢期には地方やコミュニティで使用される方言や地方言語を母語として教育すべきだという論調も広がり、政府も公用語以外の母語教育を認可したが、教育カリキュラムの不足、教師や教材の不足などにより、まだまだ課題が多い。

#### 4. 考察

東ティモールの多言語環境について、どのような現状にあるのかを大学生や一般人への聞き取り調査を通してまとめた。本調査では、調査対象者が 4 人で調査数としては少ないが、テトゥン語やインドネシア語の他に 1 つ以上の地方言語を使用していることが分かった。また、親世代では必ずしもテトゥン語を習得しているわけではなく、地方によっては公用語以外の地方言語が強い影響力を持っていると考えられる。東ティモールが抱える多言語の問題としては、世代間で習得している言語が異なること、公用語の教育が十分ではないこと、母語教育が不足していることなどがある。調査以前は、政策として推進しているポルトガル語とテトゥン語の教育に重点を置いて言語をある程度統一することが、国の草創期にある東ティモールにとって最重要であると考えていた。しかし、東ティモールで

いろいろな人に出会い、話を聞く中で、それぞれの言語を尊重し合うことで多様な言語文化を守っていること、多言語が相互補完の役割を担っていることがわかった。したがって、国内外の多言語を分野や TPO に合わせて相互補完的に利用していくことが、東ティモールの発展に寄与するのではないかと考える。多言語ゆえの煩雑さもあるだろうが、多言語を受け入れるからこそ生まれる言語文化の豊かさは、東ティモールの誇りとなるだろう。

## 5. 調査に参加した感想

昨年度に引き続き、二度目の参加であった。去年に比べると、新しい建物や公園が増えていたり、携帯電話で話している人が多くなっていたりという変化を感じると同時に、日中に道端で屯する若者の多さは変わらないなと感じた。このように変化していること、変化していないことを自分の目で見ることができたのは大きな収穫であった。今回のツアーを通して特に印象に残っていることは、UNTL の学生たちとのフィールドワークである。普段は、どんなところで買い物をしているのか、どんなものを食べているのか、最近の若者で流行しているものは何かという日常生活について聞くことができただけでなく、将来への不安や希望、歴史観などについてもお互いに共有できた。また、昨年度のディスカッションで友達となった人と再会することもでき、こうした人とのつながりを大切にしていきたいと思った。フィールドワークの最後には、東ティモールにおける平和構築について議論したが、UNTL の学生 2 人とも戦争を直接体験しており、戦時中の出来事を語るのは辛そうであった。現在は、ほとんどの人々が戦争体験を共有しており、それが国民としてのアイデンティティの一部となっているが、これからは戦争体験のない世代にどのようにしてこれまであったことを語り継いでいくかが重要になるのではないかと思う。

個人では東ティモールへ旅行することはなかなかできないが、こうした機会を通じて二度もスタディツアーに参加する機会をいただき、本当に感謝している。昨年度の反省や良かった点などを踏まえて、勉強会や事前準備に活かせたので、昨年度以上に充実した調査になったと思う。

## 6. 調査を経て今後行動してみたいこと

- ・今回の調査についての学内外向けの報告会。

平和構築、食・フェアトレード、衛生のグループに分かれていたので、グループごとに発表する時間も設けたい。学内だけでなく、ロロシップといった東ティモールに関わる学生団体との交流を目指した報告会も企画したい。

- ・映画『カンタ！ティモール』の上映。

昨年は二度上映を行い鑑賞者に好評だったので、今年は規模をもう少し大きくして上映会を行いたいと思う。この映画以外にもティモールに関わる映画やドキュメンタリーはたくさんあるので、他の映像媒体の上映や意見交換をする場を設けていきたい。

・他団体との交流

東ティモールに関わる団体と、今回私たちが体験してきたことなどを共有したり、学生団体の活動やイベントへの参加を通して、日本でも東ティモールへの関心を持ち続けたい。

7. 参考資料

- ・東ティモールにおける言語分布 (2013/2/25 アクセス)

[http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/2/2d/Sprachen\\_Osttimors.png](http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/2/2d/Sprachen_Osttimors.png)

- ・東ティモール政府公表「戦略的開発」

<http://timor-leste.gov.tl/?cat=32&lang=en>



ティモール・プラザにて。奥で座っている人は、パソコンや携帯電話を使用している。昨年より、無料 wi-fi を提供する場所が増えたと感じた。携帯電話だけでなく、パソコンを所有している人も多い。



一日の終わりの反省会&振り返り。訪問したところの情報共有、反省、新たな気付きについて意見交換。この振り返りを行うことで自分たちなりに考えを深めることができた。

## 東ティモールにおける平和構築の全貌-草の根レベルの調査から-

○鈴木 実穂（文教育学部人間社会科学科グローバル文化学環 2年）

### 1. 調査のテーマ

東ティモールでの国づくり、平和構築のプロセスをマクロな視点で捉えることをテーマとする。国の開発を進めるためには、多くの組織の綿密な行き交いが不可欠だ。私は、東ティモールにかかわる現地の方、NGO、外国企業などがいかにしてこの若い国を創っているのか、どのような関わり方をして国を構築しているのかを、表面的なものだけではなくそこで働き生きておられる方々の心情と共に調査したいと思い、国づくりのプロセスを様々な視点から考察しようと思う。

### 2. 調査設問

東ティモールの国づくり、平和構築どのようなアクター間の連携があり、それぞれがどのように関わり合い進められているのだろうか。



写真1：UNTLの学生とのディスカッションの様子

### 3. 調査結果

今回のスタディツアーでは政府機関に近い団体から地域住民へのインタビューまで幅広く訪れたため、訪問したそれぞれの団体ごとに、他アクターとの関係性という観点に絞ってインタビュー内容をまとめる。

#### <NGO Belun>

- ・ コロンビア大学の紛争解決センターの働きかけによってつくられた。大学での研究結果のノウハウが活かされている。
- ・ 政府との連携が綿密なNGO。政府と連携する中で国の理想像やビジョンが行き違うことはないかという質問には、政府とBelunのビジョンは同じだが、役割ややることは違う、といった回答を頂いた。
- ・ お金をあげて住民との関係を築くのは簡単。しかし、それでは自立して自分たちでやるという住民のボランタリー精神は育たず、また、お金もある訳ではない。(シャナナ・グスマンなど政府の高官は、ゲリラ活動を行い住民の協力を得て森に籠り戦っていた歴史があるので、独立した今でも今までの経験を生かして住民目線の政治指導を行なっている。住民の心を大切に、自ら村へ出向くことを定期的に行っているそうだ。どういう国をつくっていくのかという理想、スタンスを草の根レベルで考えている。)
- ・ 全国に置いている調査員がその地域の警察とも連携し、どんなことが地域で起きたのかを月2回のペースで情報交換している。その調査結果をディリ本部に報告。それをすべ

て集計したものを政府にも報告し、分析を行う。

- community capacity building のために、メディアを通して、他 NGO とも連携しコミュニティの人たちとの関係づくりをしている。

<コモロ村>

- 現地 NGO にパワーポイントの使い方を教えてもらうなど、技術的に足りない部分を補ってもらっている。
- 伝統工芸品のタイスについては、海外関連の顧客が多く買いに来るので海外との関係性が強い。

<NGO Ba Futuru>

- ドイツ政府やオーストラリア政府、イギリス政府、UNDP など、海外のドナーが多い。運営費のほとんどを外国の大規模な機関から援助を受けている。
- 東ティモール政府との関係も強く、彼らの金銭的なサポートを得ると共に、それに還元するものとして警察官へのトレーニングを行う等相互扶助がなされている。しかし、東ティモール政府についてはまだ本腰を入れて教育に取り組んでいる段階ではなく資金も潤沢ではないので、金銭面の大きな支えは海外のドナーに頼る傾向がある。

<UNTL の学生へのインタビュー>

- 政府への不満はあるか。→特に雇用についての政府の支援はなく、留学生への奨学金など学習関連の支援はある。雇用については、政府は特に重要で大きなポストを、東ティモールの人ではなく海外から呼び寄せた外国人に任せることが多い。それこそを東ティモール人がやっていくべきであり、ただでさえ雇用の絶対数は充分でなく東ティモール人は雇用機会を渴望しているので、そのような政府の対応に不満を持っている。

<UNICEF>

- UNICEF はあくまで東ティモール政府の政治方針を支援する立場であり、そのため政府との連携を常に取り政府の意向、公式発表されたものを最重要し活動している。
- 活動する中で、現地のことを草の根レベルで深く把握している NGO との協力をすることが多いのだが、プロジェクトをいきなり開始するのではなく、そのプロジェクトのビジョンや意識の共有などを行うミーティングを開始前に開き、そこで連携姿勢を確認してからプロジェクトを始める。UNICEF 単独では出来ないことも NGO との協力で成し遂げていく。

<NGO FUNDEF>

- AUSAID が大部分の資金面での援助をしてくれている。
- Peace building をしている国際 NGO 等の他団体と連携している。
- Shelter と呼ばれる避難所、駆け込み寺のような場所と連携し、様々な暴力を受けた女性たちの受け入れを要請するなど女性の人権保護活動をしている。

<レテフォホの小学校>

- 生徒が中退してしまう原因を解明するために国際 NGO の Care International と協力し



- て、何故子どもたちは学校に来ることを辞めてしまうのかを調査する。
- ・ 日本政府がつくった校舎を使用している。
  - ・ 政府の予算の都合で給食が1ヶ月ほど止まっているが、政府の動き次第でまた再開される見込みである。

#### 4. 考察

NGO や市役所、現地の人々など様々な団体や人にインタビューして分かったことは、違う立場の人でもこの国に対する問題意識というのは草の根レベルであり、共通した意識があるということだった。東ティモールの平和構築を考える上での問題意識とは、具体的に言うと、雇用の不十分、失業率の高さ、言語の多様性における弊害、教育機会の不足などが挙げられる。これらの問題は、その人たちにとって当事者性の強い問題、つまり、目の前にある身近な、生活に寄り添った問題ばかりだ。何故このような問題を多く取り上げるかという、活動結果が目に見えやすく、自分としても危機感を常に感じていられる問題だからだと考える。それだけその問題に対する切実感を、支援者側も活動する側も享受する側も持っているのである。そのような身近な問題への共通意識から、各アクターごとの連携は上手くいっているように見える。

だが、国づくりという大きい観点から見ると、あと数年後、数十年後にどのような国にしたいのか、といった、将来まで見据えた具体的なビジョンが見えて来なかった。なんとなく今やるべきことは見えているのだが、それを解決してから先の先まで見えているのが不明瞭で、将来の具体的なビジョンを各団体で聞いてみたがどうしても論理武装している印象を受けた。平和構築をする上での国の枠組みが曖昧で、理想像やビジョンを尋ねても peace building や conflict prevention などの言葉が実態を持たない虚無な言葉と化してしまっているように聞こえてしまったからである。今の段階では直面している目の前の問題で手いっぱいなのだという現状を垣間見ることができた。そのような状況下で、平和構築をどのように考えていけば良いのだろうか。

東ティモールは独立して間もなく、しかもこれまで他の地域の人々に従属して生きてきた歴史がある。この歴史が意味していることは、東ティモールの人々は常にある程度決められたルールの上を歩いてきたので、自分たちでそのルールを敷くという、自分がそのルールを作る側になり自らが開拓していくという経験が豊富ではないということだ。東ティモールの人々の行動や性格が受け身姿勢であり、周りの流れに身を任せていると間々感じることがあるのはこのような歴史が関係しているのだろう。そのため、目の前にあることをとにかくこなし、解決していくというプロセスを独立した今でも歩んでいるのかもしれない。または、歩まざるをえないのかもしれない。

しかし、このような、平和構築についての具体的なビジョンを求めているのは私たち外部だということも忘れてはならない。国づくりは短期的スパンで出来るものではない。それは、私たち自身の歴史を振り返ってみても明白なことだ。何十年何百年の歴史をかけて

国の基盤をつくり長年の実績を積みかさねて、ついには平和ボケという言葉が生まれるほどに“平和”のクオリティは高度なものになった。それを今、まだ人材もお金も材料も充分でない中、無いものがありすぎるという中で将来像を具体的に示せと言っても無理があるのかもしれない。もっと長い目で国の行先を見つめ、今行われているような、目の前にあることを順番に解決していくうちに将来像や平和の在り方が自ずと見えてくるのだという思いで、彼らの様々な活動を共に応援していかなければならないと思うし、もう少し私たちの方も、彼らの置かれている状況を深く理解する必要があるのではないかと思う。東ティモールの平和とは、時間とともに積み重ねられたものから見出される、あくまで東ティモール人自身が見出すものであるといったスタンスを私たちが持つべきである。

## 5. 調査に参加した感想

私は今回東ティモールをマクロな視点で捉え、平和とは何か、平和構築とは何か、国づくりはどういう理想の下にどう実際に行われているのかという、東ティモールの全体像を把握しつつ自分自身の学びに繋げたいと考えていたのだが、やはりそれだけスケールの大きいテーマを1週間の期間で結論づけるのはまだ不十分だと感じた。しかし、この1週間の東ティモールでの学びは、消化するのに大変長い時間を要するほど内容が濃くとても充実したものだだった。

私は、調査を積み重ねていくほどに東ティモールの見えない問題の壁に直面していった。東ティモールの人々は日本人の気質と似ている部分があり、問題が表面化しにくい地域だと感じている。その分、そこに長期に渡って関わっている人々からは、コミュニティとの綿密な関係を築けば築くほどそのコミュニティに潜む奥深くの問題や、人間関係の良し悪しから起こる問題等どんどん根が深い問題が出てくるそう。紛争解決など大きい問題を解決するには、住民が日常的に直面している様々な出来事をどれだけ客観的に観察しそれが紛争に繋がる可能性を分析することが大事だと考える。住民目線からの底上げが重要なのだ。紛争予防につながる第一歩は人々の生活の中にあるのだと感じた。

また、私が今回テーマとして取り上げた平和構築についても、そのテーマ自体はかなりマクロな視点で考察すべきだが、その考察する土台として、もっと目線を落とした、住民目線の問題を視る必要がある。目には見えない隠れた実態を、彼らの文化や歴史、精神的側面を考慮して分析し、その細やかな分析を平和構築という大きなテーマに落とし込んで調査する必要があるのではないかと感じた。たくさんの現地の人々との交流の中で、彼らの平和に対する意識、気持ちを実感することができて大変有意義な調査となった。

## 6. 調査を経て今後行動してみたいこと

UNTL や現地 NGO などたくさんの方との深い交流ができたので、この繋がりをもっと生かしていきたいと思う。例えばスタディグループの活動の一環として skype をつないで彼らとコミュニケーションを取る機会を設けたり、東ティモールに関連する映画上映を行う際

に彼らにその映画の感想や、その映画に関する自分の意見などを予め聞いておいて映画上映の際に参加者に伝えたりと、東ティモールの人々を身近に感じる事の出来るようなイベントを行いたいと考えている。

また、東ティモールを応援している日本の NGO も多くある。その NGO のイベントに今後もボランティアとして参加し、日本人の方への啓蒙活動、交流を行いたいと考えている。自分で見たものを誰かに還元することで、自分が学んだことを自分ひとりだけの学びにせず、多くの方の学びに繋げていきたいと考えている。



写真 2 : Ba Futuru でのインタビューの様子



写真 3 : レテフォホにある  
コーヒー農家グループへの  
インタビューの様子

## 東ティモールにおける平和構築と教育、コミュニティの関わり

○齋藤 美咲（文教育学部人間社会科学科1年）

### 1. 調査のテーマ

教育とコミュニティがどのように平和構築に貢献しているのか。

### 2. 調査設問

東ティモールにおいて、

- ①教育がいかに平和構築に貢献しているか
- ②コミュニティと平和構築がどのようにかかわり合っているか

ここでは「平和構築」を、紛争の予防や解決ということだけにとどまらず、「人々が安心して暮らすことのできる環境づくり」と定義する。

### 3. 調査結果

- ①教育がいかに平和構築に貢献しているか

今回の東ティモールスタディーツアーでは、コモロ村にある私立の中高一貫校、レテフォホにある公立の小学校と、Ba Futuru という NGO によるインフォーマル教育を見学した。また、東ティモール国立大学(以下 UNTL)の学生とフィールドワークを行なった。それぞれのフィールドワークの結果を述べる。

#### <Sao Pedro 私立中高一貫校(コモロ村)>

この学校では二部制方式をとっており、午前中に高校生、午後に中学生が授業を受ける。私立学校だからか、学校の施設が整っていたことが印象的だった。また news competition や garden competition、music competition など、学校では様々な competition が開催されている。このように設備や行事が充実しているため、生徒たちの個性を表現する場が整えられているように見受けられた。

高校生と交流していると、放課後も家で自習をするという女子高生や、電気を点けず薄暗いなか、午前中から図書館で自習をしている中学生がいたことから、生徒たちの学習意欲の高さを感じた。将来の夢についてある男子生徒3人にインタビューをしたところ、2人は将来医者になりたいと答えていた。さらに女子生徒2人に卒業後は UNTL に進学するか、海外に留学するかと問いかけてみたところ、どちらの道も難しいが進学したい、特に日本に留学したいと答えていた。そのような生徒の話の聞いていると、月曜から土曜まで、整った環境で質の高い教育を受けている彼らは、将来の東ティモール、そして世界を担う人材になるのだろうと感じた。

#### <公立小学校(エルメラ県レテフォホ郡)>

この学校は月曜から金曜まで授業があり、普段は警備員が掃除をするが、土曜は生徒み

んなで掃除をする。掃除は生きるうえで身の回りの環境をきれいにする大事な営みである。大勢で掃除をすれば楽しさもあり、環境を整えると心も落ち着くため、このような小さいことでも平和構築に貢献していると私は考える。

こちらの学校でも私立の Sao Pedro と同様、competition が行われる。ローカルな食材を使った cooking competition は 3 ヶ月に一回行われ、男女ともに参加するという。このような取り組みによって男女分業の意識が少しずつ薄れ、協働の風習が広まっていくことが期待できる。また、毎週金曜はサッカーやバスケットなどの competition もあるという。このように学校はただ勉強するだけの場所ではなく、ひととの関わりを通じて人間性を培っていく場所でもある。Competition はもちろん楽しいから行なわれるということもあるだろうが、子どもの仕事でもある「遊ぶ」機会を保障する役割を果たしていると理解した。

ところで、生徒同士で喧嘩が起きたとき、学校はどのような対応をするのかという校長先生への問いに対して、先生が直接介入してやめさせるという答えが返ってきた。そうせざるを得ないような喧嘩であれば、直接介入して深刻な事故を防ぐことは必要だが、平和構築のベースを作ることを考えたとき、可能な限り生徒同士で考え解決させるような指導が求められる。喧嘩は一種の学びであり、そこから紛争予防や自己解決能力を高めるのではないだろうか。

#### <NGO Ba Futuru>

まず団体の概要を説明する。Ba Futuru は“For the future”という意味で、2004 年に設立された NGO である。ミッションは平和構築と持続可能な人間開発を目指すために、①紛争の影響や、虐待を受けている子どもと青年の社会心理の回復を促進すること、②人間と子どもの権利と保護、紛争から非暴力への変換を考慮し、コミュニティリーダーや若者、保護者の、知識と質、技術を高めることとしている。ここでの教育は参加型学習、技能向上、芸術的自己表現、人間の権利をベースにした計画に基づいている。

今回は Bano 氏、青年海外協力隊として駐在している矢加部さんにお話を伺い、施設を見学した後、日本語を学んでいる学生との交流をした。

Bano 氏と矢加部さんによると、1 年単位で助成金をもとにプロジェクトを行っており、現在は 5 つのプロジェクトで 40 人のスタッフがいるという。対象者は主に若者(30 歳前後まで)である。以前に闘争や紛争に関わった当事者や被害を受けた女の子など、環境が要因で仕事や学校に行っていない人をスタッフが探し、彼らをコミュニティリーダーに育てあげ、地域調査のアウトリーチをしてもらう。

紛争から非暴力を推進するため、「なぜ紛争が起きるのか」から、「それをどう予防するのか」という考え方の訓練をする。具体的には、ものごとが丸くおさまる交渉の仕方や暴力ではない解決の仕方などを指導する。また、美術やメディアの授業などから平和構築につなげたいが、それだけでは人が集まらないため、英語の授業を開いているという。東ティモールでは就職難が conflict の深刻な要因であるため、プロジェクトを終えた者には、

就職のために証明書を発行している。

#### <UNTL の学生とのフィールドワーク>

##### ・AMRT(東ティモール独立記念館)

東ティモールの独立に関するパネルが、写真やビデオなどと共にまとめられていた。また、独立活動家の実際の衣服や所有物と、コニス・サンタナの墓、隠れ家のモデルが展示されている。スタッフは今に残る日本との関わりを語ってくれた。具体的には日本の兵士服が今も残っていることや、日本軍が戦いの際に掘った大きな穴がバウカウに残っているということだった。

##### ・UNTL の学生、アリーナとベニーとのディスカッション

彼らによると、他人を尊敬することを知らないひとは、それが暴力や喧嘩につながりうるのだという。そして相手は家族や友人のときもあるそうだ。また、ドラッグ濫用や環境破壊をする者もいる。このような問題は日本と同様、どの社会でも見られることであるため、地球規模で考えなければならない問題であることは間違いない。

多くの人が言うように、卒業後の就職不安が若者に大きな不安をもたらしている。東ティモール政府は、彼らに就職サポートをしないいうえに、外国人に職を与えてしまう。さらに、外国人が管理職に就いてしまうため、東ティモール人は外国人の下で働くことになるのだという。

#### ②コミュニティと平和構築がどのようにかかわり合っているか

ここでは、NGO Belun の事例を取り上げる。ディリの事務所とエルメラの地域管理者にインタビューした。

Belun は、紛争予防と、技能向上、現地 NGO の強化を指針声明としている。14 の各地区の管理者がそれぞれの地区で conflict を認識した場合、peace form に記入し、警察へ提出する。そして、それが大きな紛争になりうるかを分析し、関係者(地域住民)と情報共有する。また、Belun や警察だけでなく、関係者にも毎月まとめた peace form が配布される。

エルメラ県でのフィールドワークでインタビューしたところ、ローカルマーケットは、売れ残ったものをローカル用に安く売るのでそうだ。ほかに地域の人々が集まるイベントとしては、イースターやクリスマス、冠婚葬祭、スポーツ大会などがあるという。また、毎週金曜日午前に行われる掃除活動について、家の周辺だけでなく、不定期に、グスマン首相に地域清掃をメディアで呼びかけられると、一斉に広域に清掃を行うというのが興味深かった。更に印象的だったのは、最近 Black Magic(黒魔術)が流行し、突然死が何度も起きているということである。ここでは詳細は省くが、その深刻な問題は近隣の者同士責め合うことで、これはコミュニティの秩序を破壊する可能性を持っている。エルメラでは近隣の人たちで真実を言えるよう、近所同士や家族同士協力するための訓練を行なっているそうだ。

#### 4. 考察

東ティモールにおいて平和教育という特定の授業を行うことは、時間的にも資金的にも余裕がないため、現段階では困難だ。しかし教師の工夫によっては、教育を通じて平和的思考力を培うことができる。また、学校での遊びや自己表現は、ひとが健全に成長するうえで欠かせないプロセスであるし、Ba Futuru などの学校外教育によってより高次の知識を得ることは、日々の不安を取り除き、人間としての充足感を得る機会を与える。

一方で、いくら教育を発展させたとしても、政府や警察などの公的機関でも汚職が横行していれば、国民の不安は増すばかりで学習の意欲が低下してしまい、将来の暴動にもつながりかねない。政府が国民を育て、国民が国を信頼して働ける仕組みが整わなければ、東ティモールが外国の手から逃れ、自分たちの国を支えていくのは困難である。

また、コミュニティの結束は紛争予防や紛争解決に大きく寄与し、日々の不安も軽減することができるが、逆にコミュニティのなかに信頼関係がなければ、コミュニティによる平和構築は成り立たない。

東ティモールではさまざまなアクターが平和構築プロジェクトを行なっているが、ボランティア精神が基盤になるものが多い。また、行政や警察、司法などを信用できないため、アクター間の連携もしづらい。特に、潤沢な外国や国連などがイニシアチブを握っている。

#### 5. 調査に参加した感想

東ティモールでの調査はまさに「百聞は一見に如かず」だった。事前勉強会やシンポジウムなどでの学びも大きかったが、実際の雰囲気や人々の表情、街並み、建物の様子などを五感で感じることができ、非常に刺激的だった。紛争の要因としては「不安」がキーワードであった。様々な「不安」が存在するなか、ひとつひとつ段階を踏まえながら解消していくことが、徐々に平和構築につながっていく。東ティモールを深いまなざしで見ることによって、日本や自分自身の気づきにもつながり、大きな学びを得られたと思う。

#### 6. 調査を経て今後行動してみたいこと

東ティモールの素晴らしさを多くの人に知ってもらいたい。そのために、①東ティモールに関心を持つ様々な学生とコンタクトを取り続けて情報を共有・発信すること、②東ティモールで得た学びを、SNS などを通じて多くの方に見てもらおうこと、の2つを実行したい。また、平和、教育、地域の関連性をより具体的に検証し、学びを深めたい。

#### 7. 参考文献

・ Ba Futuru HP ・ 大門毅「平和構築論—開発援助の新戦略—」2007、勁草書房

## 教育と平和構築からみる言語課題

○柳下 明莉（文教育学部人間社会科学科 1 年）

### 1. 調査のテーマ

東ティモールでは公用語としてのポルトガル語・テトゥン語、実用語としてのインドネシア語・英語が憲法では規定されている。東ティモールにおいて教育と平和構築を考えた際に存在する言語にまつわる課題を知り、そうした課題の原因とともに今後どのように対応していくべきかを考察していきたい。

### 2. 調査設問

東ティモールにおいて言語にまつわる課題、特に教育と平和構築における課題はどのようなものであり、その原因は何であるのかを知る。そして将来的にどのような解決が望まれるのだろうか。

### 3. 調査結果

はじめに東ティモールにおける言語にまつわる課題としては、公用語であるポルトガル語の普及率が低いことがある。アジア財団の 2008 年の調査ではポルトガル語を話すことができる人が男性で 21%、女性で 12%であり、読むことができる人は男性で 19%、女性で 8%となっている。また年齢による使用できる言語の違いも大きい。35～50 才では 27%がポルトガル語を話せるのに対して、25 才以下では 11%である。ポルトガル語と同じ公用語のテトゥン語は 25 才以下で 96%、50 才以上でも 77%が話すことができる。しかしテトゥン語は学術用語や法律用語などが発達していないためそうした分野での使用に制約があることが問題とされている。また実用語とされているインドネシア語は 25 才以下では 83%が話すことができるが、50 才以上だとその割合は 27%と低くなる。

このように東ティモールでは支配の歴史によって使用できる言語が年齢によって異なる。こうした状況において政府は独立後、学校教育においてポルトガル語の使用を進めてきた。しかし教師たちのポルトガル語能力が授業を行うことができないレベルであったり、教科書が足りなかったりすることから言語の問題が教育全体の問題ともなってきた。

調査の際に UNICEF の方があげたデータでは、東ティモールでは小学校 1 年終了時点で 70%が 3 年終了時点で 30%が読み書きの能力がないという。こうしたことに対応するために政府が今までは禁止してきた母語での教育を幼児教育から小学校低学年において行うことを推進するようになった。これはポルトガル語とテトゥン語による教育の限界、また教育の場において母語教育を重視する流れがあることが影響している。ただアジア財団の調査ではテトゥン語を母語とする人が 43%であるが、その他のローカル言語を母語とする人も 57%と高い割合を占めている。そしてローカル言語の数も 10 以上ある。母語で教育を受けることが子どもにとってプラスの影響があるとしても、現地の教師が子どもたちの母語



を使うことができるのか、また母語が異なる子どもが同じクラスにいる場合はどの母語を使用するのか、またそれぞれの母語による教科書をどのように用意するのか、どの年齢まで母語教育を行いそこからどのように公用語に移行していくのかといった多くの課題があるだろう。

今回の調査で訪問した機関では UNICEF 以外のすべての機関がテトゥン語は使用していると話していた。Belun でも Ba Futuru でも海外から来た人もテトゥン語はすぐに覚えることができるため職員同士のコミュニケーションではテトゥン語を使うそうだ。そしてテトゥン語と共に使う言語としては英語が多く、公的機関であってもポルトガル語を使用できる人は限られているようだった。次に学校教育における言語を取り上げる。

今回の調査ではコモロ村の私立聖ペトロ中学校・高等学校とレテフォホの公立小学校を訪問した。コモロ村の聖ペトロ中学校・高等学校では主に高校生、校長先生からの聞き取りを行い、レテフォホの公立小学校では校長先生に質問に答えていただいた。

聖ペトロ中学校・高等学校では、中学入試で小学校においてポルトガル語を習ってきたことを前提に入学試験にポルトガル語が設けられており、高校入試では中学で学校独自で行っている英語も試験科目になっている。聖ペトロの高校生はほとんどの生徒が英語で私たちと話すことができた。私が話を聞いた生徒は家ではテトゥン語を話し、授業で行うポルトガル語・英語に加えインドネシア語も話すことができると言っていた。また UNTL の学生とのフィールドワークで一緒になった学生のひとりがこの学校の卒業生であったが、英語は得意だがポルトガル語は読むことはできても意味はわからないと話していた。これはその学生の年齢ではポルトガル語教育があまり行われていなかったことも影響しているだろう。

レテフォホの公立小学校ではポルトガル語とテトゥン語が授業で用いられているが、教師の皆が流暢に話すことができるわけではないと校長先生が言っていた。ポルトガル語ができない教師に対しては政府による研修があることは UNICEF でもこの学校でも聞いた。またコーヒー農家の人にも言語について聞くことができたが、その地で生まれ育った人はローカル言語である Mambae を用い、他の土地から来た人はテトゥン語を話すそうだ。

ポルトガル語が公用語になっていることについては主に2つの対象的な主張があった。私たちの祖先が使ってきた言葉であり、ポルトガル語を話すことは自分たちのアイデンティティであるとポルトガル語の使用を肯定する主張する人がいた。その一方で言語が複数あることは自分たちを混乱させ、わざわざ別の言語を用いるのならばポルトガル語よりも英語のように世界で使うことができる言語をやるべきだと主張する人もいた。

こうしたことを踏まえて次に将来的に東ティモールは言語問題をどのように解決し、教育や平和構築をおこなって行くべきなのかを考察する。

#### 4. 考察

調査を通して私はあまりポルトガル語の必要性を感じる場面はなかった。ただ植民地と

して歴史の長いポルトガルによる支配はインドネシアの支配より好意的に受け止められているようでそうした歴史的な要素と独立後ポルトガルからの支援が多く東ティモールに寄せられたという政治的な要素から現在のテトゥン語とポルトガル語を公用語とする体制ができてきているのだろう。ただそこから生じる弊害もわかってきておりこのままテトゥン語とポルトガル語で進めるわけにはいかないと判断した政府が母語による教育を進める体制になってきている。ただ一口に母語教育とはいってもそれを実際に行うには様々な困難が伴う。そうしたことを考えると私は東ティモールにおける教育ではテトゥン語の拡充と英語教育が求められていると思う。

まずテトゥン語の拡充とはテトゥン語を大学レベルの高等教育でも使用できる言語にして、政府の文書・法律などにもテトゥン語を使用するようにすることである。テトゥン語を母語にしない人ももちろんいるが、前の世代と比べて学校教育を受ける割合が増えていることやテトゥン語が外国人にも比較的学びやすい言語である点を考えるとテトゥン語を拡充しすべての教育をテトゥン語で行うことができるようにすることでより多くの人により少ない労力で教育を受けることができるようになるだろう。

また英語教育を学校の正規課程で行うことは世界市場の中で東ティモールが生き残って行くには必須であると思う。それは東ティモールの産業の可能性として大きな可能性を秘めているのが観光業であり、東ティモールには観光業の資本となり得るものが多くあると考えるからだ。私の考える東ティモールの観光の柱は「美しい自然環境」と「紛争を経た場所からの平和のメッセージ」という2点だ。特に「平和のメッセージ」という点については東ティモールの歴史が独立を果たす前からその後まで暴力をなしに語ることが難しいことを逆にとるものだ。「平和のメッセージ」を伝える、暴力のもたらず脅威を後世に伝えていく国として観光客を受け入れることができるのではないか。もちろん普通の観光客がこうしたことを観光地に求めるとは考えにくいがそれこそ大学などのスタディーツアーをまず呼び込み、そこから観光客にも来てもらうことは可能だと思う。

東ティモールにおいて言語が問題となっている原因として先に述べた通り支配の歴史がある。それをどう乗り越え平和を作っていくのか。平和とはなんであるのかを東ティモールの人自身も考え、また過去に起きた出来事を歴史として残していくことは東ティモールにおける平和を構築していくために大切である。そしてまたその歴史を伝えていくには教育が大きな役割を果たすだろう。言語と教育と平和構築というそれぞれ異なった分野のようではあるがそれがつながることで問題を生じさせることもあれば、逆に問題を解決することもできる。プラスの相関を起こしていくために何が求められるのかをより詳しく調べ、考えていきたい。

## 5. 調査に参加した感想

今回のスタディーツアーでは「東ティモール」という国のことはもちろん、調査の難しさやこれから先どのように過ごしていくのかのヒントなど本当に多くのことを学ぶことが

できた。短い期間ではあったが、1日1日の活動の密度がとても濃い1週間だった。

質問が多くの分野に及んでいたのも、回答者は大変だったと思うが、多くの視点から同じことを見ていくことの面白さを感じることができた。様々な訪問先で順々に質問をしていくなかで次第に自分の興味関心が向く方向がどこであるのかがわかってきたような感覚もあった。今回の調査では主に言語から質問をしていったが、今度はより平和構築に重点をおいて考えてみたいと思う。毎日の振り返りによって新しく知識を得たり、断片だった知識がつながったりする過程は面白く大切な時間だった。最終日のそれぞれのグループの発表では自分の持っていなかった視点から見ることでより自分が何を見ようとしていたのかがわかった。年齢も興味関心も様々な人が集まった今回の調査では、それがとても良い意味で発揮されていたと思う。そうした中で私自身が漠然と「平和」というものを思い続けてきた理由の一つとして平和でない状態、戦争の恐ろしさにあることに気づいた。何らかの問題をどのように解決することができるのか、皆が良い方法・手段を知っていたらもちろんいいだろう。けれど皆がその解決策を知らなかったとしても最悪の方法・手段を避けようとする動きがあれば、それ以外の何らかの方法・手段を見つけることができる。そのような考えから今後も平和構築についてより考えを深めていこうと思う。

## 6. 調査を経て今後行動してみたいこと

調査によって得たことを自分の中で整理し、一緒に行った人を含めて多くの人と共有したい。また調査をしたことによって新たにでてきた疑問に対する答えも探していこうと思う。具体的には大学や高校でのプレゼン、カンタ・ティモールなどの映画の上映会、日本や東ティモールの学生・NGO職員など様々な立場で東ティモールと関わっている人との意見交換会などが考えられる。こうしたことを継続的に行うことで今回の調査によってできたつながり、縁をさらにつなげていくことになるだろう。

## 7. 参考文献

The Asia Foundation : Timor-Leste

<http://asiafoundation.org/country/overview/timor-leste>

### Ⅲ. 訪問記録

## ○NGO BELUN

訪問日時：2月19日16:00～17:00

面談者：Ms. Maria Marilia Oliveira da Costa (EWER Program Manager)

他、BELUN スタッフ五名

### 1. 内容

NGO BELUN は、2004年に活動を開始した東ティモールでは老舗のNGOである。コロンビア大学が紛争についての調査、研究を行う中で、コミュニティレベルからのアプローチを行うアクターとして創設されたのがBELUNであり、現在はBELUNとして独立して活動している。アタウアイランドという離島も含めた東ティモールの13州すべてで活動を行っており、その活動内容は多岐にわたっている。

聞き取りの中で、初めにBELUNの活動概要についてお話を伺った。平和構築のための小さなプロジェクトを多数実施しそれを統括するのがBELUNの主な仕事である。女性や若者の参加にも力を入れており、コミュニティレベルからの活動を促進している。紛争予防のプロジェクトの中で特徴的なのがEWER (Early Warning and Early Response) である。これは13州すべてで実施され、sub-districtレベル(村単位)で管理されている。ローカルな人々がモニターとして紛争の要因となりうる出来事がないか調査し、それを一か月に一、二回のBELUNスタッフとの合同ミーティングや報告書にまとめて提出する。モニタリングの結果見えてきた問題に対してアプローチを繰り返すことで解決を図るまでがEWERの一連の流れである。EWERでは、直接的な紛争予防だけでなく、コミュニティの能力育成にも重点を置いている。CPRN (Conflict Prevention and Response Network) と呼ばれるネットワークを設立し、「タラ・バンドウ (tara bandu)」と呼ばれる伝統的な儀式のような活動、コミュニティでの対話やセミナーの開催を通してコミュニティ内部での能力育成を行っている。このネットワークの中ではBELUNはコーディネーターのような役割を果たしていると思われる。またBELUNはローカルNGOへの能力育成事業も行っており、経理などを含むNGOのマネージメントに関してのトレーニングも実施している。

BELUNは東ティモールのNGO業界のなかでも伝統、実績があり、尊敬されるNGOである。活動の中で得られたデータは統計として国際的に開示しており、UNICEFなどもBELUNのデータを参考にしているとのことだった。

### 2. 所感

今回のBELUN訪問では、外部者としてのNGOの役割について考えさせられた。日本で行われたシンポジウムでBELUNのEWERプログラムマネージャーであるマリア氏のお話を伺った際は、東ティモールのNGOであるBELUNは東ティモールの抱える問題に関係する内部者であると考えていたが、聞き取りを通じて見えてきたのは活動の中でのBELUNのコーディネ

ネーターとしての役割だった。コミュニティに入り込み支援を行う以上、NGO はローカル NGO であっても外部者としての側面を捨て去れない。そのことを強く感じるとともに、支援することの難しさを改めて思い知った。NGO BELUN の聞き取りではコミュニティとの連携は上手くいっているという支援者側の視点のみ、また、活動の成果というプラス面しか時間の制限上知ることができなかった。支援される側であるコミュニティの人々は実際どう感じているのか、今回の訪問で見ることのできなかった支援される側の視点からみた、BELUN を含む NGO の活動についての調査、分析を今後の課題として挙げたい。

(文責：武田 真佑子)

## ○コモロ村役場訪問

訪問日時：2月20日 10:00～12:00

面談者：OPAC 樋口洋平さん コモロ村村長、ファシオさん

### 1. 内容

最初に、コモロ村で取り組んでいるタイス作りの見学をした。コモロ村では四つのグループをつくってタイスを織っている。はじめ OPAC で研修を受けたのは 20 人程度いたが、今は 10 数名で織っている。1 日のスケジュールは、基本的にタイスを織る時間は 2 時間で、あとはマーケットで売っている。タイスを買うのは外国人、留学する学生がお土産として、現地の公務員の人などだそうだ。また、東ティモールにおいて、冠婚葬祭でタイスを身につける習慣があり、そのためにも買われる。私たちが見学した際は、女性が一人でタイスを織っていた。村長がピアスを無料でお土産としてくれた。タイスの糸は太く、色は鮮やかで、自然の色が濃い東ティモールの土地の中でよく映える。

次に、役場の建物の中に移動し、村長と樋口さんからお話を聞いた。役場は二階建ての洋風な建物で、すこし年期が入っていた。まるで教会の中のような、木のベンチが縦に並んでいる二階の奥の部屋に通された。窓が大きく日当たりが良い。最初に OPAC の樋口さんが団体の概要を説明した。OPAC は主にコモロ村で三つの活動を行っている。一つ目は紛争予防局と協力しての、コモロ村の村おこしだ。四つのプロポーザル（パン、クリピック、サブロン、タイス）がある。このうちタイス以外の 3 つが予算をかくとくしている。これらは紛争予防のため青年の職をふやすのが目的である。2 つ目は紛争分析（人材育成）、3 つ目は紛争予防のためのネットワークづくりである。だが、現在、このプロジェクトの中でどれくらいの若者が職に就けているのかは分からない。樋口さんのお話について、次に、村長からのお話があった。まず、村長はティモールで何かを学び、それを日本に帰った後も生かして欲しいと話した。次に、彼自身のことについて話し始めた。村長は選挙によって選ばれたそうだ。もとはメルパチ航空の職員で、月に 650 ドルの給料をもらっていたそうだ。だが、村長になった当時は月に 15 ドルの給料となった。彼が村長になったころ、ティモールは独立してまもなく、人々の生活水準は悪かったため、貢献したいと思ったそうだ。戦時中は 12 年間刑務所に拘留されていたそうで、腕にはそのタトゥーが入っていた。95 年から 99 年は医療関係の仕事をしていたそうだ。村長からは、自国の発展だけでなく、他国の発展も考えてほしいという言葉ももらった。

最後に、コミュニティラジオに関して OPAC の職員であるファシオさんから話を伺った。今まで 7 つのバイオ（地区）ごとにニーズ調査を行い、現在は終わってプレゼンテーションのためのパワーポイントの講習を地元 NGO から受けている。2 月 28 日には沖縄の読谷村の FM よみたんの社長からラジオ製作の経験を共有してもらいたい。3 月 2 日にはニーズ調査をもとにしたワークショップを開き、31 のアルデーアの長を呼んで発表する。このコ

コミュニティラジオの製作には村長も協力してくれている。東ティモールでの最も有力なメディアはテレビであるが、ラジオの利用率も高い。若者はよく SNS のような形でラジオを利用する。コミュニティラジオの特徴はつくるだけでなくプロセスを重視しているところにある。現在はチームビルディングの段階にあり、若者のコモロ村への所属感、アイデンティティを強めることが狙いである。コミュニティラジオの製作メンバーは村議会 31 人によって 3 人選んでもらうところから始まった。50 人のメンバーが集まったが、現在は 20 人ぐらいしか残っていない。男性、女性、学生、高校生など老若男女問わずメンバーである。今後はコアメンバーに加えてボランティアレポーターを増やし、多くの人を巻き込んでいきたいと話していた。

## 2. 所感

主にコミュニティラジオについての所感を述べたい。村長の権限が強く、必ず村長を通さないといけないような縦社会の文化を感じた。よくも悪くも行政が近い文化である。また、コミュニティラジオのメンバーが 50 人から現在は 20 人まで減ってしまっており、ターゲットである「やりがいをもっていない若者」はすでに抜け落ちてしまっているのではないかと感じた。価値観の違う様々な人を巻き込む、というコミュニティ開発の難しさを感じた。コモロ村の人たちからの目線から、このコミュニティラジオの取り組みに関してどう感じているのかということも聞いてみたいと思った。

(文責：船渡 恵)



## ○コモロ村 聖ペトロ中学校・高等学校

訪問日時：2月20日 10:00～12:00

面談者：校長先生、生徒

### 1. 内容

校長先生と生徒たちから学校の中を周りながらそれぞれが興味のあることについて色々な質問をする形であった。高校生は中学から英語を学んでいるため基本的に英語で話をすることができた。一通り見学させてもらったあと、お礼として「ふるさと」と「幸せなら手をたたこう」を歌った。(写真1)

聖ペトロ中学校・高等学校は全校で1000人弱、午前(7:30～13:15)が高校生で午後(13:50～)が中学生の授業となっている。お昼ごはんは学校の売店で購入、または家に帰って食べるので給食はない。私立の学校であるが、サレジオ会の学校であるため学費は1ヶ月8ドルと私立の学校にしては比較的安いほうだ。中学入試ではポルトガル語・数学・体育・社会の4科目があり、高校入



写真1

試ではその他に英語・宗教が加わる。教科書は基本的にポルトガル語で、授業は数学・ポルトガル語・英語・宗教・政経・体育・科学が行われている。英語が授業で行われていることはこの学校の特色と言える。先生は5～6人で、1クラス42～45人程度であった。

施設は図書室・音楽室・パソコン室・売店など比較的揃っているなという印象を受けた。



写真2



写真3

パソコン室(写真2)には他の教室にはない冷房も設置されており、またパソコンの数も1クラスの人数分あるということだった。パソコン室と比べると、図書室(写真3)は本の数が少ない印象であった。図書室は勉強をしたり、何人かで集まって作業をしたりするところとして使われているようだ。

私たちが訪問した時にはジャーナルコンペティション(写真4)が行われていた。英語の

記事・ポルトガル語の記事と言語も複数使われており、その内容も様々であった。また庭のガーデニングもコンペティションで作ったもので、その日の午後には音楽のコンペティションが行われると聞いた。このようにコンペティションが数多く行われており、種類としては絵画・ガーデニング・ダンス・サッカー・バスケットボール・



ジャーナル・音楽の7つが挙げられていた。写真 4

学業については厳しい学校で高校生では一

定以上の成績を取ることができなければ退学しなければならないと校長先生が話していた。

将来になりたいものは医者・科学者などで、ほとんどの生徒が高校卒業後はUNTLや海外の大学への進学を考えている。外務省の絆プロジェクトで日本に来た生徒も複数いた。また海外の大学を希望する理由として、東ティモールではテトゥン語・ポルトガル語に加え、英語・インドネシア語と言語が複数あり大学でもそれらを使用しなければならないのにたいして、海外の大学へ行けば現在学んでいる英語などより少ない言語で多くのことを学ぶことができる点をあげる生徒もいた。

校長先生と生徒の距離がとても近く、上昇志向・海外を意識しているなど校長先生の影響が生徒に強く表れていた。

## 2. 所感

とてもきれいで、学業にしっかりと取り組む学校だったが、やはり場所と先生の制約もあり午前・午後の2部制であった。ほとんどの生徒と英語で会話することができたためコミュニケーションは取りやすく多くのことを聞くことができた。フィールドワークを一緒にしたUNTLの学生の1人がこの学校の卒業生でやはり英語が得意だった。ただポルトガル語については読めるけれど意味を理解するのが難しいと話していた。海外の大学を考える理由としてもティモールで使用する言語の多さが挙げられていたが、言語は東ティモールの教育において一つの課題であろう。また学校で生徒たちに兄弟の数を聞いてみても少なくとも5人兄弟で7・8人兄弟が普通であった。若い世代の人口のたいへん多い東ティモールにおいてこれからも学校はとても重要なものだろう。今回訪れた学校ではコンペティションの数が多く、成績も厳しいなど競争を意識させる教育が行われていると感じた。これは日本の学校とは少し異なるものだった。何が学校に求められるのかでこうした違いが出てくるのだろう。

学校という教育機関がどのようにすればより良い機関として社会の中で成り立つことができるのかこれからも考えていきたい。

(文責：柳下 明莉)

## ○Ba Futuru

訪問日時：2月20日 15:00～17:00

面談者：Mr. Joao Bano Suni (Peace Center Coordinator and English teacher)

矢加部咲さん (青年海外協力隊)

### 1. 内容

ディリ市内のコモロ村で活動しているローカル NGO Ba Futuru に訪問した。Ba Futuru は 2004 年、東ティモールにおける不信や暴力を解決するために、アメリカ出身の Sierra James さんが自分の研究内容を活用し東ティモール人スタッフと共に立ち上げた団体だ。学術的なベースメントを東ティモールに合わせて活動内容を工夫し、そこから活動を広げていったそうだ。Ba Futuru とはテトゥン語で、“未来のために” という意味である。

Ba Futuru に到着し、団体についての説明を主に矢加部さんから伺った。Ba Futuru は 40 名の外部からのスタッフと、各コミュニティにボランティアスタッフで成り立っている。そのスタッフの配置については、コミュニティに住む住人自身が面接等で判断しており、アウトリーチをかけてプロジェクトに適した人材を見つけているそうだ。活動内容としては、各プロジェクトのファンドを探し、決まり次第その都度決まった期間の中で様々なプロジェクトを開始している。プロジェクトの例としては、教師のトレーニングや school management、アート、英語、パソコン、写真、演劇、日本語、メディア等が挙げられる。現在では 3 ヶ月ほどの期間で 25 ものトレーニングを行っており、生徒は様々なアクティビティを経験できる。

何故 Ba Futuru がこのような活動を始めたかという、元々は東ティモールにおける peace building のために始めたそうだ。東ティモールでは雇用の絶対数の不足が大きな問題となっており、また、すべての人が十分に教育を受けられる訳ではない。そのため、未来に希望を持たず将来のビジョンが持てない時間を持て余す若者が多く存在する。そのような人たちは不満の捌け口がなくフラストレーションが溜まり、何かをきっかけに暴力に走ることがある。2006 年の紛争もそれが一部の原因でもあると言われている。そのため、若者が様々なトレーニングを通して未来に希望が持てるように、自分の気持ちを自分の作品やものを通して表現をすることが出来るように、様々なトレーニングを始めたのである。

現在行われているトレーニングは、アート、ドラマ、日本語、英語の 4 つのクラスがある。このクラスは青年のためのものだが、青年と一概に言っても、東ティモールでは金銭的問題などで青年期に勉強を一度止め、それから仕事をしてお金が貯まったらまた勉強を再度始めるという人が多くおり、クラスに参加する生徒の年齢層は幅広い。30 歳あたりの人が最高齢だそうだが、過去には 43 歳で授業を受けに来た人もいたそうだ。また、英語のクラスでは英語とともに平和構築についても授業に組み込まれている。このトレーニングには、何故諍いや紛争が起きてしまうのか、それらをどのように解決していくのか等、考

え方を構築するトレーニングを行なっている。教科書は Ba Futuru が発行し、テトゥン語で書かれているようだ。

Ba Futuru は、このようなトレーニングを行い卒業した生徒がスタッフになることが多い。トレーニングをされる側からする側へなっていくのである。このことから、Ba Futuru での学習が彼らにとって実りのあるものになっていることが分かる。

このように、Ba Futuru が多くのトレーニングを開講していることには理由がある。それは、集客力である。例えば、英語のクラスだけがあっても人は興味を示さない。一般的に勉強し習得することが難しいイメージのある分野のクラスだけでは生徒が集まらないので、芸術など親しみを持ちやすいものもクラスとして開講することで、人を惹きつけるような運営をしているようだ。

また、Ba Futuru はローカル NGO ではあるが、政府や他 NGO 等様々な機関との強い繋がりを持っている。以前は大統領府からの、主に金銭的なサポートを受けていたようだ。政府との関係が比較的強い NGO なのである。しかし、享受するだけではなく Ba Futuru も政府からのサポートに答えるべく、警察官へのトレーニングを行なっている。そのトレーニング内容は平和構築に関連する分野で、喧嘩が勃発した場合の仲裁や交渉の手段を主に教えている。力で抑えこむことのない交渉術を身につけるために、何か諍いがあった時には武器を持ってくるのではなく話し合うことから始めよう、といったような、本当に基本的な考え方から学習を始めるようだ。

以上のようなお話を伺った後、Ba Futuru の施設内を案内していただいた。図書室やアートクラスの作業室を実際に見て、教育設備についても個々に質問をした。美術の先生に話を聞いたところ、美術をするにも材料が東ティモールでは手に入れるのは難しいので、用事やプライベートで海外に行く時などに買ってくる又は知り合いに買ってきてもらって教材を入手しているということだった。何をやるにしても、まとまった人数がいる規模のクラスを運営するには材料や準備が欠かせない。それを常に意識し、先を見越して活動されている様子が伺えた。

様々な教室を見学した後には、日本語クラスの授業に参加した。流暢な日本語で東ティモールの方が挨拶をしてくださり、「心の友」という東ティモールでは有名な日本の曲を日本語で歌ってくれた。また、クラスの方々との交流の時間もあり、日本語も使ってコミュニケーションを取った。東ティモールでは多言語国家であるため母国語以外を習得することに抵抗が日本人ほどないのだと感じたとともに、積極的に人と関わっていきたいというアクティブさを感じることができた。交流の時間が終わると外に出て皆で輪になって簡単な踊りをした。この時もまた様々な人との交流ができ、現地の人とコミュニケーションを取る機会が持て大変有意義な時間となった。

## 2. 所感

Ba Futuru の活動は幅が広くあらゆる人が関心を持って主体性を兼ね備えた活動だという

印象を持った。東ティモールに来て、様々な NGO や機関を訪れたが、そのような活動内容を聞いていても東ティモールの人は受け身な姿勢が目立つと個人的に感じていたのだが、Ba Futuru ではその活動自体が魅力的に作られていて、生徒自身が主体性を持てる活動内容になっており、尚且指導する側の人自身もとても楽しんでいるようだったので、これが相乗効果となり生徒のやる気や主体性を高められる要因になっているのではないかと感じた。

また、Ba Futuru のお話を伺う中で強く心に残っている活動がある。それは、以前、過去にコミュニティの紛争に関わった人やその紛争の影響を受けた若者、つまり、精神的不安定になりがちでコンフリクトの担い手となる可能性の高いリスクの高い子どもたちを対象にしたプロジェクトだ。普段の Ba Futuru のクラスは、自ら学びたいという意志を持っている子ばかりだが、このトレーニングではそういった子どもたちが対象ではない。リスクの高い子どもたちは過去ほとんど勉強というものを経験しておらず、仕事もなく勉強もできる環境にない中で、今更どうしたらいいのか分からなくて路頭に迷っているのである。そのような状況下では精神状態も落ち着かず、さらに自分の将来や夢を描くことも難しい。しかし、そのような子たちでも、このトレーニングを終えた後は、半数近くが就職することができたそうだ。教育というひとつのアクティビティによって、精神的支柱を見つけ、社会へのコミットを成し遂げたのである。私は、このプロジェクトのお話から、いつも NGO の活動に自ら参加するような子のみを対象者と認識しては、平和構築という真の目的を達成することは出来ないのだと感じた。自己満足に陥ってしまわないように、大きな目標を持っていたとしても、そこに至るまでのプロセス一つひとつを、そして一人ひとりをきちんと継続的に観察して、実践を積み重ねていくべきだと感じた。時折 NGO の活動に参加させてもらう立場として、この気付きは自分の行動を見つめ直すきっかけとなったし、今後の自分のアクションに対する評価のひとつとしてこの気づきを大切にしたいと思う。



(文責：鈴木 実穂)



## ○UNTL 学生とのフィールドワーク（トイレ・衛生チーム）

日時：2月21日 9:00～13:00

調査地：ディリの国立病院、薬局、東ティモール国立大学

チームメンバー：[お茶大] 植村奏水、丸山葉

[UNTL] Ms. Lia、Ms. Anna

### 1. 内容

地域医療の様子を調査するため、まず初めにディリの国立病院を視察した。この病院はインドネシア占領下の2002年に建てられ、2008年にEUと世界銀行によって建て直された。診察は無料だが、薬は患者が自分で購入する仕組みだ。ディリには私立診療所もあるが高つくのであまり行くことはなく、体調が悪いときはふつう公立診療所で診てもらおうという。

入口付近に救急処置室があり、その脇の門を入れば渡り廊下を通じて手術室や産婦人科、VIP病棟などそれぞれの棟へ行くことができる。芝生の生えた広い敷地内は明るくて開放感があり、業者によって清潔に清掃されている。ちなみに院内は男女別に分かれている。またカルテもあり、最新の医療設備を導入している。病院の運営資金は国家財政から出ている。キューバと医療協定を結んでいるため、キューバから医師が東ティモールの医師たちを研修しにきていた。国立病院とは別にそのすぐ近くにニュージーランドが建てた眼科の公立病院もあり、国立病院の役割を補完していた。

次に薬局にも向かった。そこでは2人の若い女性が販売を行っていた。そのうち1人は20歳くらいで、彼女はインドネシアの高校で3年間薬学を学んできたというが、薬剤師免許などは持っていなかった。店内は広いとはいえないが、様々な種類が棚や壁に陳列されていた。物資はインドネシアからの仕入れが多いが、中にはHisamitsuのByeBye-FEVERなど日本製品も売られていた。SALONPASは一箱で1ドル5セント、CITIZENの電子体温計は一つ60ドルであった。また、店には注射器や消毒用アルコール、医療用手袋なども置いてあったが、これは近所の医師や孤児院のスタッフが買いにくるのだという。

続いて、医療に携わる人材について学生から話を聞いた。かつて、6年制の医療学校に入るためには高校で生物、英語、化学、物理、数学、ポルトガル語の科目の成績の他、面接とメディカルチェックを要したが、2010年からはこの基準が緩和された。医学生はテトゥン語、英語、ポルトガル語はもちろんのこと、キューバ人と一緒に受講する授業のためにスペイン語も学ばねばならない人もいるという。

最後に東ティモールにおける衛生教育についてだが、公立の小学校・中学校・高校では保健を学ぶとのことだ。現在ディリではトイレの使い方、手の洗い方、歯磨きの仕方を教えられていない公立小学校もあるが、衛生知識を家庭内で伝えあったり、テレビドラマでトイレの使い方を学んだりしているそうだ。

## 2. 所感

医療体制にも東ティモールの悠長な国民性が表れているようだった。たとえば、国立病院は運営資金を国が賄っているが、医療保険制度などは導入されていない。国家も国民も財源とそれを支えるオイルマネーが有限であることをもっと憂慮すべきではないかと疑問を抱いた。さもなくば、いつか病院も破綻してしまうだろうし、もしそうなればせっかく育成してきた優秀な医師たちも私立病院へ流出してしまっ国民の健康を守るという第一の使命を果たせなくなるかもしれない。したがって、医療の質や量を向上させるだけでなく、戦略的に運営を行っていくスキルも不可欠であると考えた。

(文責：丸山 栞)



(左：薬局の中で2人が店番をしている様子、右：平屋建てできれいな国立病院の外観)

## ○UNTL 学生とのフィールドワーク（食・栄養チーム）

日時：2月21日 9:00～13:00

調査地：ディリ市内、Prof. Antero 邸

チームメンバー：[お茶大] 船渡恵、池田亜柊、榎本絢夏、上田由理佳

[UNTL] Ms. Miki、Ms. Eka

### 1. 内容

このフィールドワークでは、東ティモールに暮らす一般の人々の食生活について調査すべく、協力者である2名の学生が普段から利用している市場やスーパーマーケット、および地元民向けのレストランを訪問した。また、学生に依頼して、家庭でいつも食べられているような食事を作ってもらい、一緒に昼食をとるという経験もした。

<ローカルマーケット HALI-LARAN>

大学で簡単に打合せを行った後、はじめに向かったのは、地元民が多く利用するという市場 HALI-LARAN だ。ここは地面が整備されておらず土のまま、雨上がりのため所々に水たまりができていた。マーケットに入って最初に目にしたのは、露店に並べられた生肉の塊であった。暑い気温の中、包装や温度管理も全くなされずに置かれた肉からは腐敗臭が漂い、たくさんのハエが集っていた。量り売りをし、生肉を黒いビニール袋に直に入れて売られるようだ(写真1/左に、臓器のようなものも見える)。魚に関しては、生魚は見当たらず、干して貯蔵性を高められたものが売られていた。

青果も多く扱われており、野菜ではトマトやナス、ニンジン、キャベツ、その他葉菜類などが見られた。キャベツは安価で、一般家庭でもポピュラーな野菜なのだという。カボチャも多く見られた。学生曰く、ティモールでは我々が俗にいうカボチャが「ティモールのカボチャ」、全く別の野菜が「日本のカボチャ」と言われているそうで、面白かった。果物ではバナナやアボカドの他、日本ではあまり見かけないような、いわゆるトロピカルフルーツが様々扱われていた。

米の種類には、白米の他、赤米もあった。東ティモールでは継続的で安定した米の生産が難しいために、国産の米は高価で、インドネシアやベトナムからの輸入米が多く出回っているのだという。とくにベトナム産の米は安価だそうだ。豆の種類も多く、意外にも豆腐がたくさ



写真1:市場で売られる生肉



写真2:露店に並ぶ米・豆・トウモロコシ



ん売られていた。コーヒー豆も、焙煎前の白いものから、焙煎後のもの、挽いた後のものまで、いろんなかたちで売られていた。米や豆、ここではすべて量り売りであった。トウモロコシも扱われていた（写真2）。

タバコも多く売られていたが、日本でよく見るようなタイプではなく、葉の状態で売られているものがほとんどであった。葉タバコは噛むことで真っ赤に変色し、女性も利用していた。酒も扱われており、大きな容器に詰められたものが売られていた。酒は基本的に高価であり、比較的安価な「ココナッツワイン」が一般によく飲まれるそうだが、ココナッツワインはアルコール度数が高く、危険なのだという。東ティモールには酒やタバコの年齢制限が設けられていないらしく、ジュースのように甘いというパームワインは、幼い子どもでも飲むそうだ。

食料品の他、衣料品や玩具、靴などを扱う露店もいくつかあった。『アンパンマン』という文字が印刷された製品もあり、日本の文化の影響が見られた。

市場の中で、木製の荷車を押して歩く人をちらほら見かけた。この人々は、市場で一度に大量の買い物をする客の購入品を荷車に乗せて運ぶことでお金を得ているようだ。

市場の外では、女性がパンを売っていた。毎朝焼いては売りにきているのだという。東ティモールでは、米やパン、キャッサバ、とうもろこしなど様々なものが主食とされており、一日の中でも朝・昼・晩で異なった主食を食べたりするのだという。この他にも、袋詰めの米を売る人、卵を売り歩く子どもなど、市場の外にもたくさんの商人がいた。

#### <KMANEK SUPERMARKET>

HALI-LARAN を後にし、タクシーでスーパーマーケットへ向かった。市場とは異なり、ここで売られている肉は透明なビニールで包装された状態で冷凍されていた。このような冷凍肉は、家庭では包装されたまま水に浸けて解凍するようだ。冷凍スペースには、他にも魚の練り製品のようなものも置いてあった。

缶詰、スナック菓子、インスタント食品などの加工食品も多く扱われていたが、確認できた限り全ての加工食品が輸入品であった。なかでも、インドネシアや中国からの輸入品が多い印象を受けた。学生が昼食に食べるらしい、“Bakso” と呼ばれる焼そばのインスタント麺（写真3）が売られていた（1食分 0.35\$）。この料理は、インドネシアのものだという。東ティモールで食べた食事の中には、この Bakso とみられるインスタント麺の焼そばがよく見られ、ポピュラーな食事だという印象が残った。



写真3: スーパーマーケットで購入した“Bakso”

店内にはアイスクリームも販売されていた。値段は一つ 0.5\$ で、味はバニラ、チョコ、ドリアンの3種類であった。ドリアンのフレーバーは、日本ではなかなか見かけない。

その他、日用品も多く扱われており、日本からの輸入品もいくつか見られた。

#### <ローカルレストラン>

次に、学生たちがたまに利用するというレストランへ案内してもらった。このレストランでは、自分で選んだ料理をお店の人が一つの大きな丸皿に盛りつけていくスタイルがとられていた。このような形式のレストランは、他のところにも見られた。メニューは、ごはん・野菜の炒め物・肉料理（鶏肉が多い）、魚料理などがあつた。学生曰く、ほとんどのレストランは外国人向けで地元民が利用することはまず無く、彼らは安価なローカルレストランを利用するのだそうだ。基本的にはこのレストランのような選択形式で、値段は2\$に満たない程度。あるレストランでは、おらずに魚料理を選ぶと 1.75\$、鶏肉料理を選ぶと 1.5\$なのだという。肉や魚は高価であり、地元民が頻繁に食べることはないようだ。

#### <ローカルマーケット MANLEUANA>

昼食の前に、もうひとつのローカルマーケットに寄った。ここ MANLEUANA は、HALI-LARAN とは異なり地面がアスファルトに整備され、ゴミも落ちていなかった。学生に尋ねると、ここでは政府が清掃業者を雇って管理を行っているのだという。広大な駐車場の中に組立て式の大きなテントが並び、そこで店が開かれている、といった感じだった。店もそれほど密集しておらず、整備はされているものの、客足が少なく閑散としているのが印象的だった。（平日のお昼時だったためだろうか。）

扱われている商品の割合も HALI-LARAN とは異なり、ここではシンガポールから輸入された衣料品や靴が大量に売られていた。マーケットの奥のほうに食料品の店が並んでおり、ここでこの日の昼食の材料を購入し、マーケットを後にした。

#### <東ティモールの家庭の味>

買い物を済ませ、UNTL アンテロ・ベネディト・ダ・シルバ先生の自宅へ向かった。（アンテロ先生は不在であったが、許可を得た上で、彼の自宅を借りて学生たちに昼食を作ってもらった。）この日の昼食のメニューは、赤米ごはん、空芯菜とパパイヤの葉の炒め物であった。今回協力を得た2名の学生は毎日料理をしているといい、手慣れた様子で調理をしていた。（写真4/ここにはガスが通っていたが、薪で火をおこして調理をする家庭もある。）

30分ほどで調理が終わった。出来上がった料理はそれぞれ大皿に移されて食卓へ運ばれ、そこから各々が自分の皿に取り分けた（写真5）。話に聞いていた通り、主菜に相当するものは無く、主食に野菜、といった食事であった。一人分の量としては、それほど少なくもない。食器は丸皿にスプーン、フォークであり、ナイフが使われることもあるようだ。食事とともに、水も提供された。



写真4:調理の様子

味は非常に食べやすいもので、おいしかった。パパイヤの花と呼ばれる緑色の野菜は苦味を伴ったが、ニンニクとともに油で炒め、塩で調味することで食べやすくなっていた。この日使用した調味料は、塩のみであった。

時間が押していたこともあり、急いで食事を済ませた。すべて食べ切ることができず、大皿に余ったものは再び鍋の中へ戻されていた。食器は洗剤を使って洗われた後、食器棚にかけられた。

再び大学へ戻り、フィールドワークが終了した。

## 2. 所感

東ティモールの人々の一般的な食事内容について知り、ここの人々は一般的に貧しい、という印象を受けた。私自身が、日本において普段から肉・魚などが毎日、毎食でも食卓に並ぶことを当たり前のように思っているために、このように感じたのだろう。栄養学の分野にもまだまだ分かっていないことが多くあり、彼らの食事内容に必ずしも問題があるとは言い切れない。しかし、エルメラの診療所にて、患者の栄養失調の大半がタンパク質不足を原因とするという情報を得ていることもあり、やはりこの国ではタンパク質の摂取量が不足気味なのかもしれないとも考える。結局のところ、私の浅い知識からは何ともいえないのだが、私は、栄養学云々よりも、ティモールの人々の食事に対する満足感が少しでも大きなものになっていくことを望む。というのも、調査に協力してくれた現地の人々が概して「おいしいものをもっと食べたい」と口にしていたからだ。聞き出せたのは、彼らが肉や魚、果物などを欲しているということだった。もちろん、欲望のままにどんな食事も手に入るような状況では、今の日本や欧米諸国のように生活習慣病を発症率も上昇してしまうだろう。どの程度まで、というのは難しいが、東ティモールの人々の食は、もっと豊かになってもよいだろう。

次にこの国を訪れる機会があるとしたら、食の状況が今回とどのように変化しているのかを調べてみたい。もちろん、今回調査できた範囲はごく限られたものであり、東ティモール全体の食状況についてはとても把握できていないが、それでも何らかの変化を感じ取ることにはできるだろう。この国がより良い方向へ発展することを望む。

最後に、今回のフィールドワークに協力し、市内の案内や食事の調理をしてくれた Eka、Miki、昼食の場を提供してくれた UNTL アンテロ先生に、心からの感謝を述べる。



写真 5: 食卓に並んだ昼食

(文責：榎本 絢夏)

## ○UNTL 学生とのフィールドワーク（平和構築チーム）

日時：2月21日9：00～13：00

調査地：ディリ市内- The Timorese Resistance Archive and Museum、Hali-Laran,  
UNTL 大学構内

チームメンバー：[お茶大]武田真佑子、笠智遥、鈴木美穂、齋藤美咲、柳下明莉  
[UNTL] Ms. Arina, Mr. Benrox

### 1. 内容

ディリ市内において、東ティモール国立大学（UNTL）の学生二名とフィールドワークを実施した。フィールドワークの内容として、ディリに新しくできた東ティモールレジスタンスミュージアム（The Timorese Resistance Archive and Museum）への訪問、ハリララン（Hali-Laran）と呼ばれる大きなローカルマーケットの視察、UNTL での平和構築に関するディスカッションを行った。

レジスタンスミュージアムは東ティモールの人々による独立のための闘いの記憶と歴史的遺産を保存し伝えるために作られた。展示はポルトガル語で書かれており、主なものにはテトゥン語、英語の訳がついている。ポルトガル占領時以降、東ティモールの独立までの歴史を、写真や映像などを用いながら詳細に伝えていた。歴史を知るとともに、コニス・サンタナの隠れ家を再現したものを非常に近くで見ることなどを通して、当時の東ティモールで独立のために闘っていた人々がどのような生活をしていたのか、リアリティを伴って垣間見ることができたと思う。最も印象に残ったのは独立のための闘いの中で亡くなった人たちの写真と持ち物の展示であった。一部しか残らなかったのであろう、衣服や写真などはボロボロになっていた。その中にはルリックという、東ティモールの精霊信仰に基づくお守りもあった。これは持ち主を不思議な力で守ると言われており、ルリックのおかげで銃弾が逸れ、命が助かったなど、様々な逸話が残されている。しかし、展示されているルリックの持ち主は助からなかったのだと思うと、複雑な心境にさせられた。

ローカルマーケットには、東ティモールの人々が普段どういった場所で食材を手に入れているのか確かめるために訪れた。生肉がハエのたかった状態で放置されているなど、衛生状態があまり良くないことが気になった。また、確認したわけではないため断言はできないが、商売をしているわけでもなく、買い物に来ているわけでもないような若い人たちが集まっているのも印象に残っている。若者たちが日中いたる所に集まっているのは、雇用の少なさが問題になっている東ティモールではよく見る光景である。今回目にした光景も、東ティモールの抱える雇用という問題を感じさせた。

UNTL の学生とのディスカッションは、時間の関係上あまり深めることができなかったが、大学生という、東ティモールではエリートにあたる人と率直に意見を交換できたことは有意義であったと思う。闘いの長く続いた東ティモールでは、平和がどういうものなのか、

また、どうやって平和を作っていくのか知らない人が多い。また、東ティモールという国の抱える問題を認識している人は少数である、という UNTL の学生からの指摘にハッとさせられた。東ティモールの抱えるたくさん問題のなかでも最も深刻なのは雇用である、と強調する場面が多かった。雇用に関しては、UNTL の学生たち不安に思っており、この国ではエリートとされる彼らでさえそうなのだから、大多数の高等教育を受けていない人たちの不安や不満は想像に難くないだろう。雇用への不安という点では、現在の日本と通じるものがあると感じた。

## 2. 所感

ミュージアムは独立まで東ティモールの歩んできた歴史を保ち伝えることを目的としていた。記憶の風化を防ぐためのミュージアムは重要である。今回訪問する中では私たち以外に欧米の人が二、三人ただけで東ティモールの人の姿は見かけなかった。独立のための闘いを経験している今の東ティモールの人々は、三十代以下の若者が人口の五割を占めている。例えば日本で、戦争を経験した世代が減るにしたがい戦争の記憶を伝えることが困難になってきているように、歴史の風化は今後東ティモールの直面する課題であると考えられる。歴史の伝達が直接それを経験した人々によって可能な今だからこそ、このようなミュージアムがこれからも充実していくことを期待したい。

様々な立場の人が認め合える、東ティモールの目指すべき「平和」とは何なのだろう。平和構築に関するフィールドワークを行ううちに、根本的な課題を見落としていたことに気が付いた。おそらく共通する「平和」を考えるのは容易ではないが、少なくとも、現在目の前にある課題を解決していくことで、争いのない社会を目指すことは可能ではないだろうか。現在の東ティモールにはたくさんの課題があり、その中の一つが雇用である。雇用問題へのアプローチは急務であるが、産業のない東ティモールで雇用を生み出すのは非常に難しい。しかし、コーヒーや観光、タイスなど、小さな糸口は見えている。NGO や政府、学生、地域コミュニティなど、様々なアクターが連携して雇用のない現状を打開する方法を編み出していくことが今後最も解決すべき課題であると思う。

(文責：武田 真佑子)

## ○ UNICEF 東ティモール事務所

訪問日時：2月21日 14:00～15:40

面談者：松岡 幸子さん

場所：UNICEF 東ティモール事務所

### 1. 内容

(1)Health & Nutrition、(2)Basic Education、(3)WASH program、(4)Child Protection、(5) Adolescence Young Participation の主活動のうち、今回は(2)(3)(5)の取り組みを伺った。

#### ①若者の社会参加 (Adolescence Young Participation)

国民の約半数が30歳以下の若年層であるため、2012年の大統領選挙と国民議会選挙でも有権者の20%が若者であり、16-21歳の140,000人にとっては初めての投票となった。しかしながら、不十分な教育や雇用機会の少なさのために就学・就業していない若者も多く、社会の中でしばしば周縁化され、危険要素を孕むと捉えられがちである。

そこで、UNICEFは政治家や政府スタッフとの対談活動を設けたりすることで若者の社会参加の重要性への認識を喚起している。広報では、TV、広告、ミュージッククリップといったマルチメディアを用いたり、学校で教えてさらに口コミで広めたりして、投票の登録方法など情報を発信している。加えて、若者議会や若者監視団についても触れ、目標達成のために記録を逐一取ることによってそれが達成可能かを見極められるとし、モニタリングの重要性も強調した。これにより、16-21歳の選挙の認知度は大統領選第1回投票時の68.8%から決選投票時の93.9%にまで伸びた。一方、22-30歳ではもともと認知度が93.6%だったため0.1%の上昇しか見られなかった。多くの若者は選挙についてテレビやラジオから情報を得ているが、地方では都市よりも入ってくる情報量が少ない。投票率は高いものの、登録方法や過程が分からないという人も依然としているという。

#### ②水・衛生 (Water Sanitation and Hygiene)

水・衛生事業であるWASHでは住民によるトイレ整備や手洗い習慣の励行を目指し、様々なアプローチを取っているが、以下では主に学校のトイレの現状とコミュニティのトイレ作りの動向について触れたい。

まず学校について、全1200校のうちトイレがあるのは65%だが、設備があっても実際には使用されていないトイレも数多く存在する。特別な助けを要する子どもに優しいトイレを持つ学校は22%以下だ。また、55%の学校は水へのアクセスがあるが、38%は日常的にアクセスすることはできない。さらに、トイレの後に手を洗う際に水洗いだけでは不十分であるため石鹸を使う必要があるが、石鹸を常備している学校はまだ少ないという。

次にコミュニティにおけるトイレについて、まず2012年のデータによると、地方部において改善されていない水源を持つのは40%、野外排泄しているのは43%であった。UNICEFは

政府のサポートを得て、2008年からCLTS(Community Led Total Sanitation)を用い、コミュニティレベルで住民が自主的にトイレを作って衛生改善をすることで病気を予防することを試みてきた。CLTSの手法では、子どもから大人まで50人ほどの住民に話し合いに集ってもらい、ファシリテーターと排泄習慣を振り返ることでトイレ作りへの気運を高めるが、この中でUNICEFはトイレの作り方や野外排泄の止め方を指導する。貧しい地域でも現状を変えるために住民たちが互いに野外排泄を止めようと呼びかけ、トイレを作る際にも助け合う動きが見られるという。ただ、トイレの設備は高価で200\$かかることもあるため、安く設置できる便器が選ばれている。UNICEFは、トイレを作ることが終着点でなく、設備をずっと使っていくように促すことも大切という認識であった。

### ③教育

学校における言語政策、保健・栄養教育、平和教育の3方面から状況を伺った。

まず言語教育であるが、高等教育を受けた人は例外として、一般の人はポルトガル語を日常生活では使わないが、中学校(小9)まで義務教育でポルトガル語を勉強せねばならない。しかし、当の教師もポルトガル語が分からないので、教員研修の中で勉強している。本来は大卒者のみが教師になれるが、現在は人手不足のためにこの基準を半数の人しか満たしていない。そのため、政府は毎年教師の質の向上のために研修を行って技量を補填している。これまで教師はポルトガル語とテトゥン語の両方を使わざるを得ない状況下にあったが、昨年新政権が幼稚園と小学校低学年で母国語を使う指針を示し、教育省の5ヵ年計画と20年計画にも盛り込まれた。しかし、この国に適した母国語教育はまだ確立されておらず、教育省も方向性を出していないため、政府の方針・政策をサポートすることに徹しているUNICEFは現時点では積極的に母国語教育には関わることができていない。

次に保健・栄養教育であるが、小1～小6を対象に保健体育の中で学校保健と栄養の指導を行っている。2011年政府はWFPから給食制度を受け継ぎ、児童1人当たり15セント/日を支給された公立小中学校が母親たちやコックに依頼して地域で買った食材を使い、食事を作っている。体と脳の発達の観点からも幼い頃に十分な栄養を摂取することが大切であり、給食のお陰で就学率や成績が向上する効果も期待されている。

そして平和教育については、Life Skill というものがあり、コンフリクトを暴力ではなく話し合いで解決するように説いている。しかし学校は授業できちきちな2部制なので、時間・人材・金銭面で余裕がなく、教科化が難しいのが実状である。したがって、社会科など他の正規の授業の中に平和構築の概念を織り交ぜることが重要且つ現実的と見込まれる。

## 2. 所感

活動があくまで政府の方針に沿ったものに限られることに少々驚いたが、そういった制約のある中でいかに効果的な対策ができるか試されているとも感じた。衛生分野におけるCLTSのようにコミュニティに働きかける動きもあるが必ずしもうまくいっていない。した

がって、UNICEF は大きな機関であることを活かし、メディアを通じたトップダウン的な啓蒙にさらに重点を置くべきではないかと考えた。

(文責：丸山 栞)



## ○NGO FUNDEF (Foin Sae Unidade Dezenvolve Futuru)

訪問日時：2月21日 17:00～18:00

面談者：Mr. Carlos Moniz Goncalves、Mr. Ferris(通訳兼 FUNDEF メンバー)

場所：ディリ市内、FUNDEF 事務所

### 1. 内容

#### i) FUNDEF の問題意識

現在、東ティモール国内では失業率が 40～50%と推測され、若者の雇用の問題が深刻である。また、女性の地位が低く、DV や近親相姦などの性的暴力に対して、主な被害者である女性が主張することが難しい現状がある。FUNDEF は雇用につながる capacity building や性的暴力を未然に防ぐネットワークづくりによって、こうした問題の改善に取り組んでいる。

#### ii) 当団体の概要説明

ボランティアの運営メンバー、男性 5 人と女性 4 人からなる FUNDEF は、東ティモール人主体の NGO であり、Caritas (カトリックの援助・福祉活動を行う国際 NGO) や GIZ (ドイツ国際協力公社) などの外部支援を受けながら、Ermera 県 Railaco 郡、Liquica 県 Bazartete 郡の地域を中心に、性的暴力の防止トレーニングや、性的暴力防止のネットワーク強化を行っている。また、DV などの性的暴力に対して女性が“NO!”と主張できるようなミーティングを設定したり、他のローカル NGO やコミュニティ長などと連携したりしている。他にも、capacity building と就職支援の一環として、コンピューター・スキルの向上、英語学習、リテラシー教育といったトレーニングを無料で市民に提供している。一つのプロジェクトは、基本的に 8 か月間の実施期間を設け、3 か月ごとに報告する方式をとっている。

#### iii) インタビュー (Q&A)

具体的に、DV などの性的暴力に対して、地域のコミュニティ内でどのような防止策を立てているか、未然に防止する取り組みはどのくらい浸透しているのか、参加する男女の比率などについて、質問が多数出た。しかし、質問者と回答者の間でうまく意思の疎通ができず、明確な回答を得ることは難しかったが、FUNDEF の理念などはよく伝わってきた。

### 2. 所感

事前の勉強会でも、東ティモールにおける若者の失業と DV や児童虐待といった暴力の問題について考えることが多く、実際にこうした問題に取り組む national NGO への訪問は大変貴重であった。FUNDEF スタッフの皆さんは、ボランタリーに集まり、その理念に共感するファンを獲得して、積極的に地域でも活動を展開しており、とても精力的な NGO であると思った。今回は、停電で蒸し暑い部屋の中でのインタビューとなり、FUNDEF の方々も苦労されただろう。私たちの訪問を受け入れ、そのような環境の中でこれからの東ティモ

ールについて熱く語ってくださったスタッフの皆さんに心から感謝し、これからも東ティモールだけでなく、日本においても問題意識を持ちたいと思った。

(文責：笠 智遥)

## ○ピースウィンズジャパン東ティモールオフィスへの訪問

訪問日時： 2月21日

面談者：ピースウィンズジャパン 永井さん

場所：ピースウィンズジャパン東ティモールオフィス（ディリ市内）

### 1. 内容

東ティモールのコーヒーは有名であるが、今回は実際にティモールコーヒーの生産に現地スタッフとして携わっている方にお話を伺うことが出来た。

ピースウィンズジャパン（PWJ）は 1999 年に東ティモールでの活動を開始したが、当初は家を建て直すための材木提供などが主な役割だった。2003 年から経済復興のために東ティモールでのコーヒー事業を開始した。石油などの資源収入に頼っている東ティモールだがその枯渇が懸念されており、10 年後 20 年後を見据えた時にティモールの経済を支えられる事業とは何かを考えてコーヒーが選ばれたということである。2009 年までは JICA とともに JICA の支援を受けながら活動を行っていた。レテフォホでは 350 世帯 40 グループと提携しており、2011 年からはリキサ県でも活動を開始した。

元は地元の生産者組合が輸出事業まで携わる形を目指していたが難しいことがわかり、現在は PWJ が豆を組合から買取り、報酬も PWJ から渡るようになってきている。しかし将来的には東ティモールの人々だけでコーヒー事業を継続できることを諦めてはおらず、2010 年にグリサセナという輸出を担う会社を設立した。日本人スタッフと PWJ なしで運営できるようになることが当面の目標である。また最近ではコーヒーの木の老朽化による生産性の低下が問題となってきた。対策としては cut back という木を切る方法と新植が行われている。

PWJ は自らの大きな役目を「僻地（東ティモール）と世界中の消費者を結びつけること」だと捉えており、それは形となって実現してきているように感じる。

### 2. 所感

PWJ さんの理念や活動についてスタッフの方から直接話を聞いたのはよかった。後日、エルメラ県レテフォホ郡の PWJ の契約農家の方にごちそうになったコーヒーはとてもおいしかったので、私も世界中の人に飲んでもらいたいと思う。

（文責：池田 亜柊）

## ○Sub-district Hospital (エルメラ県レテフォホ郡)

訪問日時：2月22日 14:30~16:00

面談者：Sub-district Hospital 助産師

### 1. 内容

レテフォホの Sub-district Hospital は、トタンや木造の家が並ぶレテフォホにおいては一目でそれとわかるコンクリート造りの立派な建物である。ここで働く助産師の女性が施設の案内をし、私たちの質問に答えてくれた。



写真 1 Sub-district Hospital

#### <hospital について>

診療は月曜日から金曜日の8時から17時で、土日は緊急の場合のみ対応を行う。スタッフは5人おり、内訳は女性の医師が1名、男女の看護師が2名ずつとなっている。この医師はキューバでトレーニングを受けた人物で、総合診療医である。患者は1日平均125人ほど来院し、5歳までの子どもと女性の患者が多い。女性の患者が多いのは、栄養指導の教室が開かれていることや、妊娠による受診が多いためである。診察までの待ち時間は1から2時間の場合が多いが、週に2回のマーケットが開かれる日には特にたくさんの患者が訪れる。公立の病院であるため、診療は全て無料で行われる。運営資金はオーストラリア政府の援助を受けている。敷地内には、栄養失調の患者に処方するための、トウモロコシの粉末を貯蓄する倉庫が建てられているが、今までに一度も開けたことがない。

#### <病気について>

受診する患者に最も多い症状は下痢であるが、栄養失調も多く見られる。下痢の患者には経口補水液の元となる粉末が処方される。

#### <医療機器・医薬品について>

医療機器や医薬品は全て政府が支給しており、不足しているものはない。



写真 2 経口補水液の元

#### <栄養指導について>

妊婦を含むすべての女性を対象として教室が開かれている。食物の摂り方や水を煮沸することなどが指導される。

### <妊娠・出産について>

敷地内に妊婦用の病棟が建てられている。出産のための部屋は、内部が4つに分けられており、1番目の小部屋には分娩台が2台置かれている。2番目の小部屋にはワクチンの入った冷蔵庫と水道があり、3番目の小部屋にはベッドと赤ちゃんを温める機器が置かれている。最後の部屋にはワクチンの入った冷蔵庫とベッド、ライトが置かれている。生まれた赤ちゃんに問題が無ければ、生まれてから4~5時間で自宅



写真 3 分娩台

に帰される。この病院で出産した母親が死亡することはほとんどないが、自宅出産で亡くなる母親はいる。

UNICEF の支援によってすべての妊婦に母子手帳（テトゥン語で「お母さんとお父さんのための手帳」と書かれている）が配られているが、母子手帳に示されている体重制限などを守らない母親もいる。また、家が遠いため（連れて来てくれる人がいないために）検診に来なくなる母親もいる。病棟には避妊の方法を示したポスターなども貼られており、出産は2年の間隔をあけるように指導されているが、実際には50%しか守られていない。

### <医療従事者の待遇について>

インタビューに答えてくれた助産師の女性は保健省管轄の公務員のレベル5に相当し、給与は月に510ドルである。彼女のように地方の医療施設で24時間態勢で待機している者も、国立病院でローテーションで働いている医療従事者も一律で同じ給与であり、彼女はこれに対して不公平であると感じている。

## 2. 所感

オーストラリア政府やUNICEFなどの国際機関の援助によって、設備はかなり整っている印象を受けた。最も大きな問題は人材不足であり、1人の総合診療医が対応している状況はかなり無理のあるものだ。これは、患者の待ち時間を見れば明らかである。現在、東ティモールの医療はキューバの医師団によって支えられながら、東ティモール人の医療従事者を育てている段階にあると言える。しかし、今回訪問したような地方の医療機関で従事する人材に対して、現在のような待遇を強い続けるならば、医療従事者の数は増えても地方医療は衰退しかねない。東ティモール全土にわたって、適切な医療、衛生・栄養指導が行われるためには、人材の育成と同時に、地方の医療従事者の待遇を見直す必要があるだろう。

（文責：植村 奏水）

## ○NGO Belun District Coordinator へのインタビュー

訪問日時：2月22日 14：30～16：00

面談者：NGO Belun エルメラ地区のコーディネーター エデウマリアノ 他1名

### 1. 内容

2月19日に訪問したNGO Belunの地区コーディネーターの方から実際の業務や現在の紛争の紛争要因についてお話を伺った。お話を伺った方のうちエデウマリアノさんはこの仕事を2年間やっている方だった。NGO Blunのスタッフの中には識字力のない方もいるが、業務を行っていきなかに業務に必要な力はつけていくことができると話していた。またNGO Belunのスタッフになるには5～6年かかる6段階の訓練があり、それを終わると証明書が渡される。中にはボランティアとして2～3年働いた後にスタッフになる人もいる。

業務内容は主に①起きたコンフリクトを記録・報告・分析すること (monitoring)、②コンフリクトの予防のために住民への働きかけを行うこと (conflict prevention) の2点である。①は次のように行われている。コンフリクトを記録するフォームがあり、そこにコンフリクトの内容を記録する。コンフリクトの情報収集は警察や行政の協力を得て行っている。ただ警察がいつも頼りになるわけではなく、独自の情報収集も行っている。そしてどのような種類のコンフリクトが起きたかやどこの地域で最もコンフリクトが多かったかなどを記録したレポートを毎月出しており、3ヶ月に一度はまとめのレポートも出している。またレポートを通してコンフリクトの要因を特定し、コンフリクトを分析することも行っている。この際には実際にコンフリクトが起きた場所へ行き、関係者と会うことなどを通してコンフリクトの詳細な情報を得る。②については考えや情報を共有するセミナーを開いたり、話を聞いてもらったりする形で行われている。セミナーではDVや土地の境界・所有など様々なコンフリクトを取り上げる。

コンフリクトの要因としては、第一に土地の所有権や境界線が挙げられた。これらは恒常的な問題としてあるそうだ。ただ現在特に問題になっているコンフリクトの要因は黒魔術だと聞いた。「fifty one」と呼ばれる黒魔術によって2012年12月頃から人の死亡が問題になっている。これは特に病気でもなく外傷を負ったわけでもない人が死んでしまうというもので、そうした死亡者が出た際それはfifty oneによるものだと言われている。誰でも夜に墓へ行き祈れば1日に5人を殺すことができるそうだ。またこうしたものはwitch doctorの力が働いているとも言われている。黒魔術がコンフリクトの要因になる理由は黒魔術の存在が人々の間で互いへの不信感を生みやすくし、また増大させることにある。そうした不信感はコンフリクトを誘発するそうだ。そうしたコンフリクトを予防するためにNGO Blunとしては51を信じないように人々を説得したり、コンフリクトが発生した際の仲介者になったりしている。

## 2. 所感

コンフリクトの要因として土地問題は想像できたが、黒魔術という言葉が出てきたことには驚かされた。ディリで NGO Belun の方から聞いた話しで想像した平和構築と、地方で行われている活動を直に結びつけて考えることは多少の困難が伴うように思う。ただ平和構築という抽象的なものを具体的な形にすることはそう簡単なものではないことを考えると、NGO Belun の活動もその一つの形としては様々な可能性を持つ活動であろう。なおこの文章では Conflict をコンフリクトと表記した。紛争と訳すと語弊が生じると考えたためである。各地域で日々発生しているコンフリクトを記録し、その分析を行いかつ予防活動も行っていくのは大変なことだが、こうした一連の活動を続けることでコンフリクトの要因を減らしていくことができるならば良いだろう。ただ黒魔術のような人々が信じていることや普通のこととして受け取っていることのように文化的な側面を持つものを変えることは難しい作業だろう。文化の側面もあるこの問題が今後東ティモールにおいてどのような位置に置かれどのように扱われるのかも興味深い。

(文責：柳下 明莉)

## ○エルメラ県レテフォホ郡 コーヒー農家へのインタビュー

訪問日時：2月22日 15:30～17:00

面談者：PWJのコーヒー生産者組合のサブグループの1つであるレブドゥ・クライクの組合員10名の方々

### 1. 内容

#### <主な仕事内容>

乾季には朝からコーヒー農場に行って2時間かけてコーヒーの実を収穫しに行く。家に戻って夜まで選別を行う。雨季にはコーヒー農場の草刈りなどをする。Peace Winds Japanの方からの説明を補足すると、コーヒー農家の方々はその後、コーヒーの実の果肉除去、発酵、洗浄、乾燥まで行う。6月頃にPWJがコーヒーを買い取って一括払いする。買い取り価格は下の表の通りに年々上昇しており、現在は\$3/kgである。

2003	\$1/kg
2004	\$1.2/kg
2005	\$1.5/kg
2006	\$2/kg
2007	\$3/kg
2007-2008	\$3.25/kg
2008～現在(2013/2月)	<b>\$3/kg</b>

1つのグループは10人で構成され、リーダーを含めみな平等に給料をもらう。一人当たり年間約\$1000で、豊作のときは\$2000近くなることもある。給料に関してはみな満足しているとおっしゃっていた。コーヒーを作る研修についてはリーダーが教えたり、ディリのコーヒー専門学校で学んだりする。組合に参加している人の家族も手伝う。

#### <コーヒー農家の生活>

1日3食食べている。8時頃の朝食にキャッサバとコーヒー、昼食に米と野菜、夕食にトウモロコシと野菜を食べる。肉や魚を食べるかどうか聞くと、収入によるが月に2回程度と言う回答だった。卵はほとんど食わず、牛乳は飲まない。給料に満足していても肉を頻繁に食べられるほどではないのか疑問だったが、「肉は高いからめったに買えないけれど月に2回も食べられるほどの給料をもらっているので満足している。」と言っていた。

収入の主な使い道は子供の学費であるようだった。1家族10人もの子供がいて、そのうち3人はディリの大学に行かせている。専門は教育、物理、経済と言っていた。大学の代わりにコーヒーの専門学校に行かせる場合もあり、いずれにせよ卒業後はコーヒー農場に戻ってくると言っていた。



仕事が大変だと感じるときはいつか、という質問に対して体調を崩したときとっていた。また、人生で最も幸せなときはいつかを聞くと、お金を得たときとっていた。

## 2. 所感

正直コーヒー農家の方達の身だしなみや食事内容から、1人年間\$1000以上の収入を得ているようには見られなかった。しかし、月約\$83で子供が10人もいることを考えると教育に優先的にお金をかけていると考えられる。また、家の大きさや家具が立派だったのでやはり東ティモールの中では裕福であると思われた。コーヒー農家の収入がリーダーも若者も平等であることが印象的であった。一括払いの収入だと一度に使ってしまうのではないかと、コーヒー農家の方の貯金ややりくりについて疑問があった。また、子供を高校や大学に行かせても将来的には農家に戻ってきてもらうことが前提であるように言っていたのが疑問であった。東ティモールでは国立大学を出たエリートでも雇用が無く不安だと言っていたので、コーヒー農家で安定した収入を得てもらう方が親は安心なのかもしれない。また、経営方法などを学んで生産者組合のクオリティを高めることを期待しているのかもしれない。しかし、せっかく教育を受けた子供にコーヒー農場での仕事以外にもいろいろ選択肢を与えても良いのではないかと思った。また、コーヒー農家たちが最も幸せなのはお金を得たときという発言から、コーヒー作りに愛情を持っているのかどうか気になった。一方で、農家の方がたは家族全員コーヒーが大好きでみんな毎日飲んでいるということを笑顔で言っていたので、やはり仕事にやりがいを持っているように感じられた。

(文責：上田 由理佳)

## ○エルメラ県レテフォホ郡の公立小中学校

訪問日時：2月23日 9:00～11:30

面談者：校長先生

### 1. 内容

首都ディリから車で4時間ほどのエルメラ県レテフォホにある小中一貫校。日本政府の支援によって建てられたことに関して、校長先生より感謝の言葉をいただいた。

生徒数は女子333人、男子335人の合計668人。家から学校まで2km歩いて通っている生徒もいるようだ。ポルトガル語、テトゥン語(現地の言語)、数学、理科、社会、美術、宗教(カトリック)の7教科を教えており、成績は5教科、試験によってつけられる。ノートは生徒負担で、教科書は政府から支給される。また、課外授業として、英語と生命科学のコースを行なっているようだ。先生は21人おり、学士や修士を持っている先生もいる一方、大学を出ていない先生は政府による訓練を受けている。先生方はポルトガル語教育を受けていない世代が多いため、レベルは先生によって差があるようだ。授業は1日2～3教科、月曜から金曜までで、時間帯は8時～12時、14時～18時の二部制方式をとっている。中学校への進学率は89%で、具体的には男子58人、女子40人がディリやマリアナなど、様々な場所へ進学したようだ。

発展途上国の学校ではドロップアウトの問題が依然として残っている。その対策として、3日以上学校に来ない生徒が出た場合、NGOのCAREインターナショナルがその生徒の家まで出向き、なぜ学校に来られないかなどを調査し、学校へ戻すという。

給食については現在支給がないため、政府や親の協力のもと、ローカルな食材を学校にある台所(写真1)で料理し、12時から昼食をとる。また、食に関していえば、3ヶ月に一度cooking competitionがあり、地元の食材(キャッサバ、米など)を使って男女とも参加するようだ。栄養についてはNGOのSHAREが教えているという。また、インドネシア占領時代は学校の看護師がいたそうだが、現在衛生の教師はいない。掃除は警備員が行うが、土曜日は生徒みんなで掃除をする。トイレは12基あるが、壊れたトイレもあった。(写真2)



写真1



写真 2

## 2. 所感

エルメラ県は山中にあり、道路は舗装されていないところが多い。また、ちょうど雨期に訪れたため、道の状態は非常に悪かった。そんななか、遠くから歩いて通うのは小学生にとって大変なことであると感じる。

女子生徒の割合は 35%~50%だそうで、男子よりは少し下がるようだ。しかし、男女共同で cooking competition が行われており、性別役割意識を下げることに少しでもつながるのではないかという希望が持てる。

授業ではテトゥン語とポルトガル語で行うが、ポルトガル語は読み書きレベルで実用的ではない。先生と生徒の間ではインドネシア語、テトゥン語、ポルトガル語を使用する。東ティモールでポルトガル語を使うのは公的文書を読むときや、資料を読むときなどに限られる。また、先生の間でもポルトガル語のレベルの差があり、公用語としては難しい。さらに、東ティモールには様々な地区の言語がある。2012年7月までは、テトゥン語かポルトガル語でしか教育してはならなかったが、法律が改正され、母国語による教育が可能になった。地区レベルと国家レベルで、母国語教育が今後いかに進んでいくかが興味深い。

生徒間でケンカが起きたときどうするかという問いに対しては、先生が介入して終わらせるという答えが返ってきた。日本でもそのようなケースは多いが、おとなが直接介入するのではなく、子ども同士で考えながら解決させるような働きかけをするなどの改善の余地があるように感じる。


ところで、校長室には、トロフィーが3つ飾られていた。サッカーやバスケの competition で得たものだという。学校は勉強する場であるだけでなく、このような competition などを通じて、子どもの仕事である「遊び」を広めるための役割を果たしているように思う。

また、NGO との連携によって、学校だけでは手の届かない教育や様々な問題をカバーできるため、今後も連携を続けていくことが教育の質と量の向上につながるだろう。


(文責：齋藤 美咲)

## IV. 資料

2012.12.23  
Timor-Leste Symposium



## How can we improve Waterworks & Sewerage?

Ocha-Timor2012 

## Our motivation

- We were interested in 1000-toilet project
- Water sanitation is essential for everyone

Improve the water environment  
↓  
Improve the health status  
↓  
Contribute to economic development

## First... we are describing Sewerage



## '1000 toilets project'




▶Outline

- UNICEF started this project with nepia, a Japanese company from 2008 in the rural areas.
- They have already built the toilets for 3600 households.

Ref. 「nepia 1000toilets project」<http://1000toilets.com/>

## '1000 toilets project'



▶Problems

- Proper practice of hygiene must prevail among people.
- People who need toilets should acquire toilet making skills.
- UNICEF & nepia cannot offer enough aftercare maintenance. Therefore, some toilets are no longer in use.

Ref. 「nepia 1000toilets project」<http://1000toilets.com/>

## The situation of sanitation

- How many people can use sanitary toilets?
  - the coverage of toilets  
urban: about 60% , rural: about 30%  
(accessed in 2008 by World Health Organization)
- How about others?
  - especially in rural areas,  
voiding outside (near a house or a pigsty)  
→let people's excretions lie  
⇒poor sanitation (bad influences on water supply)

## WaterAid Australia



- In 2011/2012, WaterAid's total program expenditure was about \$1 million
- Aims to achieve the MDG targets.
- Helps the construction and management for sustainable sanitation infrastructure.

Ref. 12/11/2012 "WaterAid Australia" <http://www.wateraid.org/australia/>

## National Progress

- +200,000 persons need to gain access to improved sanitation to achieve the MDGs
- The GoRDTL has increased investment in the water and sanitation sector  
US\$3.5 million (2009) → US\$20 million (2012)
- The GoRDTL is working with development partners to develop national strategic sanitation

Ref. 12/11/2012 "Sanitation and Water for All" <http://www.sanitationandwaterforall.org/>

## The United Nations

- COMPASIS is a three-year project conducted from 2010-2013.
- UNICEF intends to change the community sanitation strategy to be more sustainable.
- The UNICEF WASH component will support 10 water supply systems, 10 school latrine and hygiene facilities, and improved sanitation facilities for 300 families.

Ref. 12/12/2012 "COMPASIS Mid-Term Evaluation" <http://www.unicef.org/>

## Maintenance problems

### ►Problems

- People do not have accurate knowledge  
→ Some people fill toilet pans with stones and leaves
- Only a few homes have their toilets  
→Who takes care of the toilet?  
→How does he take care of the toilet?

## The role of people

- ①Local committee  
→They can diffuse the knowledge of toilets.
- ②The owners of their toilets  
→They can be group leaders in their villages.  
→All the villagers who use the toilets should maintain them.

## SUSTAINABLE USE



## ACTIVITIES for SUSTAINABLE USE

### Corporation ~ CSR activities

"POOP CLASS" for children

by Oji Nepia (with Japan Toilet Association)

Local NGO ~ CLTS Approach  
Sanitation & hygiene education



Teaching how to make toilet bowls  
& soap for hand-washing



## However...

- CLTS approach does not lead to sustainable use of toilets in long term.  
—Why?
- 
- The conscious of inhabitants and the perspective of supporters do not link well
  - Thus,  
we want to see the gap between them in Timor

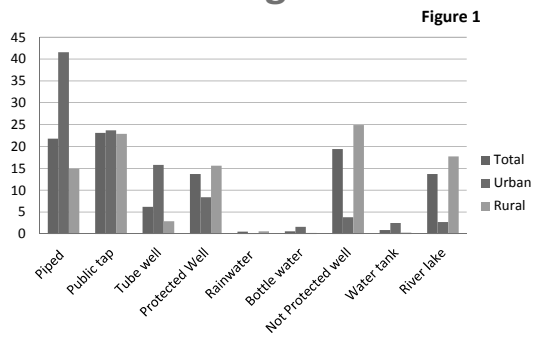
Next...  
we are describing  
Waterworks



## Drinking water & supply

- Access to an improved drinking source  
2001 : 48% → 2010 : 66% (Rural 57%)
- Main source of drinking water  
Urban : household taps 42%  
Rural : a well or spring 25%

## Main source of drinking water



## Problems

- Time of accessing to water
- Sustaining projects
- The close connection between water supply and human contamination  
→ higher rates of childhood mortality and morbidity in rural areas

## Waterworks in Dili

- Situations
  - The waterworks has already built (This was built by the support of JICA)
  - The water supply is often cut off

## Problems in Dili

- The waterworks is not maintained well.  
→ A leak of water and water pollution happens
- An illegal act (cutting water pipes) is occurred.  
→ People in suburbs can use the water of waterworks.

## Waterworks in Rural areas

- National guidelines : challenging
  - 30~60 L per person per day
  - water points within 100M

## Making Water User Group

- DNSAS (National Directorate of Water and Sanitation Services) recommendation
- For Repairs
  - collect user fees for maintenance
  - ensure equitable Access to services

## Problem 1

- Not successful
  - community-management
  - functioning systems  
→ inadequate maintenance
- Policies
  - missing
  - remain in draft form only

## Problem 2

- External support
  - government / local private enterprise
- Relation between sectors
  - regular sector coordination meetings
  - lack of communication

## What can we do as a Japanese student?



- Keep studying about Timor
- Inform Japanese people about Timor
- Hold meetings with other universities to share the information
- Purchase the products of the companies that support the improvement of the hygiene in Timor
- Monitor CSR activities
- Donate to reliable local/international NGO

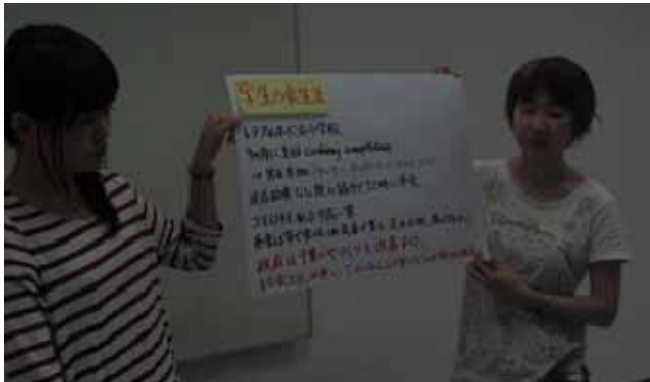
## References

- Figure1 is from Census 2011
- [http://www.tls.searo.who.int/LinkFiles/Home\\_NATIONAL\\_STRATEGIC\\_DEVELOPMENT\\_PLAN\\_2011-2030.pdf](http://www.tls.searo.who.int/LinkFiles/Home_NATIONAL_STRATEGIC_DEVELOPMENT_PLAN_2011-2030.pdf)
- [http://www.wateraid.org/documents/plugin\\_documents/timor\\_leste.pdf](http://www.wateraid.org/documents/plugin_documents/timor_leste.pdf)



Thank you for listening!!



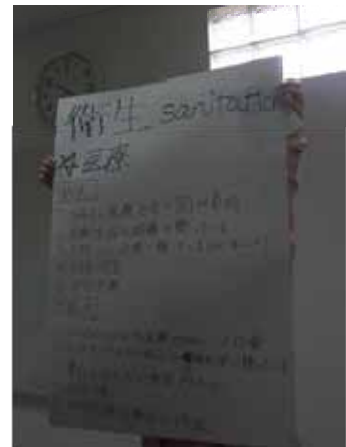
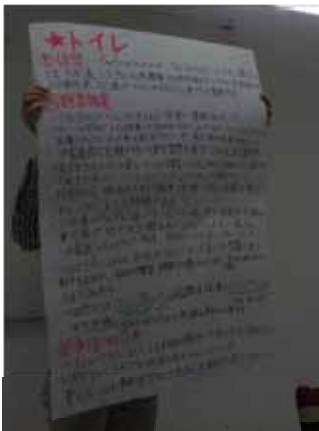


## アクションプラン発表会

2013年2月24日

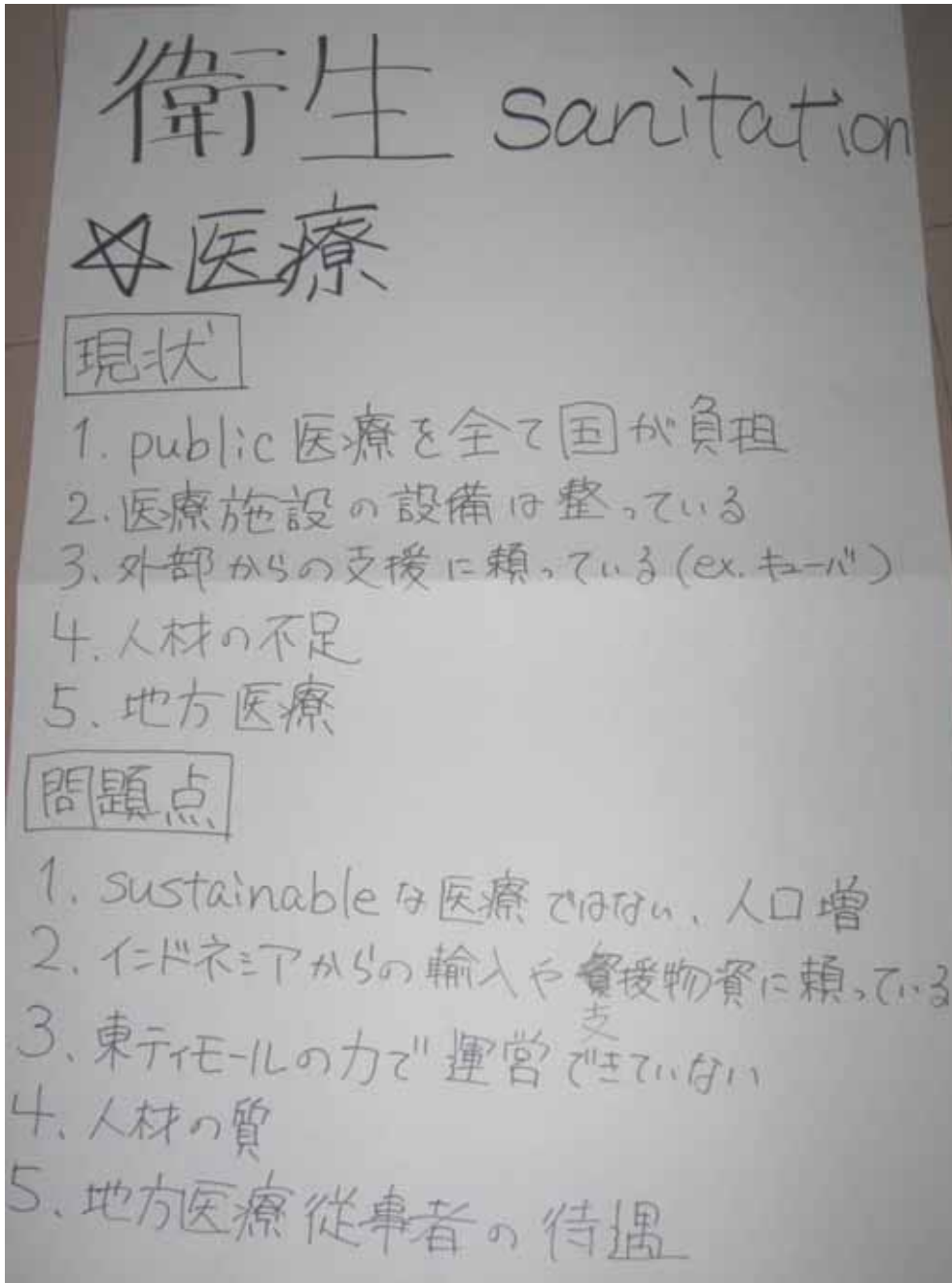
@Hotel Audian Conference Room

- トイレ・衛生グループ
- 食・栄養グループ
- 平和構築グループ



事前勉強会、公開講演会、大学間連携イベントを経て、現地調査を実施した。スタディツアー最終日に、5日間の調査を踏まえ、グループ別アクションプランの発表会を行った。本フィールドワークで得た気づきを、今後の研究や日常生活にも応用して欲しいとのコメントが桑名講師よりあり、ツアーを締めくくった。





## 解決策

- 税収の確保
- 患者に医療費の一部を負担させる  
→ いずれにせよ産業と雇用が必要!!
- 家族計画の推進
- 地方手当て、地方に人材をまわす
- 伝統医療とのコラボレーション

## 私にできること

- 途上国の医療について学ぶ
  - ・ 企業の果たす役割
  - ・ 伝統医療と西洋医学
- 東ティモール製品を買う
- 東ティモールの友人たちと keep in touch
- 医療従事者の training (企業として)

トイレ・衛生グループ 植村 奏水

# ★トイレ

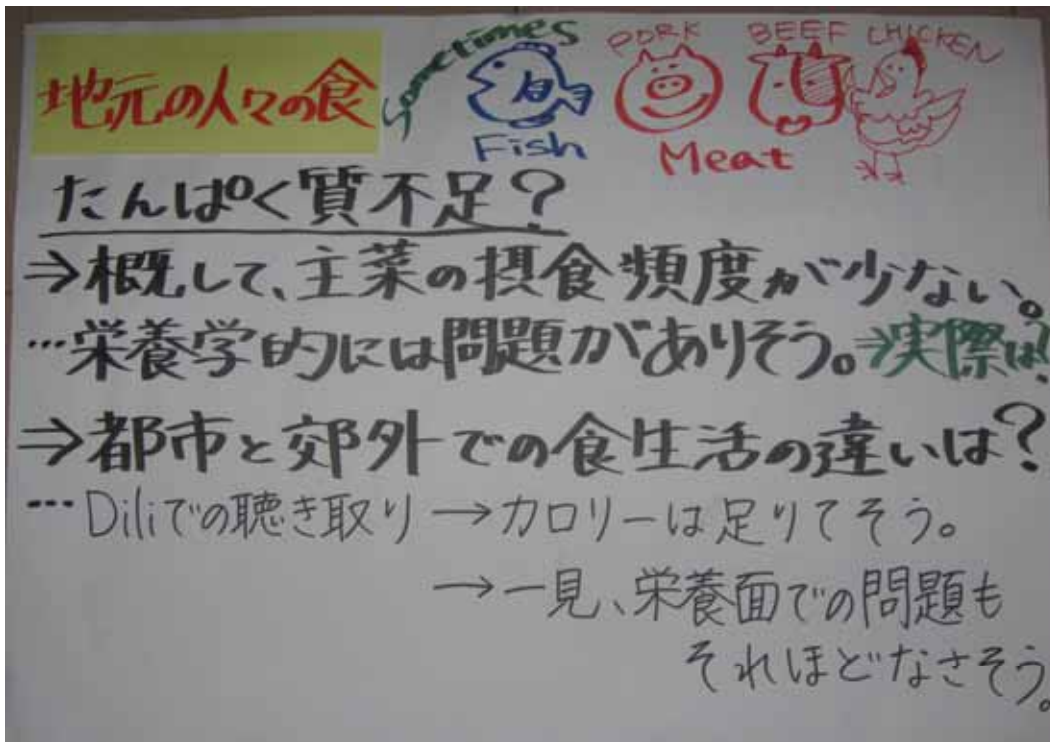
① 仮説... Sustainable Toiletsをいよむ要因は  
(1) 下水道システムの未整備 (2) 使用者のメンテナンス意識不足  
(3) 現地風土に適したトイレの不足 (4) 公共性の意識不足

## ② 調査結果

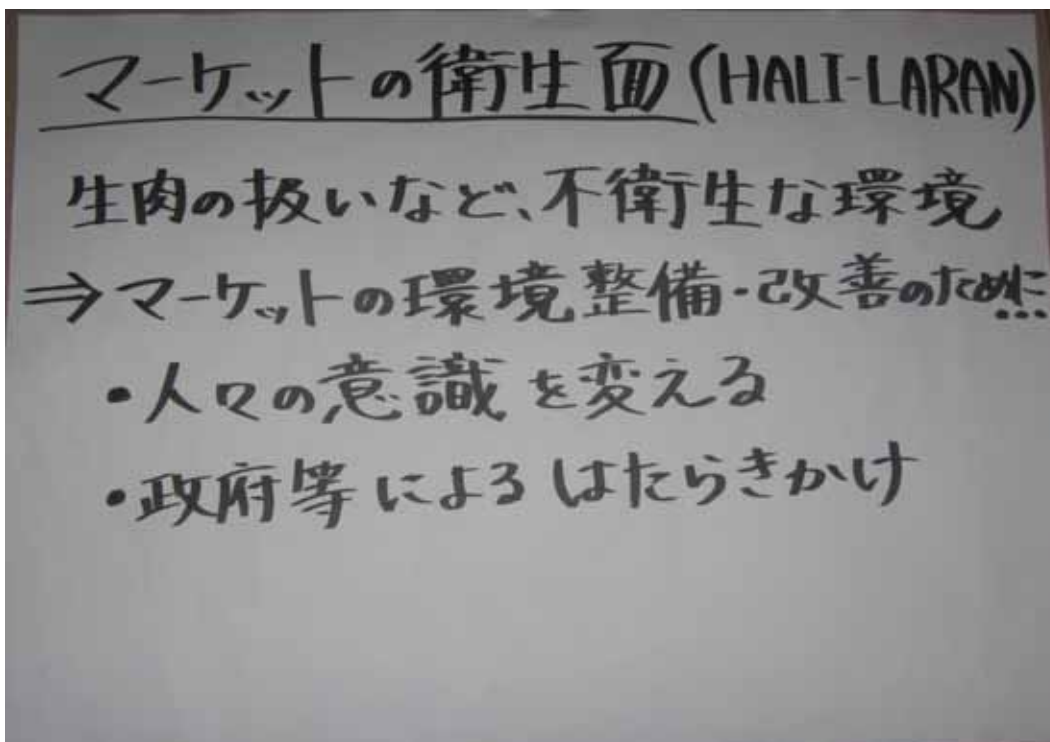
- ・今回訪れたトイレはほとんど清潔に管理されていた。
- ・かつては学校でトイレ指導はされなかったが、レテフォホでは2008年から医療スタッフによって年4回全ての小・中・高で衛生指導が始まった。  
→家庭内でも親が子へ衛生習慣を適切に伝えることを其の務め
- ・ほぼ全てのトイレは東ティモールの慣習にも合っており、きれいに維持されているので、メンテナンスや公共性に問題はない。  
外部から、現地の人々が管理・修理できない設備を導入することが、むしろ問題である。
- ・上水道パイプが届いていないため、地下浸透方式便所のある家で、地下水を飲み水にしていた人もいる。(Dili)  
→家庭トイレは地下浸透、学校トイレはバキュームカー
- ・UNICEFによれば、村民がトイレについて互いに啓蒙しあう動きもあるが、長年の慣習・隣家との遠さのために屋外排泄は34.5%ある。  
→依然として コミュニティレベルの衛生指導 と メディアによる衛生知識の普及 の両方向から意識を高める必要性  
(bottom up) (top down)

## ③ 今後への応用

- ・トイレができたことによる村民の精神への変化をもっと知りたい
- ・人間にとって不可欠な設備であるトイレについて東ティモールの事例を生かして他国にも研究応用できるとよい



▲  
食・栄養グループ 船渡 恵  
▼





## 病院 UNICEF

病院 (レテホ)

下痢: ポカリみたいな薬  
(無料)

栄養失調: トウモロコシの粉  
+  
multi vitamin  
薬

\*  
以前のレテホの給食  
(rice, bread, milk, carrot, beans)

→ 栄養失調に対処できて  
いるのか?

## UNICEF

- 2011 WFPから政府がひきつぐ
  - 1日15セント分支給  
(local farm 発展のために現物支給  
から現金支給に移行)
  - 給食で満腹になることによる  
波及効果
  - 幼いときは栄養失調があと危険性
- government, local 双方を視野に  
いれ、2つのズレを埋めると  
働きかけをしてほしい

▲  
食・栄養グループ 榎本 絢夏  
▼

## 学生の食生活

レテホ公立小学校

3ヶ月に1回 cooking competition

→ 男女参加。(キャッサバ・キャッサバケーキ・タロイモ・ライス)

現在給食なし親の協力で12時に昼食。

コモ村私立中高一貫

昼食は家で食べる OR 売店で買う。炭水化物、揚げ物中心。


政府は予算のやりくりを改善すべき。

給食文化が無い? ← みんなで食べることで得られる教育。

給食は小学校まで提供。1人15¢/日  
 WFPの支援 → 2011〜政府  
 現在予算が通るまで停止。親の協力  
 レテフォホ小学校 cooking competition  
 給食文化が無い? ←皆で食べる教育  
 政府の予算のやりくりに対してUNICEFの圧力不足。

食・栄養グループ 上田 由理佳

**Timor Coffee**  
**Peace Winds Japan**

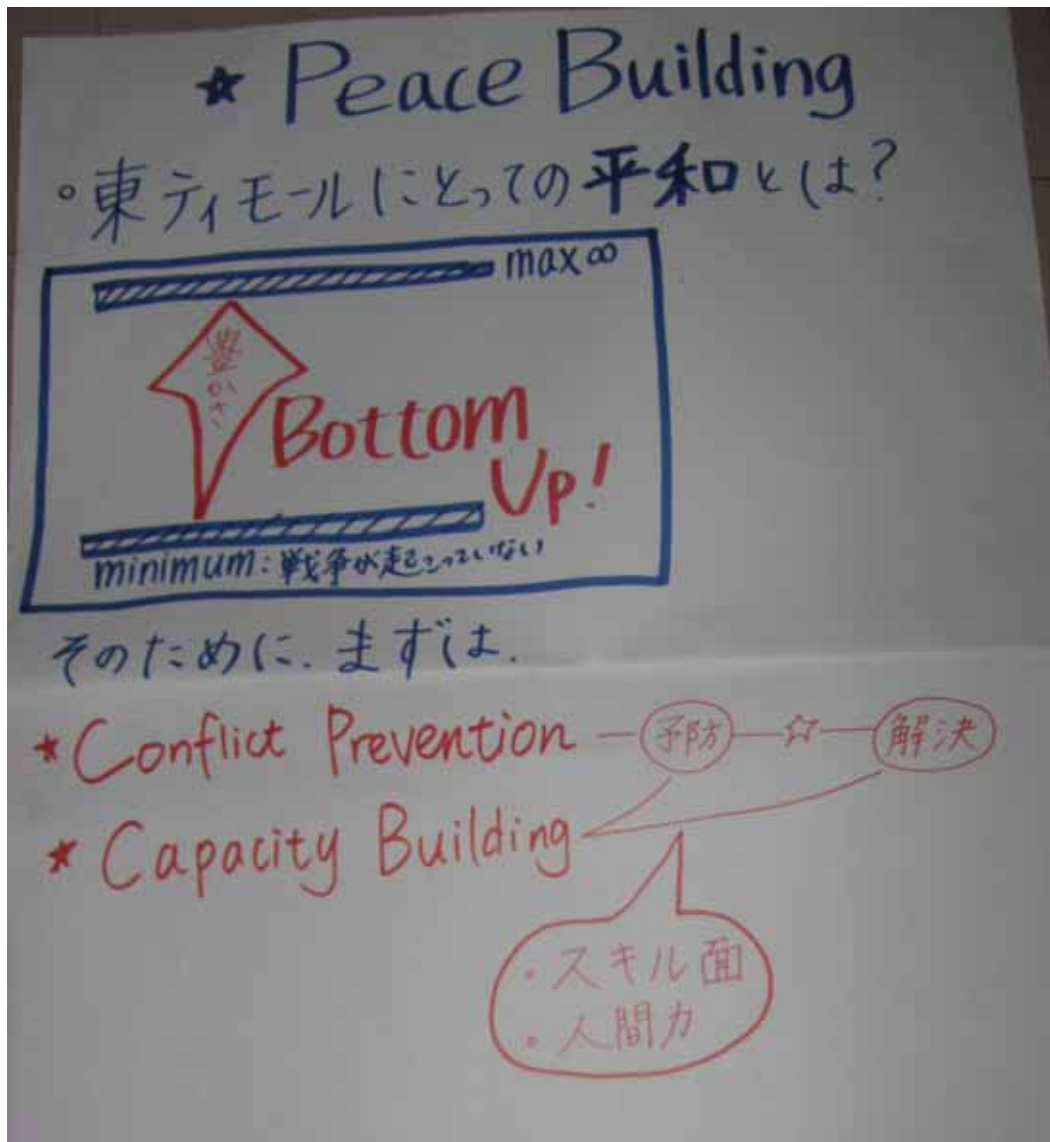


コーヒー農家の組合(10名)と契約、豆を買いお金を支払う  
 組合のリーダーでなくても同じ額  
 脱穀までも任せると高く買い取ることができる ⇔ CCT  
 コーヒー豆 1kg; 2003年1ドル → 2009年3ドル  
 農家の収入 1000ドル~/年(-括弧) Timorでは裕福

① 実際の生活は?  
 ・子供や女性も手伝い | 日中働いている (AM8:00~夜中)  
 ・大学を卒業してもコーヒー農場へ戻ってくる。

★ the happiest time: お金を稼いだ時

食・栄養グループ 池田 亜柊



### 平和構築グループ

武田 真佑子

笠 智遥

鈴木 実穂

齊藤 美咲

柳下 明莉



# 気づき



"戦争体験を、日本と東ティモール、世界中に  
いかにして語り継ぐことができるのか?"が  
重要だね。

そうだね。でも、今回東ティモールを見て  
悪い印象が残らなかつたんだよね〜。  
つながっていくことが大事!!



東ティモール人主体のやり方を大事にして、それを  
共有していくことが大事。"共に生きる"をキーワードに!

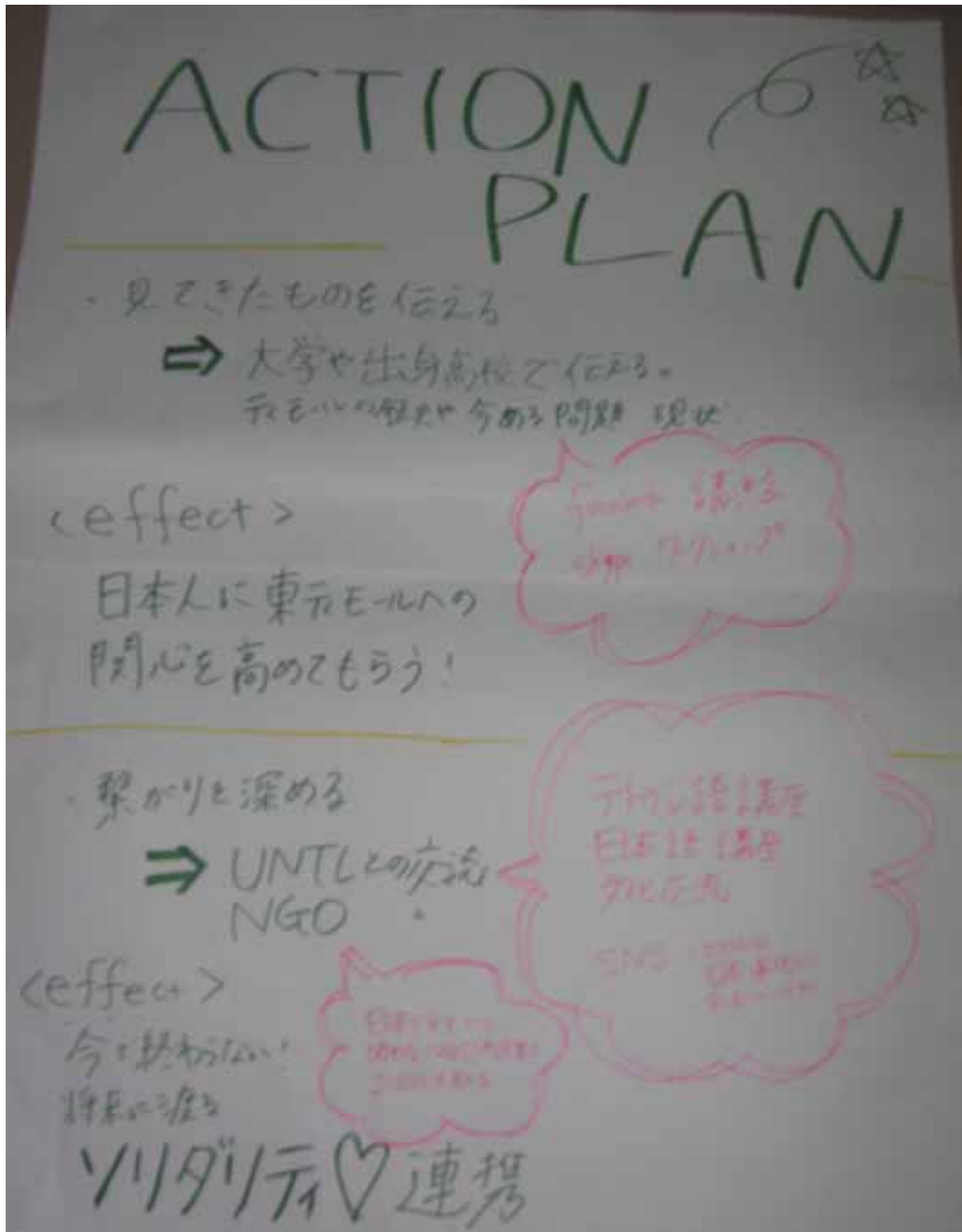
受身的な性格を、ふまえて、こちらから刺激を  
与えていくことが大事!



東ティモール人のことは"Solidarity"を、  
日本からも大事にしていくことが必要!

## 平和構築グループ

武田 真佑子  
笠 智遥  
鈴木 実穂  
齊藤 美咲  
柳下 明莉



平和構築グループ

- 武田 真佑子
- 笠 智遥
- 鈴木 実穂
- 齊藤 美咲
- 柳下 明莉

---

グローバル社会における平和構築のための大学間ネットワークの創成  
—女性の役割を見据えた知の国際連携—  
平成24（2012）年度 事業実施報告書

東ティモール国際調査

2013年3月

お茶の水女子大学 グローバル協力センター発行

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1  
TEL /FAX:03-5978-5546 E-mail:info-cwed@cc.ocha.ac.jp

印刷：株式会社 コームラ

---

